

---

# 合鍵

歌月 碧威

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

合鍵

### 【NZコード】

N4258D

### 【作者名】

歌月 碧威

### 【あらすじ】

両親が海外赴任をする事になり、一人暮らしをする事になった桜音。女の子の一人暮らしは心配だと、両親はある人物との同居を提案してきた。その人は、桜音の通う学校で王子と呼ばれる人物で：

## プロローグ

しかし、歌いすぎた。

気休め程度に、喉をさすつてみる。

さつきまで春休み最後の遊び収めと称し、友達とカラオケで盛り上がりっていたのだ。

明日起きたの七時ぐらいでいいかな……なんて事を考えながら玄関のドアを引き、足を踏み入れた。

「ただいま」

「おかえり。さくらね桜音」

えつ。

聞きなれない声に出迎えられたので、思わず顔を上げる。

そこにはキュー・ティクルの傷んでいない黒髪に、整った顔立ちをした長身の青年が立っていた。

そのへんの雑誌に載っていても違和感はないだろう。

「在原海あいわらかい……」

なんでこの人がここにいるの？

面識もないのに、思わず呼びすてにしてしまった。

その人は私の通う白塚高校では、王子と呼ばれ知らないものはいないというぐらいの名人。

そのため、私も彼の事は一方的に知っている。

顔よし、頭よし、おまけに家が金持ちという、天は一物以上与えてしまったというなんとも羨ましい存在だ。

もちろんそんな好条件だから、女の子達が放つておくわけがない。

入学当初から騒がれた。でも、それは最初だけ。

携帯で撮られたり、おっかけの女の子達のせいで、部活が出来なかつたりなんだかんだしてとうとう本人がキレたのだ。

それ以来、みんな遠まきに眺めたりして大人しくしている。

もしかして家間違えた？否、さつき『逢月』<sup>あいづき</sup>って書かれた表札みたもん。

それに、ここ私のうちの玄関だ。この特徴的な玄関はつちしかない。玄関わきに並べられてこるものに目を向ける。  
あ、やつぱりまだ。

こけしを確認すると納得した。

一、一一体ならいいけど、こう十数個並んでいると不気味だよね。

うちのお母さんは民族マニア。

旅行先などから大量に買ってくるため、置き場がなく仕方なしにここに飾っているのだ。

ここがうかつて事は……ああ、夢か。

これが俗にいう白痴夢つてやつですか？

そうだよね。じやなきや、王子がこんなとこにいるわけないもん。とりあえず、夢なら目覚めなければ！！

思ひたつたらいざ行動と、思いつ切り類を引っ張つてみた。

ほら、よくテレビとかでやるじゃん。夢かと思つてほっぺたを摘むつてやつ。

「痛いんですけど」

つてことは、現実？いやまた、幻覚といつ線も考えられる。

「お前、何やつてんだ。早く上がれ」

「うわ！」

掴まれた腕を、思わず放つてしまつ。

だつて、幻覚だと思ったのに感覚があるんだもん。

拒絶が気に食わなかつたのか眉間に皺をよせ、しつちを睨んでいる。体を縮め、思わず目をつぶつた。怖い。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

繰り返していた謝罪の言葉は、体を包んだ暖かいものせいで途切れた。

「そんなに怯えるな」

優しい声と共に、頭を撫でられる。

視界は彼の胸に遮られ、私の背中には手が当てられている。この状況は、抱き締められているの……？

何が起こつてゐるのか理解できない私を、リビングから現れた人が呼び戻した。

「あら。おじやまだつたかしら」

エプロンをつけた女人人が、口に手をあてて立つている。お母さんだ。

「ちがつ」

顔に血液が集中しているのか、火照つてゐるのがわかる。

私、今絶対顔赤い。

「知らなかつたわ。一人がそうゆう関係だつたなんて」

「いえ。ただ桜音さんが、転びそうになつたので抱きとめただけですよ」

「そうちの？でもお母さんは、海くんと桜音がそういう関係になつても構わないわよ？」

「はつ！？無理でしょ。隣に立つのも嫌」

うつ。

また、睨まれた。

「とりあえず、二人共リビングに入つて。桜音、貴方にお父さんから大事な話があるそつよ」

この時の私はその大事な話が、私の平凡な生活に嵐を巻き起こすなんて思いもしなかった。

# 第一章 第一話 おはぎは甘いが、現実は甘くない

あー。やっぱ落ち着く。

手から伝わる湯呑の温もりが、平穏をもたらしてくれる。  
隣には在原、テーブルを挟んで目の前のソファには、両親が座っている。

あれから場所をリビングへと移し、私たちはみんなでまつたりとお茶を楽しんでいる。

両親と在原は何か会話をしているが、私にはそんな事よりもいま口に頬張っている物の方が大事だ。

これは在原が持ってきてくれた彩堂のおはぎだ。

予約しなきや買えないぐらいの人気で、私の大好物ランギング第一位に輝くぐらいの代物。

もつと食べたい……

自分の皿はすっかり空になっちゃったので、ついついテーブルの上に乗っている他の人のおはぎに目が行ってしまった。

食い意地が張っていると言われるには嫌だが、このおはぎに関しては別だ。

みんな半分以上残っている。隣の人いたっては、まつたく手をつけていない。

食べないなら、くれないかな？

視線が気になつたのか、在原は笑いながら皿の前におはぎを差し出してくれた。

「やる」

「いいの！？」

ありがとう。とそれを受取ると、一口に切つて口に運ぶ。

この人、もしかして良いやつかも。

「つまつ」

もひ、語尾にハートをつけたい。あ～。幸せ。

「 で、話をそろそろ始めたんだが  
あ。すっかり、忘れてしまった。

そういうば玄関先で何か大事な話があるとか言われたつけ。  
実はさつきお父さんが話を始めようとした時に、お母さんがおはぎ  
を出してきましたの。

そして、それを見た私が狂喜乱舞。呆れて話が中断になってしまった  
たのだった。

「桜音。やつぱり父さん達と一緒に行かないか  
またその話か。

今度お父さんは、仕事の都合で一ヵ月に転勤になったそうだ。  
その為一人残すのも心配だから、私も連れて行きたいらしい。  
「嫌。学校だつてあるし、友達と離れたくないもん」

せつからく高校で出来た新しい友達と離れるなんて嫌だし、それに何  
より英語の成績がギリギリの私が、海外でやつていけるはずがない。  
「大丈夫。料理だつて洗濯だつて出来るし。何かあつたらお兄ちゃん  
達もいるから平氣だよ」

うちちは元々共働きだから、家事は中学から少しづつやってきた  
から出来る。  
なにか問題が起きたら、結婚して隣町にいるお兄ちゃんに頼れば安  
心だし。

そのため一人でも別に問題はないとつく。

私の返事にお父さんは目を閉じ何か考えこむと問題発言を口にした。

「わかつた。それなら、海君と一緒に暮らしなさい」

は？

あいた口が塞がらない。なんでいきなりそうなるの？

お父さんは、そんな事は構わずに話を続け始めた。

「女の子の一人暮らしは防犯面等を考えるといろいろ心配だ。その事を考えると、海君がいればなにかと安心だろう」  
さも当然のような顔をして、お茶をすすり始めた。

こんな突然の事に、納得が出来るはずがない。

「そもそも、根本的におかしいから。同じ屋根の下、男と女が住むなんてどうかしている。娘の身に何かあつたらどうするの…？」  
思わずテーブルに身を乗り出して、睨みつけた。

それでも冷静に、「母さん、お茶」などと言いながら、湯呑を差し出している。

「海君がうちの娘に何かするはずがないだろ？。お前は父さんと母さんの遺伝子を継いでいるからな」

ああ。すみませんね。

どうせ、平凡ですよ。人並みですよ。

「そんなら、私がこの人に何かしたらどうするの？」

隣に座り自分も関係があるのに、全然会話に参加していない人物を指差した。

子供の頃に、「人様に指を指してはいけません」と言われたけどこの際しようがない。

「お前をそんな娘に育てた覚えはない！－！」

さつきの私と同じように、ドンと音をたててテーブルに手をつけ身を乗り出している。

お父さんは怒りで顔が真っ赤だ。

「……ごめんなさい、ただ言つてもみただけです」

「お前が日本に残る条件を覚えているか？」

「うん。啓吾さんの娘さんと一緒に暮らす事でしょ。私は大丈夫で

も、啓吾さんの娘さんなら相当美人だし危ないんじゃないじゃないの？」

在原啓吾。お父さんの会社の取引先の社長さん。

だいぶ前に奥さんに先立たれながら、お子さんを一人で育てているそうだ。

年もたいして変わらず出身も同じといふことで一人は馬が合い、たまに家に啓吾さんが遊びに来てくれる。

この間も家政婦のみちるさんと一緒に家に来てくれた。  
みちるさんは家政婦さんであると共に、啓吾さんの彼女さんでもある。

二十八歳で、私にとってはお姉ちゃん的存在の人。

そんな二人が、反対していた周りを説得してこのたび結婚する事になつたそう。

なんともおめでたい話である。

その為啓吾さんの娘さんが、一人を気遣つて家を出るのが心配だと  
いう話になつた。

一人暮らしを反対されていた私は、その子との同居を申し出たので  
ある。

一人はダメだけど、二人暮らしなら日本に残れるんじゃないかとい  
う算段もあつたし、やつぱりどこかで一人暮らしが不安な所もあつ  
たから。

この提案には両親も賛成し、私は無事日本に残る事になつたのであ  
る。

「そうだ。在原さんの『子息との同居だ』

『子息？まさか  
たしか、この人も苗字は在原だよね。そういうえば、よくみると顔の  
パーティとか似ているかも。

彼の顔を見やると、何事もないようにお煎餅を食べている。  
なんでお煎餅食べていても、絵になるんだろう？

「在原啓吾は、俺の親父だ」

それは、ここの流れでわかつたよ。それより、大事なことはそんな事じゃない。

「ちょっと、この人男だよ！！」

「お前は、海君が女の子見えるか。それに在原さんは、一言も娘なんて言わなかつたぞ」

たしかに圭吾さんは言つてないよ。こつも「うちの子」とてしか言ってないもん！！

「見えるわけないでしょ。それにこいつが男なんて事をつき味わー

さっきの玄関での抱擁の映像が頭の中に浮かんできて、思わず口ごもつてしまつた。

女の子と違い、硬い筋肉質の体に、低い声  
思いだしたら、また顔に血液が。

「どうした、桜音。顔が赤いぞ？」

在原は、そう言つてクツクツと喉で笑つた。

……うう、絶対私をからかつて楽しんでる！！

「とにかく。一緒に付いてくるか、海君と一緒に住むか、どちらか  
しか選択はない」

そう言つて、お父さんは英語で書かれた学校のパンフレットをテー  
ブルの上に置いた。

二者択一。

私は、日本に残りたい。  
とこうことは

.....ああ、無常。

## 第一話 憶める少女

久し振りに見た校庭の桜は、もうすっかり見ごろだった。  
普段の私なら、花見だーと騒いでいる所だが今はそれどころではない。

この頭の中に棲みついている問題をなんとかしなければ。

「はあ……」

新学期初日だというのに、本日何度目か分からぬ溜息を吐きだす。  
別に在原海個人が嫌いってわけじゃないよ。  
それに好き嫌い言う前に、よく知らない人だし。  
てっきり女の子との同居だと思っていたのに、あてが外れてしまつたのが嫌なのだ。

女の子同士ならある程度生活パターンが似ているはずなのに、それが男の人との生活となるといろいろ面倒になる。  
だってジャージ姿で口口口口してるとか、髪ボサボサの寝起きとか見られるんだよ？  
キチンとした生活送れって事なのかな。

「……音」

でも家でぐらぐらダラダラしたい。  
とりあえず一緒に住むのは一週間後だか

「あ～く～ら～ね～…」

急に呼ばれた自分の名前のせいでの思考が途絶えてしまった。  
鼓膜が  
キーンとする左耳を押さえ、叫んだ主を睨んでやつた。

「こんなことをするのは、一人しかいない。」

「涼つ……」

水谷涼。みずたにりょう 私とは中学からの男友達。

涼とは中学からずっと同じクラスで、今までいっぱい助けてもらっている。

お互い家族ぐるみの付き合いで、涼は半ば私の保護者代わりだ。いつも明るくて、太陽のような人。

そんな性格の為、人見知りをしないなんとも羨ましい性格をしている。

「おはよう」

バスケ部なので背が高い。涼の身長は、180?。

私は155?だから結構差が大きい。

そのため涼の事を見上げる形になっちゃうので、たまに首が痛くなるんだよね。

涼はさわやかな朝に相応しい笑顔を撒き散らしていた。

「も～、おはようじゃないよ。朝から、耳元で大声出さないで……」

「悪い。悪い。何回呼んでも返事しないからさ」

「そう怒るなよ～」と言しながら、頭を軽く撫でてきた。

あ～、呼んでたんだ。全然気付かなかつたや。

「……ごめん。ちょっと考え方してたの」

「そんな考え方込まなくとも、大丈夫だつて」

「そうかな」

「そうだよ」

涼にそう言わるとそんな気がしてくる。  
なんか不思議。

つていうか、涼つてこの事知つてたっけ？私、言つてないよね？

「そんな考え込まなくたつて、きっとまた同じクラスだぞ」  
は？同じクラス？在原海との同居の事じゃないの？

「あつ、忘れてた」

うちの学校は一年になると、理系文系に分ける為にクラス替えがあるのだ。

もちろん私は数学苦手なので、文系。  
やばい、急いで掲示板に行かなきゃ。

「早く見に行こうーー！」

私は涼の腕をつかんで引っ張った。

考えるのは、後でいいや。

そんな事より今は、クラスのメンツの方が気になる。  
みく達と同じクラスだといいな～。

そんな時だった。

ざわめきと共に、私を悩ます人の人が現れたのは。

## 第三話 流れに身を任せることのないのです

「おはよう。桜音、涼」

振り向くとそこには、これまた朝に相応しい笑顔を携えた在原の姿があつた。

涼の無邪気な笑顔とは違い、こつちは洗練された大人つて感じがする。

落ち着きがあるから、そう思うのかな。

もちろんそんな笑顔を見せられた周りの女の子達の様子が一変したのは言うまでもない。

「はよ～。海、それに片桐も」

片桐？

涼の視線を追う。

在原の隣には、モデル体型の女の子が寄り添つようになっていた。すごい美人。こういうのって、クールビューティっていうのかな？

切れ長の目に、手入れの行き届いたロングの黒髪。

背は高めで、細いのに出るところは出ている。

なんとも羨ましい体型だ。

あれ？この人、どつかで見たことある……

あんなに美人なのに、はつきり覚えていないのが悲しい。

どれだけ記憶力がないんだよ。私。

曖昧な記憶から名前をなんとか思いだそうとしたけどやつぱ無理。仕方なく涼に視線を投げかけると、マネージャーだよ。と教えてくれた。

片桐麗香男子バスケ部の美人マネージャー。

部活の時、在原の傍にいるのを何度も見かけた事がある。

片桐麗香

かたぎゅうれいか

「おはよう。水谷くん。それから……」

その美人さんは、涼から私に視線を変えた。

「たまに水谷くんの試合見に来てくれる子だよね」

何回かしか行つたことないのに、覚えてくれてるんだ。

「逢月桜音です」

私はあわてて、お時儀をする。

勢いが良すぎたのか、鞄につけていたキー ホルダーがガチャガチャと音を立てた。

「かわいらしい彼女だね」

口元に手を当てて、クスクスと小さく笑う。

彼女じゃないんですけど……

よく一緒にいるせいか、たまに間違われてしまうんだよね。

「ち

「行くぞ」

違いますと口を開きかけた瞬間、体が勝手に校舎側に動いてしまった。

な、なんなの！？

在原に手を掴まれ、私は引きずられるように連れていかれていた。掴んでいる本人は、何が気に食わないのか眉間に皺をよせしかめつ面をしている。

「ちょ、ちょっと」

呆然としている涼と片桐さんの一人を残し、私たちはその場を後ろにした。

「もう、いい加減離して」

無理やり手を振り解く。

私は結局そのまま引きずられ、中庭まで連れて来られた。いつもは賑わっているこの場所も、時間帯のためか誰もいない。なんなのよ、一体。

在原は、無言で腕を組んでこいつを見ている。

「彼氏のくせに彼女置いてきちゃ、マズイでしょ！？ 戻ろうよ」「みんな

何も言わないでこんなとこ来て、絶対に彼女変に思う。

クラス替えの表も見なくてはならないし、とにかく学校の中に早く行きたい。

「チツ

私の何が気に障つたのか舌打ちが聞こえたかと思つと、いきなり右ほっぺを掴まれた。

「いひやい」

「この口か？ 片桐の事を彼女だと言つた口は。あいつが勝手に俺に付きまとってきてるだけだ。付き合つてなんていない」えつ、違うの。だって、そういう風に見えたんだけど。

「それに俺は

在原は何かを言いかけたかと思つと急に、

「そういや、おまえあの時、涼の彼女って言われて否定しなかつたよな？」

と言しながら、空いた手でもう片方を掴まんできた。あれは貴方が無理やり引っ張ってきたせいじやん。

そりゃ言いたいのこ、口が言つことを聞いてくれない。

「今度から、否定しないよ。わかったか？」

涙目で頷くと、やっとほっぺが解放された。

つだ〜痛い。

痛みを紛らわすため、さする。

気休めにもなりゃしない。

なんで怒られなきやならないのよ……  
もしかして片桐さんの事苦手なのかな?

## 第四話 窠地に現れた女神

なんでこいつなるかな……

私は只今後ろを壁に、周りを見ず知らずのお姉さま達に包囲されている。

今思えば、少し警戒心を持てばよかつたのかもしれない。  
中庭から教室まで移動中に呼び止められ、「少し手伝ってくれない？」との誘いに文句に自分からのこのこいつにて行つてしまつたのだ。  
んで、来てみればこれ。

「あなたが、逢月桜音？」

腕を組んだ中央の人物が私の名前を呼ぶ。  
この人たしか……在原のファンクラブ会長。

まじまじと人の顔を除きこんだかと思うと、鼻で笑つた。

「なんだ、大したことないじゃない」

「っていうか、普通じゃん」

「ねえ、会長本当にこいつで間違いないの？」

本当の事なんだけど、なんか瘤に障るんですけど。

「で、在原君とはどうこいつ関係なのよ？まさか、彼女とかじゃないでしょ？」

「いや、どういう関係も何もありませんけど」

「ならどうして、手を繋いでたのよ」

手？

ああ、朝のアレか。

でもあれは繋いでたといつより、引きずられていたという方が正しいんじゃ……

「本当に最近目障り奴が多いのよね。一年の片桐とか。一年も入っ

てきた事だし、和を乱さないでほしいわ

一々こんな事で呼び出されるなら、もし一緒に暮らした時バレたら

私はどうなるんだろう。

そんな」とを考えただけで、憂鬱になる。

「とにかく、一度とあの人に近づかないでちょうどいい」

「嫌です」

自分でも思いも寄らぬ言葉に驚き、慌てて口を塞ぐがもうすでに手遅れ。

なんでそんな事を言ってしまったのだろう。

わかりましたって言つておけば、この場合は丸く収まるのに。

そのセリフを聞いた会長さんは、烈火の「」と怒り私を壁に押した。

「……っ痛」

背中に鈍い痛みが走ると共に、体に力が入らずそのままずるずる床に座り込むんです。

「もう一度言うわ。一度と近づかないで」

近づこうか、遠ざかるのが誰にも許可なんていうない筈だと思つんんですけど。

なんか、だんだんバカバカしくなってきた。

ファンクラブだからって、交遊関係まで口挟む権利なんてないんじやない。

「嫌です」

「言葉で言つても分からぬのね」

そう言つて、右手を振り上げる。

やばっ、叩かれる！思わず目を瞑つたのと同時に扉が開け放された。

「こなんところで何をしているんですか。ここは授業以外の立ち入

りは禁止されています！！」

そこに視線を向けると、綺麗めの美人が扉に手を掛けっていた。  
白陶器のような肌に、耳が隠れるぐらいまで伸びた色素の薄い髪が  
よく合っている。

「どうして、千里ちゃんがここに？」

彼の名前は藤原千里。

その姿から男なのに、学園三大美女の一人として数えられている。

千里ちゃんの大きめの瞳が私を捉えると、この状況を判断したのか  
綺麗な顔が歪んだ。

「千里ちゃん」

私が彼の名を呼ぶと、腰に手を回し立ちあがらせてくれた。

「大丈夫ですか？ 桜音さん」

「うん。全然平気」

そのまま言つたものの、千里ちゃんの制服を掴む手が震えていた。

「一度と桜音に近づくな」

千里ちゃんはそのままお姉さま方を睨むと私を教室から連れ出  
してくれた。

あんな千里ちゃん初めて見た。

いつもの千里ちゃんとは違い、敬語じゃなかつたし、声色とかも全  
然違つた。

## 第五話 それぞれの想い

「今、みぐが来ますから」  
千里ちゃんは携帯をブレザーこしまい込むと、私の隣の腰を落とす。

私はまた朝居た中庭に戻つてきいていた。  
少し落ち着くまで、休もうとこう千里ちゃんの言葉に甘えたのだが。  
ベンチに座り空を見上げと、雲がゆっくり流れている。  
なんだか、朝からいろいろあり過ぎや。

「当分一人では行動しないで下さいね」  
「うめんね。迷惑かけて」  
「そんな事ありませんよ」  
どうやら教室に来なかつた私を心配して、涼とみくと一緒に探してくれていたらしい。

「今年は、千里ちゃんと同じクラスなんだね」  
「そうです。涼もみくも一緒にですよ」  
「やつた」

良かつた。知らない人ばかりだつたらどうしようかと思つてたんだ。  
千里ちゃんとは、みくを通じての友達だ。  
みくの幼馴染が千里ちゃんだったのだ。  
最初見たときは、綺麗な女の子だと思ったんだよね。

「僕も一緒に嬉しいですか……？」

「うん。嬉しいよ」

そう言つたら千里ちゃんは、はにかんだ笑顔を見せてくれた。  
千里ちゃん去年は違うクラスだったから、同じクラスになつたのは  
嬉しい。

「桜音さん。在原海の事をどう思いますか？」

急に真顔になつた千里ちゃんに、私は戸惑つた。

どうしてその質問が出てきたのかその意図がわからない。  
どうして、どうこう意味だらけ……？

大変そうとか？

「桜音……」

何と答えたらよいか分からずにはいると、大声で名前を呼ばれた。  
声の方向を見ると、そこには息を切らせた女の子が立つていて。  
綺麗に巻かれた肩まである髪に、ぱつちりのアイメイク、短いスカートからは小麦色の細い足が見える。

彼女は、佐々木みく（ささきみく）。

去年同じクラスになり、部活も一緒だったため仲良くなつたのだ。  
脇腹に手を当てて、苦しそうに肩を上下に動かしている。

「みく

「よかつた……無事で」

みくは私に近づいてくると、私をぎゅっと抱きしめた。

「変な連中が桜音のことを呼びに教室まで来たんだよ。桜音、なかなか来ねえし。もしかしたら、何かあつたんじゃないかと思つたら案の定この騒ぎ」

「大丈夫。千里ちゃんが来てくれて助けてくれたの」「そう言つたら、みくの顔が一瞬泣きそうになつた。

みく……？

「さつ、早く教室に戻ろう。千里も早く  
手を引引っ張られ、連れて行かれ。  
なんだか今日は、引っ張られてばかりだ。



**番外編 バレンタイン企画 欲しいものは一つだけ（前書き）**

海視点の過去編です。

## 番外編 バレンタイン企画 欲しいものは一つだけ

桜音を最初に見たときは、拍子抜けした。

まつたく想像と違っていたから。  
親父が可愛い可愛いを連呼していたものだから、勝手に想像してしまっていたのだ。

涼の隣で笑うあいっは、あまりにも普通そのもの。  
身長も高くも低くもなく、顔もスタイルも飛びぬけて良いつてわけではない。

でもいつからか俺は、そいつから田が離せなくなってしまったんだ。

今日は2月14日。甘いものが嫌いな俺は、この田は好きでは無い。  
でも、今年は違う。

初めてチヨコが欲しいと思つたし、初めて人がチヨコを貰つのを羨ましいと思つた。

あいっは誰にあげたのだろうか

「おかえり」

玄関先での思わぬ俺の出迎えに、靴を脱ぎかけていた親父の動きが止まる。

そりや、驚くだろう。

俺が親父を出迎えるなんて、ガキの頃以来だからな。

「何があつたのかい？」

滅多に見れない光景に親父が顔を顰めて尋ねてきた。

「ちょっと、欲しいものがあるんだ」

「なんだ。驚かさないでくれよ」

苦笑いで答えながら、二人リビングへと向かう。

「それで、一体何が欲しいんだい？」

ネクタイを緩めながら、親父が尋ねてきた。

俺は親父が鞄と一緒に置いた大きめの紙袋を持った。

「コレ」

「それ、君の嫌いなチョコだよ？それに、君の方が貰つていいだらう」

「貰つてない」

直接渡されたのは断つたし、机の中やロッカーに入っていたやつは人にあげた。

俺が欲しいのはただ一つだけ

紙袋を漁ると、そこには綺麗にラッピングされた箱が数十個入っていた。

そこから水色の包装に青いリボンのラッピングが施された物を抜き取り、残りを親父に返す。

その光景を不思議そうに見ていたが、納得したらしく一人頷いてくる。

「よくわかつたね」

涼も同じラッピングで貰つていたからな。

中身も同じなら、桜音手作りの生チョコ。

「欲しいなら、欲しつて桜音ちゃんに言えばいいじゃないか」「言えるかよ」

話したこともない人間から行き成り「チョコが欲しいです。」なんて言つたら、あいつがどんな反応するか分かり切つている。

「以外とヘタレなんだな」

「つむわこ」

「これ以上とやかく言われるのが嫌だから、部屋へと移動する事にしよう。

「ホワイトティーのお返しは、即ちで用意するから。親父からとじて渡してくれ」

「僕の分もチョコ少し残しておいてくれよ」

「こんな回りくどい事をしても、どうしても食べたかった。

来年こそは、桜音に直で貰いたい。

その為にせびりやつけて近づくか……

キッカケが欲しい俺に、チャンスが訪れるのは少しだけ先の話。

## 第一章 第一話 僕がいる

「不束な娘ですが、どうぞよろしくお願ひします」

「いえいえ。桜音ちゃんは、つむの息子には勿体無いぐらい出来た子です」

「そんなことないですよ」

路智さんは在原のお父さんで、情報系のサービスなどを展開している会社の社長さん。

モデルさんのようにカッコよく、路智さんの載っている経済誌は部数があがるらしい。

不束な娘つて、なんか嫁入りっぽいんですけど。

そう思ったのは私だけじゃなかつたらしく、

「なんか桜音が俺のところに嫁に来るみたいだな

と迎えに座る在原が口を開いた。

只今逢月家と在原家の両家が、うちのリビングで対面している。本田両親が日本を立ち、変わりに在原がここに住むようになるため、挨拶も兼ね在原家がうちに来ていた。

「そういえばみちるさん達、この後新婚旅行に行くんですね」

「そうなの。一ヶ月なんて私には贅沢すぎるのだけれど……」

そう言ってカップに口をつけると、今時珍しい染めてない髪が肩から落ちる。

みちるさんはブラウスにカーディガン、膝が隠れるまでの長さのスカートという

落ち着いた格好をしている。

「普段家事に追われているのだから、ゆっくりしてきたりこにわよ。

お父さん私もあっちに着いたら、どこに行きたいわ~」

啓吾さん達はこれから、一ヶ月海外を転々と旅行するらしい。

一ヶ月なんて私には長くようを感じるが、世界は広いし、いろいろ見るところがあるから

あつと言ひ間に過ぎてしまふのかもれない。

「桜音ちゃんこ、たくさんお土産買つてくれるかい

「俺には?」

「わたくしん買つてくれるよ」

啓吾さんは、苦笑いで在原に言葉を返した。

三十分ぐらじしたといひで、時計の鐘が別れの刻を告げた。

「やうそろじやない?」

「やうだな

もうそんな時間なんだ。

みんなで荷物と一緒に外に止めてある啓吾さんの車に移動した。  
このまま四人で空港まで行くそうだ。

「そんな顔しないで桜音。私達行けなくなっちゃうでしょ?」

お母さんは、そつと私の頬に手をかける。

そんな顔……?

どんな顔してるんだい?。わからない。

ただ、もうお別れかと思つと心が少し苦しい。

「火の元ど、戸締りに気をつけなさい。あと何かあつたら、必ず電話するよつこ」

「あい。お父さんったら、何もなくても電話しなさいでしょ?」

お母さんが笑つて言つたけど、私はうまく笑えない。  
やばい。視界が滲んできちゃつた。

大丈夫だつて思つたんだけどな……  
自分で選んだんだけど、いざその時を迎えるとやはり一人取り残  
される感覚に陥る。

「俺がいる」

その声と一緒に、右手にぬくもりを感じた。  
顔をあげ隣を見ると、在原がいた。

「だから、ちゃんと見送ろう。な？」

私は首を縦に振ると、「…………」と震える声で両親  
を見送った。

## 第一話 いたる場所に勝負！！

「なんで急にスピード速くなつてんのーー？」

「さつきアイテム取つたから」

「するいーー！」

「そういうゲームだから」

「なら、私もーー」

あ、クラッシュ。やっぱ話しながらするとダメだ。

私と在原はコントローラーを手に、只今テレビ画面と睨めつこ中。

二人残され氣まずさに耐えきれなくなつた私は、何を思つたかゲームをしようとも在原に声をかけてしまつたのだ。

しかもゲームはありがちな、カーレースのやつ。

あれなら、難しい操作とかしなくても大丈夫だしね。

「忘れてないだろうな？桜音」

「うん。でも勝負はまだついてないよ」

思わず、コントローラーを握る手に力が入る。  
絶対負けないんだから。

だつて、負けたら

「俺の勝ち」

画面を半分に分け両手をあげバンザイをしているキャラクターと、膝をついている対照的なキャラクターが映し出されている。

あのクラッシュが痛かつたのか、それとも私の腕が悪かつたのか大差で負けてしまった。

「桜音、覚えているよな？」

「何が? とはまさか言えないよね。」

「うん、覚えてるよ。だから、負けたくないなかつたんだもん。」

「……負けた人は、買った人の言う事をなんでも聞く事」

「はい、良くできました」

「そう言って、頭の上に手を乗せられグシャグシャにされる。」

「私と在原はまだゲームをするのはつまらないから、賭けをする事にしたのだった。」

それは敗者が勝者の言うことを無条件で呑むところのもの。

「言つておくれけど、高いのとか駄目だからね」

「何奢らされるのだろう。」

「今バイトしてないから、お小遣いあんまないから高いのだと無理……」

「物じゃないから」

「物じゃないって事は、何?」

想像が出来ないので思わず首を傾げると、在原はふつと笑った。

「今度から俺の事、名前で呼んで」

「無理」

「これにはさすがに即答で答えた。いきなり慣れてもいない人を名前で呼ぶなんて出来ない。」

「負けた人に拒否権ないし」

「無理だつてば……」

「涼やあの女男の事は名前で呼んでるのに、なんで俺は呼べないわけ?」

「在原はしかめつ面でこっちを見てる。」

「ちょっと、女男つて千里ちゃんの事じゃないでしょうかー?」

「今は女男の事なんてどうでもいいんだよ」

「よくないつてば……」

「なんでそんなにムキになんの？」

千里ちゃんは女顔の事を酷く気にしている。

羨む美貌で学園三大美女に入った事も本氣で嫌がっていた。

男が女みたいて言われても嬉しくも何ともないって……

「とにかく、そういう事言わないで」

ゲームでなんとか沈黙から逃れたはずなのに、さっきとは一遍重苦しい空氣に包まれる。

う、どうしよう。重すぎる。

沈黙とかそういうの苦手な私には、この場所は居にくい。

逃げたい。今すぐこの部屋から脱出したい。

逃げたとしても、この不安定な状況が変わる事はないけれども。そんなときだつた。機械的な音楽が二人の間を流れ始めたのは。

「誰か来た」

来客を告げるメロディに促されるように、不機嫌気わりない奴を置いて玄関へと足を向けた。

「はい」

ガチャつとドアを開け放つと、朗らかな光が出迎えてくれた。

そこに立つて居たのは、もう見慣れて人物だつた。

外の天氣と同じぐらいあつたかい空氣を纏つた人。

「よつ桜音。一人で寂しがつていると思つてさ。あとこれお袋から煮物だつてさ」

「涼」

安堵感から思わず涼に泣きついてしまつた。

昨日学校で会つたばかりなのに妙に懐かしい。やつぱ氣心しれた人は落ち着く。

「なんだ、やつぱ寂しかったのか？」

「ううん、違う。もう空気が重くて仕方なかつたの」

「換気でもしたらいいんじゃないかな？」

いや、そういう意味じゃないんだけど。まあ、いいや。

知つている人が来てくれたからか、私の心はすっかり落ち着いて平靜を取り戻していた。

「ありがとうございます、おばさんにもお礼言つておいて。あつ、上がつってお茶でも入れるから」

涼に入るよつに促して、玄関で靴を脱ぎかけていた時に気づいた。忘れてた。この現状を。

これつてまずくない？  
たしかリビングには

「桜音？」

一人思案に暮れドアに手を掛けたまま動かない私を、怪訝そうに涼が様子をうかがっている。

「ごめん、今散らかつててさ。ちょっと待つてて」  
玄関で涼に待つもらつて、リビングへと急いだ。  
いくら涼でも、この事がバレるわけにはいかない！



## 第三話 今日からみじくな

「大変、涼が来ちゃったの……」

リビングに戻ると在原は、長い足を組みソファにもたれながらテレビを見ていた。

「良かつたじゃん。お前の大好きな涼が来て」  
すっかりリラックスモードの彼は焦ることなく、なんなりと会話を終了させた。

なぜそんな落ち着いたちやつてるのよ。しかもなぜか大好きな所だけ協調されたような……

「だから少しの間だけ隠れて」

「別にいいじゃん」

いやダメでしょ。バレるって。

まだ機嫌が悪いのか視線はずつと画面を見て、一向にこいつを見てくれない。

「お願だから」

座っている在原の腕をとり、引っ張つてみるとやつぱり動かない。  
あまり接点がない在原が居たら、絶対涼だつて不審に思つ。

「桜音？」

やばい。早くなんとかしなくちゃ。

「呼んでるぞ」

いちいち言わねなくてもわかってるよ。

はつきりと玄関から涼の声が聞こえたんだから。

なんとか機嫌を戻してもらつて、わざと隠れて貰わなければ。

……というか、そもそもどうして機嫌悪くなつたんだっけ？

千里ちゃんを庇つたから?ううと、違う。たしか名前で呼ぶのを拒

否したから。

そんなに名前で呼ぶって重要なのかな。

「海、お願い」

試しに呼んでみると効果があつたようで、肩をピクッと動かしこつちを見てきた。

さつきまでテレビ画面しか映し出されていなかつたダークブラウンの瞳に私が映し出される。

えつ、こんな簡単でいいの！？

「早めに追い帰せよ」

在原はソファからゆづくつと腰を上げた。

「俺言つたよな。早めに帰せつて」

「『めんなさい』」

すっかり忘れてしまつていた。彼の存在を。あれから数時間涼と長話を続けてしまつた。

だつて話したい事がいっぱいあるんだもん。まだ詰足りないぐらいいだけど。

少し落ち着いてから思つたんだけど、別にリビングじゃなくて私の部屋でも良かつたんだよね。

そしたら、海も隠れなくてすんだし。

「あと誰か確認しないですぐ開けるな」

「はい」

「危ないだろ」

「はい」

「ちゃんとドアホンで誰か確かめる事。わかったか？」

「はい」

なんとか涼を帰しリビングへ戻ると、有無を言わせらずソファに座らせられ眉間に皺を寄せた海に注意をくらつている。

「「めんなさい。本当に」「めんなさい」

両手を顔の前で合わせ頼んだ。

システムキッチンのところに隠れるのはキツかつたよね。床冷たいし。

「今度から『氣をつけろよ』

「はい」

一緒に暮らすからには、それなりに『氣をつけなきゃ』でボロが出来るかわからない。

海のいう通り今度から、『氣を付かなれば』。

39

「さて、そろそろ夕飯作ろううつと」

やっと解放された私は、両手を天まで高く上げ背を伸ばした。

「買い物はしなくていいのか？」

「うん。おばさんに煮物貰つたし。冷蔵庫にまだ材料あるし夕飯作るのと一緒に弁当のドレッシングもしておこうっと。

「海つてお弁当派？学食派？」

「作ってくれるのか」

「うん。一人作るのも、一人作るのも一緒だし」

予備のお弁当箱つてお母さん何処においたんだ？

「桜音」

「ん？」

呼ばれた方向を振り向くと、はにかんだ海がいた。  
あどけない笑顔。こんな顔するんだ。

窓からオレンジ色の光が差し込んで眩しい。

「今日からよろしくな

「ひたちよろしくね」

ひつして私と海の同居は始つた

## 第四話 見知らぬ人

「どう? 一人暮らしは」

「え……」

思わぬ質問のせいで指先に力が入り、シャープペンの芯が折れてしまつた。

みくはそんな私のささいな動搖に気付かず、机の上に置いてあつたポーチから鏡を取り出すと髪を直し始める。

「昨日からでしょ? おじさん達海外行つたのつて。いいよな~、一人暮らし。アタシなんて、もう高一なのにまだ姉ちゃんと同じ部屋だよ」

正確には一人じゃなく、一人なんです。

しかも、同居人があの在原海なんて言えない。

「今度桜音の家に押し掛けようかな~」

「それはダメ!!」

突然の大声にクラスメイトの視線が一気に私に集中した。目の前のみくに関しては、目を大きく見開いて驚いている。だつて急に来られたら、いろいろまずいんだつてば。

「珍しい。あんたが大声出すなんて」

「ごめん。だつて急に来たらお茶菓子とか出せないし、部屋も散らかつてたりするし……」

しどろもどろな返事しかできない。

「別に気使わなくてもいいのに」

「でもほら、私出掛けていないかもしないじゃない? そしたら、みくに悪いじゃん」

「あ~、そつか。すれ違つたら嫌だもんな」

「それじゃ、職員室に行つてくるね」

書き上げたプリントをひらひらと揺らし、ボロが出る前にその場を後にした。

はあ～、アドリブ上手くなりたい。

こここの展示物変わったんだ。

壁に飾られている見たことのない展示物に思わず興味がわく。

これ見るの密かに楽しみなんだよね。

昇降口から一階にある職員室に繋がる廊下には絵や写真、書道が飾られている。

それらは各部の生徒の作品で、中には賞を貰っている作品もあるうだ。

『太陽』

それを一目見て、思わず目を奪われてしまった。

青空の下三・四歳ぐらいの女の子が、顔より大きいひまわりを持って嬉しそうに笑っている写真。

タイトルの通り、こっちまで暖かくなつてつい笑みが浮かぶ。

くさかべかおりつて読むのかな？

写真の下には、太陽というタイトルと日下部香織といつ名前が書かれている。

「おい」

え？

ふとその声の主を見て、思わず固まってしまう。

坊主頭の短い髪の毛を金色に染めあげた男が立っていたのだ。

制服は着崩され、耳にはピアスがいっぱいついている。

その上涼達ほどではないが、高い身長と低い声もあって余計威圧感

を感じてしまつ。

この人絶対、生徒指導室常習犯だ。

「お前」「その男が一歩踏み出すか踏み出さないかのうちに、私はダッシュで逃げだそうとしたが失敗してしまつた。人は見かけじゃないつていうけど、怖いもんは怖いもん。

「待てよ」

腕を捕まえられてしまい、逃げるに逃げられなくなつてしまつた。何なの！？知り合いじゃないよね！？

「驚かせたなら悪い、あやまる。ちよつと聞きたい事があつたんだ」その人は私の腕を離すと、頭に手をやつてガシガシと短い髪をかき始めた。

「な、なんですか？」

思わず身構える。一体、私に何を聞きたいんだろう。

「なんである写真見て動かなかつたんだ？」

「ただあの写真が気に入つたからですけど」

そんな事を聞くためにわざわざ声をかけたなんて、余程気になつたのだろう。

「へへ、アレをね。お前、名前は？」

「逢月桜音です」

「逢月 ああ、お前が」

数秒顎に手を当て動かなくなつたと思つと、ニヤリと笑いポケットから何かを取り差し出してきた。

「やる」

その貰い物の意図が分からず、思わず首をかしげてしまつ。だってそれは、各校の写真部が集まつてやる展示会のチケットだから。

「今日の四時に会場前に来い」

## 第五話 展示会

「そんな身構えるなって。別に取つて食つたりしねえから」  
私の一步前を行くその人は時間通りに現れ、一緒に展示品を見ている。

名前も知らない今朝会つたばかりの人間に、警戒心を抱くなつて言う方が無理だと思うんですが……

写真を見たりするのは、好き。

行つたことや、見たことのないものを間接的だけど見れるから。  
うちにも海外の写真集とか数冊あって、たまに見ちゃうんだよね。

……なのに、楽しみたいのに楽しめない。

涼に話して、着いてきて貰えれば良かつたのかも知れない。  
そしたら心強いのに。

45

「どうしてチケットくれたんですか？」

展示物もちょっと中盤にさしかかった頃、意を決して聞いてみた。  
無意識に鞄を握る手に力が入る。

「あ～、それはもうチョイ待て」

こっちを見ず、けだるそうに答えられてしまった。

はつきりとした解答を聞けず、うやむやな気持ちが残つたままで気持ち悪い。

沈んでいく気持ちに耐えられなくなつてしまつた私は、途中から鑑賞するのを止めてしまつた。

ひたすら足元だけを見ていく。

そのため前を歩く人が立ち止まつたのにも気づかず、ぶつかつてしまつた。

まつた。

「 つ。『めんなれ』」

鼻ぶつけた。

擦りながら顔を上げると、ある一枚の写真の前で止まっていた。

「この写真」

これって、私が学校で見ていたやつ。あの女の子が笑っている写真だ。

「これ、俺が初めて撮った写真なんだ」

え？

ちょっと待って、これ田下部香織さんのはじや……

明らかに、隣にいる人物は男。

といふか、写真部！？どう見ても帰宅部じゃん！！

「やっぱ、女だと思つてたか？」

首を縦に何回も振る。だって香織って……

「まあ、よく間違われるからな。親が男でも女でも通じるみつ名

前で、香織ってつけたらしい」

「そりなんですか

とこつコメントしか出でないよ。

「俺お前と同じタメだから、敬語とかウザいからいらねえ。それとさつきの答えだけど、

撮った写真を気にいつて貰つたみたいだから、その礼代わりに

呼んだわけ

「なら、早くそり言つて……」

「そりは頭の中混乱してたの！」

「半分はな」

ん？『半分』って言つた？

体のこわばりが少し抜けたと思ったのに！！

「ちょっと待つて、半分つてな」

「おや、うちの学校の子だね？」

覆いかぶさるように声がして、私の話は途中で遮られてしまった。

誰……？

田下部君の少し後ろの方に、うちの制服を着た人が立っているのが見える。

髪は耳が出るまで短く、背は高めで細み、腕に写真部と書かれた腕章をつけていた。

一瞬男の人つて思つたけど、どうやら違うみたい。

スカート履いてる。

「部長」

田下部君は目を輝かせ、その人の所にいくと犬みたいにその人の周りを纏わりつき始めた。

「言つておきますけど、この女とは何の関係もないんで。俺は部長一筋ですから」

「そんな事、どうでもいい。邪魔だ」

その人は田下部君に臆することなく冷たく吐き捨てるが、私の前に立つた。

田下部君のさつきまでのイメージが消えた……

だって、全然キャラが違うんだもん。

「初めてまして。部長の富代明良です」  
「みやじまあきら

「あきらさんですか……？」

「男みたいだろ？部長と俺、名前交換したらちょうどいいのにな」

「私が香織って感じがするか。それで、君は？」

部長は冷めた視線で田下部君を一瞥すると、私へ柔らかな笑みを見

せた。

あ、名乗ってなかつた！！

「一年の逢月桜音です」

部長さんに言われ、急いで名前を告げる。

「部長相変わらず女には優しいんですね」

「何か勘違いをしていいか？お前以外には優しいの間違いだらうなに、この一人の温度差……」

とりあえず、何か話題を

微妙な空気の差から逃れるために口を開く。

「あの、富代先輩の写真もあるんですね？」

「ああ、こっちだ」

先輩の写真はほとんどが水中で撮った写真だった。

「綺麗」

色鮮やかな魚とサンゴ。

水族館の水槽眺めているみたい。

「気にいってくれたかい？」

「はい、とっても。海の生き物が好きで、よく子供の頃お兄ちゃん

に水族館に連れて行つて貰つたんです」

「ダイビングが趣味でな。他にもいろいろあるぞ。良かつたら今度部室に見に来ないか？」

「行きます！！」

私はその後、富代先輩の案内いろいろ見て回つた。

先輩に放置され、後ろをアボトボついてくる日下部君が気になつたけど……

「楽しかった～。今日はありがとうございました」

「そりや、何よつで」

ずっと中にいたから、やたら外の空気がおいしく感じた。

先輩と途中で別れてから、田下部君までひざひざ復活したらしいへ元に戻っていた。

「それじゃ、バイバイ」

手を振つて帰らうとしたのに、腕を掴まれて動けなくなつてしまつた。

え？ 何？

「おこーーーお前、まさか帰るんじゃないだろ？ な？」

だって、そもそも帰らないと夕飯の支度が。

市民ホール前の大時計を見ると、五時を少し過ぎた所だった。

「俺の言ったこと忘れたのか？ あの半分が残つてんだろ？ 」

あ。そういうば、そんなことを言つていたような……

「何？ 私そんなに時間ないよ」

田下部君と向き合つように体を向けると、手を放してくれた。

「すぐ済む。今から俺の彼女のフリをしや」

はあ！？



## 第六話 彼女のフリって！？

「何で……？」

「ちょっと確かめたい事あつてさ。俺のダチに逢つてくれ突然告げられた言葉に、頭が上手く回らない。

彼女つてどうこうこと…? 友達つて誰!?

「他の人あたつてよ」

「お前じゃなきゃ無理」

「どうして?」

「とにかくすぐ済むから頼む。五分もからない」

そう言つて日下部君は、目の前で手を合わせる格好をしてきた。そこまでして確かめたい事つて何だらう?

「な?頼む」

とは言わても、嫌なものは嫌。いじは、逃げるべきか……

なんて事を考へてると、目の前にピンクの物体が現れた。

「逢月これ何だ?」

「携帯」

目の前の物体の名称を簡潔に告げる。

それは最新式のピンク色の携帯だった。

ストラップにはスワロフスキーで彩られたクマがついている。へへ、私の携帯と同じ つてそれ私のじゃん!!

「それ私の!!」

いつの間に……

帰してよと携帯に手を伸ばすと、手を空高く上げられてしまった。

身長差的に届くわけない。

「返して欲しかつたら、わかるよな？」  
それ脅迫つていうんだよ……

「なんでそんな機嫌悪いんだ？海」

隣に座り私の肩に手を回している男は、ニヤニヤしながら真向かいに座る人物に言葉を投げかける。

「どういふことだ、これは？」

眉をピクつかせ、海は田を細め日下部君を睨みつける。

その様子の何がおかしいのか、日下部君は笑いだすと海の空気がますます重く突き刺さる。

帰りたい。

目に見えないブリザードが吹きすさぶ中、私はただ切実に思つた。

私が連れてこられたのは、駅近くにあるファミレス。  
時間と立地条件のため、店の中は学生で賑わっている。  
窓際の一番奥の席に日下部君の言つていた友達がいた。  
まさか、それが海だなんて

「別に？友達に彼女を紹介しているだけだけど？」  
「ふざけるな。桜音がお前なんかと付き合つわけないだろ」「お前なんかつて酷くね？悪いけど、俺達さつきまでデート中だつ

たから。な？」

「デートじゃないと思ひうけど、テーブルの下でチラつかせられている携帯を見ると否定出来ない。

ひとつと彼女のフリでも何でもして帰りたい。

「うん。写真綺麗だつたね」

引きつる顔に無理やり笑みを浮かべ答えると、海の瞳が揺れた。

「何時からだ？」

いつから付き合っている事にした方がいいんだろう…さすがに今日からじゃあな。

とりあえず答えに困ったので田下部君に視線を移す。

田下部君は相変わらずニヤついている。

「何？ 気になんの？」

「女とつかえひつかえしてんやつが、桜音と付き合つのが嫌なんだよ」

女とつかえひつかえ

「……つてちょっと田下部くん！…まさか富代先輩の事も…？」

「アホか、お前は…！先輩の事はマジだつうの…！じやなきや馬鹿見てえに学校なんか来て、部活なんてダルい事するわけねえだろ。大体遊びならわざわざあんな難攻不落のところにいかない。カメラが恋人つて…もう人じやねえし…」

そう言って、頭を抱え込んでテーブルにふせつてしまつた。

「桜音を使って俺をからかおつとしたらしいが残念だつたな。田下部

私と田下部君は、海の方をみると口元を上げ笑つてい。

「別にからかおうなんて四割しか思つてねえよ。ただ確かめたかつただけだ」

「ねえ田下部君が確かめたかった事つて何だったの？」

「お前この流れでまだわからんねえの？」  
あきれ顔で溜息を吐くと、私の頭を軽く叩く。

「海。お前もやっかいなところつたな  
「まあな」

海は苦笑いでそれに答えていた。

今田は本当にいろいろあったな……

夕飯作つたら、ゆつくり休もうつと

「あ、でもな。ここつどドートしたのは本当だぞ」

この日下部君の一言のせいで、私は家に帰つてもゆつくり休む事は出来なかつた。

## 間章 鬼ノハレ（前書き）

（海視点）

番外編みたいな感じで。

## 間章 鬼ごっこ

「あいつ何してんだ」

コール音がただ続く携帯に耳を当てながら、誰もいない廊下を歩く。

放課後ともあって人がいない。

これが毎日ならどれだけ楽だろう。

勝手に「写める奴もないし、つるやっこ声も聞こえない」。

この間、田下部に桜音の存在がバレた。

思つた通りうつとおしいぐらい人の恋愛に口を挟んでくる。

何処が好きだとか、どうやって知り合つたんだとか……

これが嫌だから隠してたというのに。

その上俺も協力するから、田下部と先輩の中をとりもてとまで言い始める始末。

今日第一回田の作戦会議を開く！！なんて言つて意気込まれた揚句  
これかよ。

「帰るか」

簡単なメールで先に帰る事を伝える。

これ以上一秒たりともあいつの為に無駄な時間を過ごしたくない。  
家に帰つて桜音と話がしたい。顔が見たい。

会話つて言つてもまだ沈黙になる時があるし、当たり障りのない話  
だけど前よりは進歩したと思う。

そう言えば、最近写真部の話を聞くな……

一応口下部に釘刺して置いたが。まあ、入らぬ心配だらう。  
あいつは、先輩命みたいなところがあるし。

「海！！」

後ろから桜音に呼び止められた。

校内で田立つのが嫌らしく、普段はあまり学校で話さない。桜音に話しかけられるのが嬉しく、自然と笑みがこぼれる。走ってきたのか顔が薄らと赤く、肩で息をしていた。

「田下部君こいつち来てないよね？」

「来てない」

「良かつた」

ほつと胸をなでおろし、安堵の表情を見せる。せっかく話しかけてくれたのに、田下部の事なんて俺としてはあまりおもしろくない。

「よしひ！－あとはこのまま昇降口に行けば大丈夫」

「どうしたんだ？一体」

「田下部君に追われてるの。これのせいだ」

そう言つて右手に握る携帯に視線を移す。

それには俺が親父名義でやつたホワイトマークのお返しのクマのストラップがついていた。

気に入ってくれているらしく、とても大事にしてくれている。

「田下部君が私の携帯にある宮代先輩の番号とアドレス教えろって。私先輩に口止めされてて……なんか教えたら毎日でも掛けられそุดから嫌なんだって。

それで無理つて言つたら、実力行使だ！－つて携帯とられそうになつたから走つて逃げまわつてたの」

あ～、なるほど。それは喉から手が出るほど欲しいはずだ。しかしあいつは無理やり聞き出し事を知られて、株が下がるとか考えないのか。

でも真つ直ぐな所は羨ましいと思つ。

あいつは伝えたい事を素直に言える。

それに引き換え俺は

「桜音……一緒に帰ろうか？」

「ええっ！？」

顔を真っ赤にして、パニックを起こしてくる。

きっと普段の自分なら言わないだろ。

少し日下部に感化されたのかもな……

一緒に帰ろうって言つただけでこれなら、告白したらどうなるんだ

うう

苦笑いをせざるを得ない。

「気をつけて帰れよ」

無理だと判断するまでもなく、俺はそのまま昇降口へと向かった——

一ぱすだつた。

それはブレザーを引っ張る手こみつて遮られた。

「……途中からでいい？」

一緒に帰ってくれるって事なのか？

顔色を伺おうにも、俯いて見えない。

どうしてだ  
？

好かれているとは思つていない。その逆はあつても。

涙目で顔を赤くして抗議する桜音の反応が楽しくてからかっていると、私の事嫌いなんでしょう！？と言われたぐらいだ。

「途中からでもいい。一緒に帰ろうな」

誰かに見られるのを怖がっているんだろう。

勝手気ままに噂を流したり、俺に近づいてくる奴をけん制しているやつらがいるから。

「スーパー寄つていい？」

「ああ。今日の夕飯は何だ？」

「えっとね

「逢月何処だ～！！」

野太い声によつて、俺と桜音の会話は遮断された。

……「これは近いな。

田下部の声が一階から聞こえる。

しかし厄介だ。

ここは階段下だから、降りてくるのも時間の問題。

「ちょっと。まだ追いかけてたのー?」「ごめん、やつぱ先帰るねー!」

「おー、桜音!？」

そう言つて、桜音は走つて昇降口へと向かつていった。

「逢月頼む~携帯~」

叫び続けながら、階段をドタドタと降りてくる音が聞こえる。

おい、この世の主。俺の邪魔して覚悟は出来てんだうつな?

## 第三章 第一話 二人一緒

目の前に広がるのは、大小さまざまな大きさの箱と、それを包んでいた色とりどりの紙。

海がその光景を腕を組んであきれ顔で見ている。

その一方私は「と」と、まだ未開封の箱を開けていた。

あつ、これ紅茶のセットだ。

あとで焼き菓子と一緒に飲もうっと。

「お土産本当にいっぱい持つてくれたね」

「買つてき過ぎだろ。これは」

これらは全部ハネムーンから戻ってきた啓吾さん達が買つてきてくれた物。

海と一緒に暮らしてなんだかんだで、一ヶ月以上経とうとしている。思つたよりも海との生活は大丈夫だった。

だって家事も手伝ってくれるし。

どうやら私に負担がかからないように気を使つてくれているらしい。以外と優しいのかも。

「海は何買つたの？」

「パジャマとか、本とか実用性のある物ばっかだな」「箱と包装用紙を片付けながら、海は言つた。

本つてやっぱ、日本語じやないやつだよね？読めるの？

「海つて英語話せるの？」

「日常会話程度しか話せない」

それ、十分だと思いますけど。羨ましそう。

「英語だけ？」

「フランス語とイタリア語なら少し」

「……海って何者？」

容姿端麗、運動神経抜群、頭腦明晰、その上金持ちは向かうといひ敵なしって感じがする。

弱点とか無さそう……

「桜音？」

海が怪訝そうに名前を呼ぶ。

弱点を探そと、ぼーっとしてしまっていたようだ。

「あつ、パジャマなら私も貰つたよ。黒いやつなんてあるんだね」

「黒？」

「うん。ほり

たしかこの箱だったよね。

数個積まれた箱の中から、中ぐらいの箱を取り出す。

それを開け、中からパジャマを広げて海に見せた。

「ねつ？」

それを見ると海は無言で携帯から誰かに電話をかけ始めた。

まもなくその人物が出たのか、大声で

「一体何を考えているんだ！？」

と怒鳴り出しあじめた。

「笑うな。は？他意はない？んなわけあるか。明らかに遊んでいるだろ！？」

しばらく何か話したあと、海は舌打ちをして電話を切るとソファに携帯を放り投げた。

眉をしかめ頭を抱えている。

「あの親父……」

「一体どうなってるんだろう。」

「海？」

そつと海の腕に触れ、話しかけた。

「桜音と俺のパジャマが一緒になんだよ……」

「は？」

ほらと言いながら海は箱を差し出してきた。

その中身は 同じだ。

襟元の白リボンも、胸元にあるこの服の「ワローランド」も何もかも。

……って事はお揃い！？

私が自分の親に貰つたものなら怒れるけど、監視をさじや話が違つ。

「桜音、どうする？」

「せつかく頂いた物だし、黒いパジャマ持つてなかつたから着たい」  
わざわざ選んでくれたんだし、一回は袖を通さなきゃいけないよう  
な気がする。

「わかった

「海が着るなら、着ないから安心して」

「なんでだ？」

「だつて私とお揃いになるんだよ。それじゃ嫌でしょ？」

「誰が言つたそんな事」

電話口で怒つてたじやんか。

「いいの？一緒にでも」

「桜音はいいのか？俺と同じでも」

私が聞いたのになぜか質問で返されてしまった。  
返事の代わりに首をコクンと縦に動かす。

良いも悪いも今回はしようがないもん。

「桜音がいいなら、俺もいい」

とこつ理由で今夜から海とお揃いのパジャマを着る事になった。

この時の私はまだ実感していなかつたんだ。

自分と同じ服を着た海を見た時の、あの恥ずかしさを



## 第一話 理由なきムカツキ

ことわざとかつて習つても結局日常生活ではあまり使わない。  
けど今なら使えるやつが一つある。

今の私の状況は背水の陣つてやつだと思つ……

後ろを壁に正面を海に挟まれ身動きが取れない。  
おまけに左右は海の腕があり逃れる事は不可能。

なんでこんな状況になつてゐるのか、当の本人の私にもわかんない。

「どいてつてば」

両手で海の体を押しのけようとしてみるけど、びくともしない。

「なんで！？またからかつてゐの！？」

海はすぐ赤くなる私をからかつて遊ぶ時がある。  
耳まで真っ赤とかいいながら。

今も顔が火照つてゐる。

「今日は違うよ」

「……じゃ何？」

「桜音が俺見て逃げたから」

あ～、逃げたと思われないように自然にやつたのに。  
だってコレじゃしようがないじゃん。

今の私たちの格好は、お揃いのパジャマ。  
こんなのつて、ほらあれじゃない？まるで

「新婚さんみたいなから恥ずかしかつたの！？」

海は溜息を吐き、こっちを見つめている。

「自分が着るつて言つたのに今さら？」

「うう……」

「ならお望み通り、新婚さん！」でもするか？」

……ん？

誰がいつそんな事をしたって言つた！？  
したくない。はつきり言つてしたくない。  
首を横に思いつきり降つた。

それなのに海は私をだき抱えソファに座る。

「しないつばーー！」

海の膝の上に横向きて座られ、逃げられないように腰に腕を回して引き寄せられる。

近い、近い。もう少しで海の広い胸にある。

「こんなな新婚さんじやなーーー！」

「ならどんな事するんだ？」

だつてこんなな嫌がらせじやん。

「えつ……イチャイチャ……？」

この語学力のなさと頭の回転の悪さをこの後ものよ／＼恨む事になる。

「わかつた。これじゃ足りなかつたんだな」

赤から青へ信頼のように顔色が変わつていつたと思つ。

ち、違う。絶対何か変な誤解を

訂正する前に、頬に自分がない人の温もりを感じた。

それを感じるとともに、血の気が引いた顔に血液がまた集中する。

「俺に触られるの嫌か？」

「嫌じゃないけど……」

今なんて言つた！？嫌ぢやないつて言つたのーーー？

口が勝手に動いたんだけどーーー！！

なんでそんな事を言つたのか驚きを隠せない私よりも、海の方が驚いていた。

目を丸くさせ、固まつてしまつている。

もしかして今なら逃げれる……？

回されている手を解こうと、手をかけていると名前を呼ばれた。

「桜音」

思わず肩が大きく揺れる。逃げようとしたのバレた？

海の口は、私の予想外の事を告げた。

「キスしたことあるか？」

「微妙」

とりあえず聞かれたのでひとつ答えてしまったがその後に後悔した。

何で私はそんな事を答えたの！？

そして海はいきなり何でそんな事を言い出したの！？

「何、微妙って？」

海は怪訝そうに眉をよせる。

「こればっかりは、微妙としか言えないんだよ……

話せば長くなるし。

「えつと、したかしないかと言えばしたんだけど。キスつてこいつより何というか……えへっとその……」

視線を下に向け、クッショングリーンをギュウッと抱える。

私の煮え切らない様子に、海はイライラを募らせ不機嫌オーラを漂わせ始めた。

なんでこんな事で機嫌悪くなるの！？

「とにかくしたけど、これには理由があつて話せば長くなるの……」

「明日休みだから別にかまわないけど」

えつ、話せと？

なぜいきなりファーストキスについて夜通しで語らなきやならないの？

「私より海はどのなの？キスしたことあるの？」

突然の私の問いかけに海は体をビクつかせると、視線を泳がせはじめた。

別に聞かなくてもわかるよ。海ぐらいならいっぽい彼女居ただろうね。

しかも、モデル並みの綺麗な人達でしょ。

海の過去なんてわかんないけどさ。

頭の中に海とモデル系の美女とのキスシーンの映像が浮かんでくる。どうせ私は童顔だし、自慢できるスタイルじゃないもん。

足の長さとか、典型的な日本人だし。

あ、なんか怒る理由がないのに胸がムカムカしてきた。

「どうせキスだけじゃない事もしたんでしょう？」

私みたいなお子様と違つて。

「さ、桜音」

腕を組んで頬を膨らませる私と、それを見てどうしていいか分からずなんとかなだめようとする海。さつきとは立場が形勢逆転。

何とか楽しいことを考えようとしたりして、このむかつきを抑えようとしたけどやつぱダメだ。

私は一体何にイラついているの？



## 第三話 変わつていく何か

窓を霧が伝つ。

雨はもうすっかり止んだけれど、空模様は悪いまま。

湿っぽい体育館の中、体を動かしたので汗で余計湿度が高く感じる。この時期は雨でグラウンドが使えないから、男子と半分にして体育館を使っていた。

広いはずの体育館も1組と混合のうえ半分しか使えないからひどく狭い。

「しつかし、王子人気すごすぎ」

みくは半分にする為に引かれたネットを掴み、横で黄色い声をあげている女の子達を冷めた目で見た。

ネットの向こう側では、男子がバスケをしている。あの女の子達の担当では、海とそれに負けず劣らずの人気の千里ちやんだ。

「見て、藤原君の腕。白くて綺麗~触つてみたい」

「チッ。見んなよ、触んなよ」

舌打ちですか、みくさん。

あと、ネットそんなに力入れると破けるつてば。  
ただでさえボロいのに。

今は海のチームと涼・千里ちゃんのチームが対戦中だ。

「海君~」

「在原くん~！~！」

「あいつ顔だけじゃん。あの女達もビ~がいいんだかね~。千里の方がいい男じょん」

そう言つていざ千里ちゃんが騒がれると、ものすごい怒るくせに。視線の先の海は、ピート内をバランスのとれた体で走りまわつてい

る。

「……顔だけじゃないよ」

「どうした？ 急に。王子庇うなんて初めてじゃんか」

「別に」

「いやいやおかしいって。今まで全然興味なかつたじゃん…！」  
「最近あんたおかしいよ。ほーっとしてる事多いし」「わかってる。それはきっと、海のせい。

最近家でも学校でも気がつくと彼の事を考へていて。  
一見細いようだけど、筋肉質で抱きしめられると硬い体。  
優しく見つめてくる『一玉のよつな瞳』。  
大きくて暖かい手。

はにかむ笑顔。

焼きついで離れない。

ギュッとネットを掴む。

頭冷やさなきや。

「桜音！…すごかったね、今の涼のシューート…！」  
肩を掴まれて揺らされているせいで視点が定まらない。  
涼とうちのクラスの人がハイタッチをしていた。

「入れたの？」

「まさか見てなかつたの！？珍しい。いつも涼しか見てないのに」「それは涼以外興味ないから」

今までは。

「だよな……それにはさすがに千里に同情するわ

何かが私の中で芽生え始めている

「千里ちゃん？」

「あ～、桜音は気にしなくていい」

手をパタパタさせ、何かを追い払つよつた動作を見せる。

「何それ」

「涼と付き合わないの？」

「話反らした！…」

「付き合つちゃいなよ」

「だから何度も言つけど、そういう関係じゃないんだってば。涼に聞いてみれば？同じ事言つから」

好きとかの次元じゃない。

特別なんだもん。

一人だつた私に手を差し伸べてくれた大切な人。  
あの教室で私を見つけてくれた唯一の人。

「でもさ

「しつこいよ。みく」

「……ごめん。ただ安心したかつただけなんだ」

「なんで私と涼が付き合つと安心するの？」

「桜音の事好きだよ」

脈絡のない告白に、顔が赤くなる。

「急に何言つてんの！？また話反らした！…」

「するいんだ、私」

そう言って視線をまた隣のコートに向けた。  
みくの瞳にはうつすらと涙がたまっている。

「あ

「今度は何？」

「いや、なんか王子じつちみてるんだけど」

いつもと違ひ心底嫌そうな声が聞こえ、視線をそちらに移す。  
本当に海の事が嫌いなんだね、みく。

たしかに海がタオルで汗を拭きながらこっちを見ている。

誰を見ているんだろう?

首を左右に振つて探すとすぐに見つかった。

きつとこの人を見ていたんだ

「あー、あの女か」

みくも気づいたらしく、私の隣に少し離れて座つている人を見た。  
バスケ部のマネージャーの片桐さん。

長い黒い髪が印象的な人。美人で男子バスケ部内でも人気があるみたい。

微笑みながら、手を振る彼女を見て胸が軋んだ。

なんか苦しいよ……

「へー。あの女と王子そういう関係? やたらベタベタしてると思つたら。

つて桜音!..顔色悪いよ。保健室行こう!..」

胸を押さえたまま俯く私に、みくが背中をさすってくれた。

「一人で行けるから大丈夫。ごめん、先生に断つておいて」

そう言い残して、足早に体育館を出た。

一秒でも早くあの二人のいる場所から離れたかったから。

## 第四話 桜とヒナタ

『桜音が桜なら、涼君は口向だわ』  
菜月おばさんにそう言われた時、妙に納得してしまった。  
植物は光合成しないと生きていけない。

それと同じように中学の頃、涼がいないと生きていけないと思つていた。

それぐらい依存していたんだ。

「桜咲いてないね」

「さすがに六月に桜が咲いてたら異常だよ」

Tシャツにデニム姿の涼は、窓際に居た私の所に歩み寄つた。  
二人して眺めている木々達は、春になると満開の桜を咲かせてくれる。

「どうして急にここに来ようって思ったの?」

「卒業してから一回も来てなかつただろ」

私達は中学校に来ていた。

急に涼から電話あつて、行きたい場所があるつて呼び出されたのだ。

「先生元気そうだったね」

「相変わらず俺、桜音の保護者扱いだつたけどな……」

「私の方が少しだけお姉さんなのにね~」

「姉つていうよりは、世話の焼ける妹つて感じだろ」「頬っぺたを膨らまし、そっぽを向く。」

四月生まれだから、数か月だけ年上だもん。

「『めん、『じめん』

そう言って優しく頭を撫でてくれた。こうされると落ち着く。

頭を撫でられるのは、昔から好き。よくお兄ちゃんがしてくれたからかな。

あ〜、私はラコンだったんだよね。昔。途中から涼っ子になつたけど。

「ねえ、こここの部屋覚えてる？初めて喋った場所」五階の一一番端、普段は誰も使わない空き教室。この階は理科室や家庭科室しかなく滅多に人が来ない。なのに桜の咲き誇るあの季節、涼が私を見つけてくれた。

「覚えてるよ」

うちの中学校は私立でもないのに、幼稚園・小学校・中学校が併設されている。

だから入学式なのに、転校初日のような感じがした。みんな幼馴染のように仲がよく、私はよそ者。そんな空気が嫌で、休み時間に逃げ込んだのが誰もこないこここの教室だった。

「あの時一人になりたくてさ。ブラブラしてたら泣き声が聞こえて、入つてみるとうちのクラスのやつだった」

「泣いてる私に、涼は頭撫でてくれたよね。その後聞いてもいらないのに一人でベラベラ喋つてや」

「うるさかった？」

「ううん。嬉しかった。ここで涼と逢わなかつたら、私ずっと一人だつたから……」

休み時間事に涼はここに来ててくれて、話相手になつてくれんだ。

あの時からすでにクラスのムードメーカーだったから、話す人なんていっぱい居たはずなのに。

涼は私にいっぱいくれた。

友達も出来たし、笑うこともできるようになった。

全部涼のおかげ。

まだ貰つてばかりいて何一つ返してあげられてないけど。

「だから涼が一番だった。私の世界を創ってくれた特別な人だから

一人ぼっちだつた私に、手を差し伸べてくれた優しい人。

「でもね、最近おかしいんだ。涼しかいらないと思ってたのに、他の人が入り込もうとしているの……」

チュニックの裾を握りしめ、大きく息を吐いた。

「……気づいたら視線で追つてて、その人の事を考えてる

触れるたびに高まる鼓動。

名前を呼ばれるたびに切なくなる。

「知ってるよ。俺はずつと桜音の傍にいたから

涼は泣きたいんだか笑いたいんだかよくわからない表情をした。  
あまりそんな顔をしないから、急に不安になつて涼の頬に手を添える。

その手に涼の手が重なつた。

「大丈夫……？」

「平気だ。ただ、那智さんもこんな感じだったのかなつて思つたんだ

だ

「お兄ちゃん？」

逢月那智。私のお兄ちゃん。

年が結構離れてて、今は結婚して家を出ている。

兄の座を取られたとかなんとか何癖をつけて、涼に無駄に対抗意識をもやしているんだよね。

この間は負けるとわかつてているバスケ試合を涼に申し込んで敗北していた。

バスケ部員とサラリーマンじゃ勝ち目がないのに。

「そういう気持ちがなんなのかわかる？」

首を横に振る。涼なら知ってる？

「そのうちわかるよ」

窓際から離れると、携帯を取り出して液晶画面を見始めた。

「もうこんな時間か」

「あーっ、はぐらかした！！人が真剣に考えてんのにーーー！」

「腹減ったな）。昼何食う？」

「話変わってるーーー！」

「腹減んじゃないの？」

「うつ、減った」

「この間新しい店が出来たんだけど、そここじょうか？桜音の大好きなナゲザート系もいっぱいあるらしいぞ？」

「そこに行くーーー！」

涼の腕をとり、せかすように教室を出た。  
あっと言ひ通りそのうちわかるかもしれない。

『その子と付き合つの？……そしたら涼、私から離れやつ。そんなの寂しすぎるよ』

『俺達の関係はあつても変わらない。絶対一人にさせない。それに桜音にもきっと好きな人が現れるよ。そしたら寂しいのはきっと俺の方だ』



## 第五話 突然のお誘い時々奇妙な笑い声

「えつ……本当ですか！？ぜひ行きたいですー！」

あまりに勢い良く返事をしたせか、電話の相手は笑いを堪えているらしく声が漏れてくる。

だつてこんな誘い滅多にないんだもん。

「はい。海と一緒にいきます。では、明日取りに行きますね。はい、失礼します」

携帯をたたみポケットに入れると、一刻も早くこの事を話す為に急いで体育館の方向へと急いだ。

早く土曜になんないかな～

体育館ではバスケ部とバレー部がコートを半々にして練習していた。  
えつと、海は何処？

目立つからすぐにわかるのに、今日はなぜか見つからない。  
まさか居ないの！？早く言いたいのにー！

「あれ？逢月さん」

声をかけられたので、後ろを振り向く。

「木下君」

そこには木下君がドリンクを持って立っていた。

木下君とは中学が一緒の上、部活も一緒だった。

私が男子バスケ部のマネージャーで、木下くんは部員。  
そのため、お互い顔見しちだ。

「涼だね。呼んでくるよ」

「ううん、違うの。海どこにいるか知ってる？居ないみたいなんだ

けど……

「在原？涼じゃなくて？」

不思議 そうな顔をしながら、確認を取った。

たぶん私がここに来る時は、涼ばっかりだつたから驚いているんだと思う。

それに、よりもよつて呼んだのが海だつたし。

どうやら木下君の話だと、外の水道に顔を洗いに行つたらしい。  
さつそく行つてみるとTシャツに部活用の黒いジャージ姿の海が、  
タオルを持つて体育館に戻るうとしている所だつた。

居た。

「海つ……」

視界に入ると飛びつくなつて抱きつき、そのままギュウッと抱き  
しめた。

海は固まつたまま動かず、私のされるがままになつてゐる。

「そ、そく……ら……ね？」

からうじて吐き出された言葉は、とても小さくかき消えそつた。  
抱き止める為にまわされた片手には力が入つてなく、ほとんど地面  
に踏ん張るよつとして受け止めたんだ。

正常な私なら、こんな事しない。絶対に。

この時はただ、水族館に行ける事が嬉しかつたんだ。

「聞いて聞いて！！あのね、さつき啓吾さんから電話があつたの。  
隣町に新しい水族館が出来るの知つてる？そこでね関係者だけオープ  
ン前日に入れるらしいの！！それで招待状貰つたから土曜に海と  
行つて来たらつて！！」

電話の内容はオープン前日の土曜に関係者だけに中を解放するので、  
私と海に行つて来たらどうだ？というのだった。

関係者といつても堅苦しいものじゃなく、職員の家族とかもくるから私でも大丈夫だから安心して楽しめるらしい。

人目を気にせずゆつくりと見てまわれるなんて嬉しいすぎる。  
水族館大好き。あの水面のキラキラ感、色鮮やかな魚、それにイルカシヨー……楽しみ。

馳せる思いに、思わず隠しきない笑みがこぼれおちる。

「ねつ、すゞいでしょ！？ 人も少ないしゆつくり出来るんだよ」  
さつきから全然反応が無いんだけど。

私はつかりしゃべってるじやん。

「ねえ、海？ 聞いてる？」

うれしくないの？ 嫌いなのかな？ 水族館。

一人興奮気味にしゃべってたから、海の様子がおかしい事にまったく気付かなかつた。

「ちょっと、顔赤いよ！？ もしかして具合悪いの？ 風邪？」

海の顔は、私がからかわれて赤くなるのと変わらないぐらい赤くなつている。

私と違つて顔色なんてあまり変わらないはずのに。

「……え、あ」

そつこえば、わつきからまともに会話が成り立つてない。

熱もあるのかな？

背延びをしておでこに手を当ててみると、少し熱いような気がする。  
でもこのくらいなら大丈夫だと思うんだけど……

念のため保健室で測つた方がいいかも。

保健室に連れて行こうとしたら、変な笑い声のせいとそれが出来なかつた。

「あひやひやひや。あ～腹痛え～。逢月、お前最高ーーー！」

この声、絶対あの人だ

## 第六話 敵意

「日下部君、変な笑い方しないでよ……」

茂みから出てきた日下部君に、脱力しながら言つた。

「でかした、逢月。ほら、よく撮れてるだろ」

「あ」

差し出された携帯の画面には、抱きあつてこむ海と私が映し出されている。

何してんの、私!? 抱きつこちやつてるじやん!!

それを見せられ意識してしまったのか、急速に顔に血液が集中してしまつた。

「おっ、赤くなつた」

「これでならないわけないでしょ!!」

「自分から抱きついていつたくせに?」

「そうだけど、違うの……」

「同じだろ」

こんなの理由を知らない人がみたら、誤解しちゃうじやん!!

「消して!!」

急いでそれを取ろうとしたけど、届かなによつて腕を空高く上げられてしまつた。

身長差的に、ジャンプしても届かない。

「無理!。これでしばらくあいつで遊ぶから」

今だ固まつている海を見ながらニヤニヤしている。

それでどうやって遊ぶのかまったく検討はつかない。

「もへ、それよりどうしてここに居るの!?」

「おまえがシカトしたから、ブチ切れ追いかけてきた。おかげでおもしろいもんが見れたけどな」

「無視してないよ。第一、逢つてないもん」

「廊下ですれ違つたつうの」

だめだ、覚えてない。なんとか思いだそうとしたけど、無理だった。  
あの状態じゃ周りが見えていなかつたもん。

「それよりお前どうすんだよ。映画。時間ねえぞ」

映画?

あつ……浮かれて忘れてた。  
たまたま見たい映画が一緒だつたから、田下部君と行く事になつた  
んだつけ。

携帯を取り出して時間を確認すると、今から行けばギリギリ間に合  
うぐらいだつた。

「行く!…」

「駄目だ」

声と共に後ろから腰に巻きつづけ手が回されて抱き締められてい  
た。

なんでダメなのよー?…どうか、この状況は何!?  
外そつと何度も身をよじらせるが、なかなかうまくいかない。

「ちよつ……海、離して!…」

「さつきはあんなに積極的だつたのに?..」

「あれは違うつてば!…」

「うう、言わないでよ……」

「起きたのか、海」

「誰も寝ていない」

「抱きつかれたぐらいで動けなくなるなんて、意外と純情なんだな。

お前

「それは桜音限定でだ」

海は私の肩に顎を乗せたまま、田下部君としゃべつていて  
話すたびに耳元に吐息がかかつてくすぐつた!

「具合悪いんじゃないの!…さつきまで顔赤かつたじやん

「ああ、あれはな～医者でも治せ　　」

「何してゐるのよーー」

田下部君が口を開きかえると、ものすごい甲高い声がそれを遮った。三人してその方向に視線を向けると、片桐さんが息を切らせて立っている。

なんか物凄い田で睨まれているんですけど……

それを見ると海は顔をしかめ、田下部君は苦笑いをした。  
ちょっと、いやかなり怖い。

たまらず腰にまわされている海の腕を手をギュッと掴んだ。

「悪いけど、今部活中なの。海を離してくれない？」

こつちは抱きつかれている側なのに、なぜか私に対して片桐さんは強く言つた。

肌に突き刺さるような視線に、歪んでいく顔。

いつかの体育の時に海に見せた表情とは対照的すぎる。

「いめんなさい。海もごめんね」

「なんで桜音が謝るんだ。お前は悪くないだろ」

部活中に引きとめたのは私だもん。

「今回は仕方ないんじゃねえの？」

「わかってる」

海は腕を離すと、

「水族館一緒に行くから。あとでいろいろ決めような」

と言つて軽く私の頬を撫でると、片桐さんを置いて一人で体育館の方向へ向かつて行つてしまつた。

「待つて！－海」

すぐに追いつみかけして片桐さんも「！」を立ち去つて行く。

「あのや、上桐さんって海の事好きだよね？」  
「ね、たすかに鈍感なお前でも気づいたか」  
「こくらなんでも、たすかにあんなに敵意を出しながら話べよ」  
涼を好きな子達からあれと似たようなのを昔感じた事がある。  
あんなにあからさまなのは初めてだけ。

「それよつお前気をつけろよ？女の嫉妬は怖いからな」  
「大丈夫だよ。あんまり接点ないし。それに、私に嫉妬なんてする  
わけないじゃん」

「お前な……」

腕を組んだまま田下部君はため息を吐いた。

「とにかく、気をつけろ」

「田下部君つてお母さんみたいだね」

クスクスと笑つていたら、頭を叩かれた。

痛いんですけど。

「だれがお母さんだ……お前の保護者はもういるだろ？」「が……」

「この時は危惧する」となんて何もないと思つていたんだ。

## 第七話 「機嫌な彼女

肩から提げた大きめの紙袋が歩くたびにガサガサと音を立てた。うう～邪魔だ。駅のロッカーにでも入れておけば良かつたかも……

「土曜、それ着ていくのか？」

隣を歩いていた田下部君が、紙袋に視線を向ける。

「うん」

この中身はさつき買つたばかりの新しい服。一緒にみくと千里ちゃんも行つたんだけど、これを見つけるのに苦労したんだよね。

みくと田下部君が私の服選びを勝負事にしてしまったのだ。おかげで服選びにものすごく時間が掛っちゃつた。

あれ千里ちゃんがみくを止めてくれなかつたらまだ服選んでたよね

……

「それもいいかもしけれねえけどよ、あっちの方が良かつたんじゃねえの？」

「あれは、短すぎるよ」

田下部君が選んだのは、ミニスカートや肩が大きく開いたサマーニットのような肌を見せる系の服ばつかだつた。

ああいうのよくみく着ているんだよね。

一方みくが選んだのは、やたらフリルが付いた甘めの服。

結局一人の選んでくれたものじゃなくて、自分で選んでしまった。

「桜音さんが行く水族館つて隣町に出来るやつですね？あれって田曜オープンじゃないでした？たしか」

右隣に居る千里ちゃんが、首を傾げている。

みくはバイトがあつて帰つてしまつたので、私と千里ちゃん田下部

君の三人といふ珍しい組み合わせなのだ。

「そうだよ。前日に入れる招待状貰つたの。だから人少ないからゆつくり見られるんだ」

「そうですか。それで桜音さん機嫌がいいんですね」「千里ちゃんが微笑んでる。可愛い」。

つられてこっちまで笑みが零れてしまったんだけど、この後の日下部君の一言で固まってしまった。

「それだけじゃねえだろ。なんせあいつとデートだもんな~」  
……ん?

「デート!~?」

思わぬ発言に声が裏返つてしまつた。なんでそつなるの!~?  
なんで誤解をまねくような事を言うのかな。

「付き合つてないから、デートじゃないもん」

「でもあいつと一人つきりで出かけるの初めてだらう? あいつと一緒に出かけられて浮かれねえ女なんているかよ」

日下部君は初めてだつて言つけど、海と一人で出掛けるのは初めてじゃない。

近くのスーパーになら何度か買い物に行つた事はある。  
でもそれとはちょっと違つような気がするんだよね。  
そう言えば水族館とかそういう所は一緒に行つた事がない。  
そう考えると初めてになるのかな?  
でも、デートじゃないよ。海と私は付き合つてないもん。

「おい、逢月」

「ん?」

日下部君が足を止めて後ろを見つめる。

なんだか?……? 私も振り返つてみると、千里ちゃんが顔を強張らせて固まつていた。

「あいつって誰ですか?」

声にせりつものよつに優しさが無く、どこか冷たい。

「……え？」

「涼じゃないですね？涼とは何度も出かけてますから、涼つて一言も言つてないよ？なんで涼がでてくるの？どうしたんだろ？今日の千里ちゃん様子が少し変だ。たまらず日下部君を見ると、肩を竦められてしまつた。

なんか空氣的に海の名前を出すと不味いような気がするのはわかる。千里ちゃんとみくは私と海に接点は無いこと思つてゐるし、なんせ相手は海だもん絶対驚く。

「誰ですか？そんな人がいるなんて聞いた事ないんですよ。ここに機嫌がいいのは、その人とデートするからですか？」普段の千里ちゃんからは考えられない強い口調。

「れ、蓮都……。蓮都だよ！」

とつやに頭の中に浮かんだ甥っ子の名前を出してしまつた。あの田の中に入れても痛くない可愛い存在。

千里ちゃんは、私が甥っ子を可愛がつてゐる事を知つていて、だから、何も不思議に思わない。……はず。

「蓮都って、桜音さんの甥っ子さんでしたっけ？たしか幼稚園の」「うん。ほら、いつもお兄ちゃんか義理姉ちゃんもいるでしょ。今回は一人つきりなの。だから、つい服とか買つて浮かれちゃつたんだ」

「そうですか。驚いてしまいましたよ。日下部さんがデートなんて言つから」

千里ちゃんは良かつたですと言つながらほつと息を吐くと、癒し系のオーラが徐々に戻り始めた。  
良かつたいつもの千里ちゃんだ。

けどなんで急に空氣が変わっちゃつたの？

「逢月。お前のとこ結構人間関係面倒なんだな

「は？」

田下部君が耳元でぼそっと言った。

「お前は良いんだよ。どうせ鈍いから気付かないだろ  
そう言つて髪をグシャグシャにされてしまった。

鈍いって何よ。

「それに気づくと厄介な事になるから、気づかない方がいいのかも  
しない」

第八話 嵐の前のいちやつき～（前書き）

今回少し長じよつな気が…

## 第八話 嵐の前のこちやつか?

「やつ……離して……」

「桜音、そんなに暑れて暑くないのか?」「暑いよ。暑いに決まってるじゃん。」

「だったらこの腰に回した手を離してよ……。」「離したら逃げるだる」

「そりやあ、逃げるに決まってるでしょ。」

「だつてこんな状況が続いたら、心臓が持たないもん……。」

外にいるからたまに風が吹いて涼しいけど、夏だしそれにこの状況がより暑くさせていた。

海は体育座りをしているような格好で、足と足の間に私を挟んで抱きしめている。

なぜかメールで呼び出されたのは屋上。壁にもたれて寝ているのかな?と思つて近寄つてみれば、いつなつてしまつた。

何度もがいてもそこから脱出する事は出来ない。

「今、授業中なんだナゾ!……」

「どうせ自習だろ?」

「海だつてあるでしょ!……」

「俺らも自習。そんな事より昨日買つてきた服つて、俺とのデート用つて本当?すごい時間かけて選んでくれたんだつて?」「デート……?土曜に出かける事を言つてんの?」

付き合つてないから「デートつて言わないんじや……」

「つていうか、なんで知つてるの!?」

「海が迎えに来てくれた時言つたっけ?」

昨日、日下部君と千里ちゃんとあの後、ご飯食べたりなんだかんだ

して少し遅くなってしまった。

そしたら海が駅まで迎えに来てくれた。

駅から家まで徒歩五分だから近いんだけど、夜道の女の子一人歩きは危ないからって。

そしてなぜか暗いからっていう理由で手まで繋いで帰った。街頭あるから転ばないのに。

「悪い。言つたの俺。昨日お前と遊び行つたつて口滑らせたらこいつ機嫌悪くなつてさ~」

そう話したのは、うちわで仰ぎながら上半身をあられもない姿でいる田下部君だった。

「服着てよーー！」

慌てて田下部君から視線を外す。

「暑いんだよ。だだでさえ気温が高いのにお前らがいちゃついてるから、ますます暑い」

「いぢやついてなんかないつてばーーー！」

田下部君のその台詞に早く海から離れようともがきまくった。すると逃げられないように片手を私の腰に回し、空いたもう片方の手で髪を梳くように頭を撫でてくる。うつ。私頭撫でられるのに弱んだよね……

あんなに暴れてたのに、すぐに大人しくなってしまった。

「桜音はこうされるのが好きか？」

だつて頭撫でられるの気持ちいいもん。

「…………すき」

体の力を抜き海にもたれるように身を預ける。

海が一瞬体を固くしたかと思つと、ふに手の感触が消えてしまった。

「海、もつと~」

「…………」

「うーん、いい加減にして次いーこと」  
うーんと撫でて欲しくて、海におねだりした。

すると頭を撫ででくれるどころか、なぜか強く抱きしめられ海の胸に埋まってしまった。

ワイヤシャツのゴワゴワした感触を感じる。

「何!? 何も見えないんだけど! ?」

視界は白一色

よ？ 毎が可か言つた

「海が何か言いたいのか聞く間にえりなんとか頑張って顔を見ようとしたら、  
「桜音、今こっち見ないでくれ」と言われて頭を手で固定されてしまった。  
なんの一体。

あれ  
？

「海」

卷之三

「何が

心臓の音すこしけど?

海の反腐の

海の返事の代わりに、旦下部君の笑い声が聞こえてきた。

しかし、これを全校生徒に見せてえ。クールな王子の意外な一面つ

「えつ、見たい」

見ただけで視界は相変わらずのまま、

「撮るな」

## バタン

海の低い冷たい声と共に聞こえたのは、ドアの閉まる音だった。  
ばたん？

「……って！！今誰か居たの！？」

この状況を見られたのなら、早く口止めを！！誰だかわからぬ  
いけど誤解なんです！！

よつやく緩められた腕から抜けだし、海達を見るが一向に焦る様子  
がない。

「居たっていうより、覗いてたが正解だな」

「あれは覗いてたっうより、ただ入れなかつただけだろ」

「何でそんなに二人共冷静なの！？」

「あ～心配しなくていい。あいつは誰かに言つとかはしねえよ。つ  
うか出来ねえ」

「日下部君知ってる人なの？」

「あれはお前も知ってる奴だ」

……知ってる人？

「今頃見たこと後悔してるはずだ。これでやっと俺と状況が対等だ  
という事がわかるだろ」

海はあざ笑うように言葉を吐き捨てた。

海も知つてて日下部君も知つてる人つて事は

「涼？」

「なんで涼なんだ」

「水谷なら遠慮せず入つてくるだろ」

「言つておくが俺はあいつと直接面識はない。ただ通りすがりざま  
に睨まれたり、優越感に浸つたような目で見られるだけだ」  
えつ、それって嫌われるんじゃないの？

「嫌いだらうな」

心が読めるのか？今私が思つたことを海が口にした。

「嫌うつうか、ライバル視だろ」

「どうでもいい。とにかく渡すつもりはない」

「そう言つて未だ離していなかつた腕に力を込められ、また海の方向に体を寄せられてしまった。

何を渡すつもりはないんだろう？」

## 第九話 バッドタイミング

ロッカーを開け、教科書を取り出す。

良かつた、早く気づいて。

みくと帰るために一緒に昇降口まで来た時に、ふと忘れた事を思い出したのだ。

宿題出てたのすっかり忘れてちゃってたんだよね。

「忘れ物ですか？」

「千里ちゃん」

花を抱えドアの所から教室を覗いていた。

千里ちゃんは華道部だから、たぶんあの花は部活で使うんだろう。視線が合うと、優しく微笑まれる。

花が似合いすぎるよ。

「うん。数学の教科書」

「ああ、たしか課題が出されてましたよね」

「千里ちゃんは部活？」

「ええ」

「そつか。もう少し話してたいけど、みく昇降口に待たせてるから行くね？」

「ああ、そう言えば中庭の人みましたよ」

話もそこそこ切り上げて昇降口に行こうとしたが、千里ちゃんの言葉で止められてしまった。

「あの人……？」

誰だか分からず首を傾げる。

「在原海です」

海の名前が出て思わずビクつく。

なんで私にその事を言うの？勘ぐりすぎだよね？ただの世間話みた

いな物のはず。よし、Jリーグは軽く流そう。

「へ～、そうなんだ」

「バスケ部のマネージャーと一人でいましたよ。知つてました？あの一人毎回部活一緒に行つてゐみたいですよ。仲が良いですよね」  
そう言つてニーッ「コリ笑つた千里ちゃんはどこか意地悪。

「そりなんだ……」

そんな事知らなかつた。知りたくもない。

なぜかその話を聞いて急に気分が重くなつてしまつた。  
頭に浮かんできたのは、片桐さんの隣で笑つている海。

「付き合つてゐるって噂もありますよね。美男美女同士お似合いだと  
思ひませんか？」

「そり……だね」

痛む胸を押さえ、ビうにか言葉を返す。

どうしたんだろ？、苦しいよ。

「たしか他にも」

「じめん、千里ちゃん。私、みく待たせてるからそろそろ行くね……」

…

「お引き留めしてしまつたようですね。それじゃあ、氣をつけ  
て桜音さん」

これ以上ここに居て一人の噂を聞かされるのが嫌だから、みくを理由に教室を出た。

なんで今日に限つて千里ちゃんこんな事言つの？  
噂話なんて今まで一回もしたことなんてないのに

「私、何しに来たんだろう……」

気づいてたら昇降口ではなく中庭に居た。

覗き見なんて良くないし、もう居ないかも知れないじゃん。

みくも待たせているし帰ろう。

公舎に戻ろうとしたら、僅かだが声が聞こえた為その方向に足を進める。

居た。

でも遠いせいか、何を言っているかまでは聞こえない。

一応見つからぬように物影に隠れてみる。

片桐さんが海の腕にすがって何か捲し立てるように立っている。片桐さんと田があつてしまつた。

見える。

海の様子は後ろ姿だけなので分からぬ。

何か揉めてるのかな……？

聞こえてくるのが所どこの声なので、よくわからぬ。

見過ぎてしまつたのか視線に気づいた片桐さんと田があつてしまつた。

やばっ、気づかれた！！

片桐さんは一瞬目を大きく見開いたかと思つと、口角をあげた。

えつ、何？

嫌な予感する

「桜音さん、何してるんです？」

えつ！？

突然声を掛けられて思わず大声を上げそつになり、手で口を押され  
る。

いつの間にか背後には、千里ちゃんが立っていた。  
なぜこのタイミングで！？

「千里ちゃん……どうして……？」

「あつ」

「え？」

なつ

千里ちゃんの声に急いで視線を戻すと、海と丘桐さんがキスしていった。

足に力が入らず、思わず地面に崩れてしまつ。

手が震え、唇がやたら渴いてくる。

どうしてこんなに動搖してるので…キスシーン初めて見たから？

「なんで……？」

呼吸が上手く出来ない。

嫌だ。

## 第十話 涙

「大丈夫ですか？」

気づいたら、もう一人はいなくなっていた。

力が抜けて動けないよ……

私は崩れ落ちたままの体勢でいる。

千里ちゃんがかけてくれる気遣いに何の反応も出来ない。

たださつき見てしまった事に思考が支配されてしまっていた。

それを振り払つように頭を左右に振る。

もしかしたら、見間違えかもしれない……

そういう風に見えただけかだよね、きっと。

「キスしてましたね」

「っ

そんなわざかな思いも、千里ちゃんの言葉で打ち消されてしまう。自分でなんとか誤魔化そうとしても、他の人に言われてしまったら意味がない。

目から落ちる涙がスカートにシミをつくりしていく。

「どうやら噂も本当のようですね」

「やめて……」

そんな事今言わないで。

止めたのに、涙が止まらない。

なんでこんなに嫌で仕方がないんだろう。

「桜音さんは泣いても可愛いんですね」

そう言って千里ちゃんは私の顔を輪郭に沿つてぐるぐると、顎に手をかけ顔を上げさせる。

千里ちゃん……？

「んっ」

突然眼尻に這つた感触に体がビクとなつた。

千里ちゃんの唇。

それが涙をすくつていく。

「やつ」

感触はだんだん眼尻から頬へと移つていつている。  
このままじゃ唇にあたっちゃう……！

思わず目をぎゅっと瞑つたけど、唇にその感触が落とされる事はなかつた。

「それ以上やつたら、お前確実にこいつに嫌われるぞ」

この声

千里ちゃんの視線はすでにその声の人に向いている。  
田下部君どうしてこりこり……？

「気持ちもわからないでもねえけどよ」

「……余裕ゼロなんですよ」

「だからこなんならしくねえ事してんのか？」こいつ泣いてるじゃねえか」

「これは僕だけのせいじゃありません」

涙と腫れぼつたい瞼のせいで視界が悪い。  
ぼーっとしか一人が見れず表情までは見えない。

「お前もいつまで泣いてんだ」

田下部君が溜息を吐き、しゃがんで視線を合わせる。

「……つく。泣いてないもん」

泣き顔見られたくないから、涼以外の前でなんてめつたに泣かないのに、

今日に限って千里ちゃんや日下部君に見られるなんて。手で「シゴシ」と涙を拭つたせいもあつてか、痛い。

「だあ～っ、～すんな！～赤くなるだらうが！～濡れたタオルとかで拭け」

似たような事昔誰かに言われたよくな……

『だあ～っ！～こすんじゃねえよ。赤くなるだらうが！～ハンカチでも濡らして拭け』

あれ？一瞬学ランを着たピアスの男の子の姿が頭をよぎったような

……

顔は靄がかかつたように見えなかつたけど。

「お前、何キスされそつになつてんだよ」

「なつてないよ！～そういうのつて普通好きな人としかしないでしょ！？」

好きじゃなくてもする人もいるけど、千里ちゃんはそういうタイプじゃないし。

「僕は好きな人としかしたくないですよ」

「ほらっ。千里ちゃんもそう言つてるじやん。だから、私にキスしようとしたなんて言いがかりをつけないで」

「お前な、あの状況でそれか」

そりやあ、私だつてキスされるかと思つたけど私にそんな事しても何の得もしないから違うもん。

「日下部君は大きなため息を吐くと、いきなり私を米俵のように担いだ。

「うわっ」

「行くぞ」

「何処に！？」

日下部君の肩に体重を預けるように担がれている。

揺れる！…揺れる！…

「掴まつてな」と落ちるからな

落ちるとこ、言葉にビビつ、とつあえず田下部君の首に腕を回す。必要以上の力を加えてしまったのか、ぐううといふ声が聞こえた。

「馬鹿かお前は！…そんなに締め付けると死ぬだろ？」「…」

「いめん」

「藤原は少し頭を冷やせ」

千里ちゃんを残し、私達は中庭を後にした。

「隙だらけなんだよ。お前は」

それ涼とか海にも言われた事あるけど、隙って何なの？

白い机に薬品が綺麗に並べられている棚、カーテンのある数個のベット。

田下部君に連れてこられたのは、保健室だった。ちょうど先生が居なく、部屋には一人だけ。

こいつてこつ来ても、消毒液の匂いするんだよね。

「ほり、これで田冷やせ」

「ありがとう」

差しだされたのは濡れタオル。田下部君がさつき自分の部屋のよう

にその辺をあわって探し出してくれた。

「横になりたきや、そこにあるベッドで寝てろ」

「どうか行くの？」

「ああ。お前の鞄、中庭に置きつ放しだつたら？あれどつてへる

「いろいろごめん」

迷惑掛けつ放しだ。

「気にはすんな」

扉の開く音と一緒に、人の気配が消え一人だけ残されてしまった。  
ほんの一時間ぐらいの間にいろいろありすぎる。

「はあ……」

扉の開けられる音と一緒に人が入ってくる気配がした。  
あれ？ もう戻つて来たの？

「日下部君、早いね」

返事がないって事は、もしかして違う人？ あつ、みくが探しに来た  
のかな？

タオルを目にあてているから、何も見えない。

「悪いけど、私は日下部君じゃないわ」

返ってきた返事は、今私が一番聞きたくない人の声だった。

## 第十一話 崩れる景色

「やつくりと田を覆っていたタオルを取ると、そこに居たのはやつぱり予想通りその人だつた。

こんな時ぐらいは外れてくれればいいのに。

「部活で使つている湿布がなくなつたから貰いに来たの」  
黒い長い髪はしっかりと結えられ、Tシャツにハーフパンツのジャージを着た片桐さんが立つていた。  
私を見るなり不敵な笑みをこぼす。

「田じうかしたの？」

「……別になんでもないです」

「そう？赤くなつて腫れてるみたいだけ。ちやんと冷やさないと  
駄目よ」

返事は返さずただ手を握りしめる。

田下部君早く戻ってきてよ。

二人つきりの空間がやけに重い。

この人と一緒に居たくない

変だ、私。片桐さんに何かされたわけでもないのに。

耐えきれなくなり保健室から脱出しようと、片桐さんの横を通り過ぎようとしたんだけど出来なかつた。

片桐さんが私の腕を掴んだからだ。  
なんで……

「私湿布のある場所分からないの。探すの手伝ってくれない？」

「「めんなさい。時間ないんで」

「いいじゃない。それとも私と居たくない理由でもあるのかしづら」

「別に」

「やうなの？てっきり私と海がキスしてゐのを見てしまつたからだと思つたんだけど」

「　」

思わず顔をあげると勝ち誇つたよつた笑顔を見せられ、理由のわからぬ苛立ちを覚えた。

「図星？」

鉄の味が口の中に広がつて気持ち悪い。

ビタやう無意識に噛みしめていたようだ。

「悪いけど、海に近づかないでくれる？」

「……そんなの片桐さんと関係ないはずです」

痛つ。

掴まれてこむ腕がさらに圧迫される。

「でしゃばりないで。あれを見てまだわかんないの？海は私の彼女なのよ」

「彼氏……」

「そつよ。私の彼氏に纏わりつかれると迷惑なの。海は優しいから貴方を邪険に出来なこのよ」

たしかに、自分の彼氏と仲良くする女の子はつとおしげだらう。前に涼に彼女が居た時も似たような事を言られた。

「あつ、これ秘密ね。彼の恋人となるといつて大変でしょ？周りが煩くなるし、嫌がらせとかにもあつちやうもの。もじばれても、きつと海が守つてくれるから安心なんだけどね」

止まつたはずの涙がまた溢れ出す。

掴まれてた腕が自由になり、鈍い痛みだけが残る。

痛いのは腕だけじゃない。

「あら、どうして泣いてるのかしら?どこか痛むの?」  
クスクス笑いながら片桐さんは顔を覗き込んできた。

コイビト……カレシ……

頭の中はもうすでに真白。

揺らぐ足元で、ただ立っているのが精いっぱいだった。

## 第十一話 秘密の場所

「…………」「くくく

唇を結んで嗚き声を漏らさないようにしているけど、それは無意味な事だつた。

誰も居ないから思いつ切り泣けるけど、そうはしたくない。そうしてしまえば、きっと止まらなくなってしまう。

「やだよ…………海…………」

海と片桐さんが付き合つていても私には関係ないはずなのに。変な敗北感と共に、何かモヤモヤしたものが私に纏わりついている。なんで?自分の事なのにわかんないよ……

保健室で片桐さんと逢つた後、気がついたらここに来ていた。

ここは小高い丘にある小さな教会。さすがに鍵がかかっているから、中には入れないので階段に座つている。

ここに来たのは中学以来。  
ある人が教えてくれた秘密の場所。

空には星が輝き、辺りは静寂で包まれている。  
あれからどれくらい時間が経つたんだろう?  
すっかり暗くなっているから、時間は結構経過しているはず。

……今何時なのかな?

携帯で確認しようと、ポケットを漁つてみたけど探しているものは見つからなかつた。  
あ、鞄の中にしまつたまだつたんだっけ……

どうしよう、そろそろ家に帰らなこわや。明日も学校あるし……  
でも帰りたくない。

帰つたら、海が居るもん。そしたら絶対また思い出してやひ。  
そうでなくとも、しつこいぐらい頭に焼きついてるの

自由に眠る事が出来ればいいのになあ。そしたらその間は考えなくて済むもん。

痛みだした胸を押さえ、壁にもたれ掛けり皿を開じかけるがすぐにまた開いた。

誰かに名前を呼ばれたような気がしたのだ。  
気のせいじゃないよね……？

「 音… 桜音…」

やつぱ聞こえる。

誰かが私を呼んでいるらしく、その声がこの教会に近づいて来ている。

海……？ じゃないよね。

ここを知っているのは、一人しか居ない。  
ここを私に教えてくれたあの  
立ち上がり、声のする方向へと向かった。

「あのー、涼？」

私を探していたのはやっぱり涼だった。

どうしたの？と聞くまもなく無言で抱き寄せられてしまい、今現在にいたる。

何度もなく感じたことのある体温は少し高く、走ってきたのか耳に掛かる吐息も熱い。  
もう一度と離さないとでもいうくらいに腰に回された腕は、私を強く固定している。

「……良かった。やつぱこにこいたんだな」「やつと発せられた言葉は弱々しいものだつた。  
もしかして私の事探してくれてたの？」

「ごめんな、涼。もしかして迷惑かけちゃった？」

「桜音の事で迷惑なんてないよ。それより、あいつも心配して探してるから電話しないとな」

左手で私を抱きしめたまま、右手で制服のズボンから携帯を取り出すと誰かに電話をかけ始めた。

「桜音いたよ。　ああ、大丈夫。は？来る？こ？駄目、教えない。ここは俺と桜音の秘密の場所だから」

誰としゃべってるんだろう？

口パクでダレ？と聞くと、海だよといつ答えが返ってきた。

えつ！？海！？

「今から桜音を家に送るからそのまま」

「嫌つ！！家には帰りたくない！？」

涼の言葉を遮り、大声でそれを拒絶すると涼は目を大きく開いた。

「どうした？家に帰りたくないのは、海のせいなのか？」

首を縦にコクンと動かし、涼の制服にしがみついた。

やだ。会いたくない。

「わかった。それじゃあ、家にねいで。いつかは桜音の事についてでも歓迎しているから」

「だめだよ。迷惑かけちゃうもん……。」

「わざわざも言つただろう? 桜音の事で迷惑な事なんてないって。それに、お袋達も桜音に会いたがってる」

でも……

「……とこつわけで海、桜音は今日俺の家に泊まるかい。じゃあなやつ聞いて涼は携帯の電源を落とし、ポケットにしまい込んだ。なんで電源」と切ったんだら?」

## 第十一話 秘密の場所（後書き）

そのうち桜音と涼の過去編とかもかけたらなーと思つてると  
ど、なかなかタイミングと文章力が……（・\_・・）  
ここまで読んで下さった方、ありがとうございました！

## 第十二話 涼の家

「悪かったな、騒がしかつただろ」

「ううん。おばさん達と会つたの久しぶりだつたし」

涼の言つた通り、水谷の人々は私を歓迎してくれた。

本当は目が腫れてたから心配されると悪いので、涼の部屋に直に行きたかつたんだけど。

でもそれも私の危惧に終わってしまった。

どうやら私が一人暮らしをして寂しくなつて泣いてしまい、涼を呼んだと思つたらしい。

「涼の部屋久し振りだね」

「そういえば、最近来てなかつたもんな  
ベットに背を預けながら、辺りを見回す。

壁には有名バスケ選手のポスターが貼られ、雑誌や漫画が床に置かれていたりしている。

海とは正反対に生活感がある部屋だ。

中学の時は毎日のように入り浸つていたな。

「桜音、海が原因つてどういう事?」

「それがよくわかんないの。海に付き合つてる人がいるつて聞いて

「ちよつと待て。誰に恋人がいるつて?」

麦茶を口元まで持つてきていた涼の動きが止まる。  
やつぱ涼も知らなかつたんだ。

「だから、海だつてば」

「桜音、それ何かの間違えじゃないのか?」

「間違えじゃないもん!! だつてキスしてたんだよー? それに片桐

さんも付き合つてゐるって言つてたもん……

「うう……言葉にしたらまた涙出そう。

それに気づいた涼が、指で零を払ってくれた。

「それで鞆学校に置いていなくなつたのか？」

首を縦に動かす。

「だから海と顔合わせづらいから、家に帰りたくなかつたのか？」

その質問にも首を縦に動かした。

「涼、わかんないの……なんでこんなに気になるの？だつて海が誰と付き合つても自由でしょ？なのにキスとかもして欲しくないの」涼はクスクス笑つている。

人がわかんなくて頭の中混乱している、元のひに、なんで笑つてるの！？」

不機嫌になつたのに気づいたのか、涼は私の頭を撫でた。

「うう……さすが私の弱点を知り尽くしている。これじゃ、機嫌戻つちやうよ。

「別に桜音を笑つたわけじゃないんだよ。ただ、あいつがそれを聞いたらどうなるか想像しただけなんだ」

「あいつ？」

涼は視線を窓辺に移すと、闇夜を照らしている月を見つめる。

その瞳は揺れてどこか不安定だ。

「……もう少しなんだな。まさかこんなに早く来るなんて思つてもいなかつた」

「何がもう少しなの？」

一度目を閉じゆつくりと開くと、意地悪な笑みを私に向けてきた。

「教えない」

「何で！？」

「俺はもう少しのまま桜音といつじていたいから」「は？」

「まあ、気にするな。それよりあいつ大丈夫かな」涼は切っていた携帯の電源を入れると、何かボタンをいじり始める。そして画面を見ると、溜息を吐きだした。

「すつげー、メールの数」

涼は携帯のボタンを数回いじると、それを耳にあてた。誰にかけてるんだろう？

「よお、大丈夫か？」

『…！』

電話の相手が大声を出したのか、涼は携帯を耳から遠ざける。その時、どぎれどぎれだか声が聞こえてきた。

日下部君？

「やつぱ機嫌悪かったか、海は。……ああ、やつぱそうなったか。は？なんで電源切ったかつて？携帯の電源入れてると、理由聞くまでかけてきそうだったからさ。……そんな怒鳴るなってわかつてるから。ああ、悪かったって。……泣くなよ。今、桜音に変わるから」そう言つて携帯を渡される。

「もしもし？」

『もしもしじゃねえよ！』

「あつ、やつぱ日下部君だ」

『お前な、海がいるから帰りたくねえとか電話口で言つな！本人に丸聞こえだらうが！』

あ、やつぱり。だってあの時はそれどころじゃなかつたんだもん。海、気にしてるよね……

『いいか、よく聞け。海はとりあえず俺が学校に連れ出すから、一

田家に帰るなりその後にしろ。鞆はお前の部屋に置いておいたから

「あつ、鞆届けてくれたんだ。ありがと」

『ああ、今すっげー後悔してる。こんな事になるなら届けんじゃなかつたつうの。

本当はお前らの同棲生活についても追及したいが、今はそれどころじゃない。いいか、海に会うのは学校が終わってからにしろ』  
やつぱ会わなきゃダメだよね。このままついでわけにもいかないし。

それに心配して探してくれたみたいだから、謝らなきゃいけないもんね。

『とりあえず放課後までに俺がなんとか宥めておく。そのまま会つと、たぶん危ねえ』

「なんで危ないの?」

『海がキレてるからに決まつてんだろうが!! あいつマジ怖かつたんだぞ……逢月、マジで頼むからいこうり察せ。あいつが不憫でしようがない』

大きく溜息を吐きだすと、水谷に代わってくれと弱々しく言われた。日下部君が溜息吐くの初めて聞いたかも。

海がキレてんのつて絶対恐い。考えただけで寒気が。  
でも日下部君が宥めてくれるって言つてたし、大丈夫だよね?  
日下部君と海は小学校からの付き合いらしいし。  
そんな考えが甘いという事を次の日身をもつて思い知るなんて、この時の私は知る由もなかつた。



## 第十四話 捕らえられたお姫様

少し前を歩く人物は後ろを振り返ると、私が付いてきているかどうかを確認した。

まったく、これで何度もだらう……

前を歩く人 岸君に少しうるさぎりしながらそれでも足を進め着いて行く。

「岸君、ちゃんと着いて行くから大丈夫だよ。そんなに心配なら、やつぱりいつもの通り隣歩くよ?」

そっちの方が自然だし。

「だ、ダメだよ!! 絶対一メートル以上距離置いて。これは絶対守つて!! いい? わかった?」

手で壁を押さえるようなしげきをしながら、いつも来るなど言わんばかりに強制的に距離を取らされる。それなら何度も確かめないで欲しい。

朝、教室に行くとD組の岸君が待っていた。

思えばその時から様子がおかしかったんだよね。

だって両手で握り拳を作つて教室の前で棒立ちしてたんだよ?

それ見たみくなんかは、「ちょっと…こんな所で告白…?」「なんて騒ぎ始める始末。

話を聞くと委員会が緊急に決まつたらしく、わざわざ呼びに来てくれたそうだ。

「一昨日保健委員会あつたばかりなのに、一体なんの用なんだろう

ね

……。」

岸君は何の反応も示さずそのまま歩き続いている。  
声の大きさ的に聞こえたよね。

もしかして無視？

気まずい雰囲気に耐えきれず、いつものように何気ない会話をしようとしたのに。

委員会仲間として結構仲良くしてもらっているはずなのに、今日の岸君は私とやら距離を置こうとしているように見える。  
まるで私と関わりたくないようだ。  
もしかして嫌われちゃったのかな……？

足を進めるにつれて、人の気配が遠ざかって行く。

本館と西校舎を繋ぐ廊下ぐらいからすれ違う人が居なくなってきた。  
西校舎は視聴覚室などの特別教室や空き教室ばかりだからあまり人が来ない。

その為ものすごく静かで一人の足音だけが響く。

「岸君ここなの？」

足はしつつ教室の前で止まった。

あれ？なんか変。

ドアの前に立つとおかしい事に気づいた。

ドア越しに人の気配がまったくしないんだけど。

二・三人なら気付かなくても済むけど、委員会だから大人数のはずだ。

それならすぐにわかる。

「逢月さん、先入つて」

入りたくない。うつん、入れない。体が拒絶して動こうとしないよ。誰だつて危険だと思った所にわざわざ自らのり込んだりしない。

「早く」

初めて本能というものを認識したのか、先を促す岸君に首を横に振り拒否した。

「『めん逢月さん…』」

「は？」

じれったくなつたのか岸君がドアを開け、入りたくない領域に私を放り込んでしまつた。

手と足に絨毯の感触と少しの痛みを感じる。

「痛い……」

なかなか中に入ろうとしない私に業を煮やしたのか、あらう事が岸君は突き飛ばしたのだ。

その上廊下を走る音が聞こえたから、たぶん逃げたんだと思つ。突き飛ばした上に逃走つて酷いよ、岸君。

一体何がしたかつたの？

そんな私の疑問は、すぐに消える事となる。

ドアの閉まる音に鍵の掛けられる音

そしてドアの前で私を見下ろしている人を見た瞬間に。



## 第十五話 龜裂

空気が重く息苦しい。

だんだんと指の先端から体が冷たくなっていくのを感じる。  
海は突き飛ばされて崩れたままの体勢の私をただ見下ろしていた。  
その表情には感情というものを感じない。

日下部君が昨日、たしか機嫌が悪いっていつてたはず。  
でもこれは機嫌が悪いという部類ではない。

海の顔の精巧な仮面をかぶつた他人ではないのか。  
肌に突き刺さるような視線に、威圧的な空気。

「こんな海知らない。」

昨日の事あやまらなきやと思つても、風邪をひいて喉を傷めた時のようにになかなか言葉を発する事が出来ない。  
たつた一言の「めんなさい」を言いたいのに。  
伝えたい事を伝えられない事が酷くもどかしい。  
それなのに、心とは反して体が強張つて仕方がなかつた。

「……海」

やつと蚊の鳴くような声で出たのは、名前だった。  
すると今まで微動だにしなかつた海が、崩れたままの私を抱きかか  
えると、近くのイスに座らせてくれた。

「怪我は？」

首を横に大きく振る。

それを信じてなかつたのか海は跪くと、怖くて握りしめていた掌を  
ゆっくりと解き怪我をしていないか見た。

掌を見終わると今度は膝を見よつとしたから、そつと海の肩にふれてそれを制止する。

妙に心配症なところはこつもと回じみたいだ。

この間も包丁でほんの少し指を切つただけなのに、傷口からばい菌が入るかもしけないからと消毒をされた上に絆創膏を貼られました。

その後、紙で手を切つたぐらこの深さだから放置しておいても平気なのにこて言つたらものすぐ怒られたつけ。

そんな事を思い出してたら、こわばりが少しずつ取れてきた。

「ありがとう。大丈夫だから」

良かった……。ちゃんとしゃべれる。

海は肩を掴んでいた手を外すと、両手で優しく包んだ。

「俺が居るから帰りたくないって電話口で言つてたよな？」  
うつ。やつぱり聞こえてたんだよね。

「あれはどういう事だ？」

それを言つたら海と片桐さんのキスシーンを見けやつた事を言わなきやいけなくなつちやうじやん。

嫌だよ。海の口から片桐さんとけあひ合つて言葉聞への。

「今日はちゃんと家に帰るから」

「答えになつてない」

じゃあ、言えばいいの？

気になるから、片桐さんと付き合わないでつて。

……そんなエ「ト」的な事言えないよ。

「ねえ、海。なんで私と住んでるの？」  
一瞬包んでいた手がピクリと動いた。

「お父さんに頼まれたから一緒に住んでいるの？」

「そうだ」

そう答えたのを聞いた瞬間、何もかもがもうどうでもよくなつた。  
もういいや。

答えはこれで正解なはずなのに、それが酷く悲しい。  
私はそれ以外の理由が聞きたかった。  
だつてまるで義務みたいじやん。

「……わかつた」

だから、私に優しかったんだね。同居人だから。  
私と住んでるのも、頼まれたから仕方無くなんだ。  
思考はマイナスのほうばかりに傾いていく。

「もういいよ。私一人で大丈夫だから」「  
桜音それは、一体どういう意味だ？」

「わかんない？」

「とにかく、こっち向け

俯いてた顔を無理やりあげられそうになつて、思わず伸びてきた手  
を弾いた。

「触らないで」

止めてよ。瞳に溜まつた涙を流さないようにしていろんだから。  
顔をあげてしまつたら、バレちゃうじやんか。

「もう、海とは一緒に暮らせない

## 第十六話　さよならを告げるとか

最初はこんな人と一緒に暮らせないって思った。

学校でも見かけるだけで一回も話したことがない相手だつたし、冷めてる顔しか見たことなく人間味を感じなくて少し苦手だつた。それに男の人だし、なにより私とは違いすぎる人だつたから。

私は人ごみに溶け込めるぐらいいの平凡な人間なのに、海は違う。学校でもファンクラブがあるし、家はお金持ち。

この同居は、庶民と王子様が民家で共同生活するようなもの。

そう思つてた。

けど実際暮らしてみると、違つた。

肉じゃがが好きだし、思わず見惚れてしまふ笑顔を見させてくれたりする。

学校では知られていない海の顔を知つていく。

それが私には嬉しかつたんだ。

だつてそれを知つているのが、私だけなのかなつて思つたから。

だから海との同居は後悔してない。

ただ我儘を言えば、もう少し傍にいてもつといろんな表情を見たかった。

S H R の終わりを告げる鐘が、教室内に響く。

あと数分もすれば一時間目の授業が始まるだろう。

早く出ていかなきや。

じやないと、もしこの教室使つクラス来たら見つかっひや。でも、離れたくないよ。

心がそう思つてゐるせいか、体がなかなか動こつとしてくれない。

それでも時間は刻一刻と進む。

秒針の音にせかされてしまい、私は仕方なくゆっくり立ち上がり、海の横をすり抜けドアの前まで歩いた。歩いていくうちに振動でだんだんと溜まつた涙が頬を伝つて、床へと落ちていぐ。

まだ泣くな。あと少し、この教室を出て海から見えなくなるまで。見られるわけにはいかない。こんなぐじやぐぢやの顔。

ガチャンと鍵をはずした音だけがやけに耳に残る。指に残る冷たい鉄の温度がこれが現実なんだと告げた。

バイバイ、海。

ドアを開けると生暖かい風が、頬を撫でつけた。

「そんなにあいつの傍がいいのか」

足を一步廊下に踏み出ると、海の抑制のない声が降ってきた。突然飛んできた怒りを含んだ聲音に、体が竦む。

「あいつって誰……？」

咄嗟に海の方向を見てしまい、慌てて視線を廊下に戻す。青い空を白い雲が悠々と泳いでいる。

顔見られてないよね。

振り返ったほんの一瞬だけ見えたのは、立つたまま俯いていた海の

姿。

「どうやつたら、お前とあいつの絆を断ち切る事が出来るんだ？」  
海の言つているあいつの存在がわからない。  
それに絆つて……

「それって、たぶん俺の事を言つてるんだと思つよ」

なんでここに？

さつきまで見えていた青空が、薄い水色の一ツトに変わった。  
人の気配を感じると共に、目の前にその声の主が姿が現れる。  
走ってきたのか顔には少し汗をかき、第一ボタンまで開けられたシ  
ヤツを掴みパタパタと仰いでいた。

涼

その人物が涼だと認識すると、不思議と安堵感に包まれた。  
よかつたこれで大丈夫。  
そう思つたら、強張つた体の力が抜けてきた。

## 第十六話 セーフな旅を叶えたヒント（後書き）

ブログ始めました。

何の変哲もない更新履歴とつぶやきが書かれています。  
お暇な時にもどうぞ。

<http://tripxandy.blog4.fc2.com/>

## 第十七話 向けられた嫉妬心

「熱いな」。桜音、中入つて。少しクーラーで涼みたい「そう言って出ようとしていた私を教室の中に押しめると、自分も入つた。

涼はこの緊迫した状況なのに、相変わらず自分のペースを崩してない。

「なんでここがわかつたんだよ」

「岸が桜音がやばい事になつてゐるから、助けてくれつて。それで、どうして桜音は泣いてるんだ？」

そう言って涼は、頬を流れる涙を指ではじくように拭いた。

岸君、逃げたんじゃなくて涼を呼びに行つてくれたんだ。

「桜音に触るな」

涼の醸し出す日向のような空氣とは反対に、海の空氣は指一本動かせないぐらい張り詰めている。

その声に体がまた硬直した。

せつかく大丈夫と思つたのに。

「海、あんま桜音を恐がらせるな

「なら、触るな」

怒鳴る海の声を無視して涼は、大丈夫か?と言しながら私を抱きしめると、泣いてる子供にするみたいに背中をとんとんと軽く叩き宥めてくれた。

私、もう高校生なんだけど……

でも、これ不思議と落ち着くんだよね。

「桜音、そいつから離れろ」

声に反抗するように、私は涼の背中に手を回し水色のベストに顔を

埋める。

暖かい。

クーラーのききました室内のせいで、少し冷えていた体にはひょうどいい体温だ。

すると海は舌打ちをすると、無理やり私を引き剥がすと涼から少し離れ、距離を置いた。

掴まれている一の腕が痛みで痺れる。

「やだやだ。涼、涼つ！！」

「他の奴の名前なんか呼ぶな！！」

それでも涼に助けを求めながら、掴まれた腕を外そうと何度も振つてみるがなんともならない。

なんで機嫌悪いの！？ううん、機嫌が悪いってもんじやない。これは怒ってる。私が、何かしたの？

「俺、前に言つたよな。そういう感情、俺に向けてもきりないから辞めろって」

睨む海をしり目に、涼は淡々と話しながら一歩ずつ足を踏み出し距離を縮める。

そして私たちの前まで来ると、大きな溜息を一つ吐きだした。

「あのな、俺は桜音の面倒見るので精一杯なの。だから、お前の事まで面倒みる気がないんだけど」

「誰もそんな事頼んでない」

「なら少し大人になつてくれ。他の事だと冷静に対処出来るのに、桜音の事になるとこれだ。じゃないと、桜音を任せることはできない」

「無理に決まってるだろ。お前と違つて俺には、ちっぽけな鍵に縋りつく事しか出来ないんだからな。それすら奪われようとしてんの」

「」

どうやって冷静になれっていうんだよーーー！」

海は掌が痛いんじゃないかつてぐらい机を叩くと、さつさより声を荒げて叫んだ。

うつ、痛そう。絶対赤くなつてるよ。

涼はそれ見て顎に手をかけ、首を傾げ何かを思案したかと思うと、「お前、もしかして、桜音と一緒に暮らせないとか言われたわけ?」と言つた。海の肩がビクンとわずかに動く。

それを涼が見逃さなかつた。

「ああ、なるほど。それでこの状況か。もしかして桜音が泣いてるのもそれが原因なのか?」

私は首を縦に動かす。

うん。だつて、さよならしなきやいけないから。

「そつか。なら、泣かなくていいぞ」

「……ほんと?」

「ああ。だつて桜音のただの勘違いだから」

そう言つてにこやかに笑うと、海の手から私の二の腕を解放してくれた。

まだ掴まれてる感覚がするその腕をさする。

そつか、ただの勘違いか。良かつた。これで問題解決。

つて何それ!?

「付き合つてないつて事!?」

「ああ」

「じゃあ、キスしてたのは!?」

「それは海に聞いたらしい」

あんなに止まらなかつた涙は、いつの間にか止まつていた。  
もっと早く教えてよ、涼。

「これは一人の問題だから、首挟まないようこじつけたんだけどさ。桜音泣いてたから、今回だけ特別」「おこ、ちょっと待て。全く話についていけないんだが、一体どういつことなんだ？」

「くわしくは桜音に聞け。おまえも、こんな事ぐらいでこれじゃあ、これからどうするんだよ。頼むからちゃんとしてくれない？」  
たとえ勘違いであろうと、桜音を泣かせないぐらくなつて

涼はそう言つて、射抜くように海を睨む。  
それを海はそらす事なく受け止めた。

「……悪かった」

海は、ばつの悪そうな顔をした。

海もそんな顔するんだ。

なんて事を考えているぐらいい少し余裕が出てきた私を、涼の一言で  
そのわずかな余裕を打ち消してしまった。

「とにかく、一人で話あって  
ちょっと待つて。まさか……

「桜音も勝手に結論づけないで今度からけやんと言えよ。な？」「  
ぽんぽんと私の頭を軽く叩くと、涼は片手を振つて教室から出て行  
つてしまつた。

ちょっと待つてよ。置いて行かないでっ！――一人つきりは嫌！！  
もしほんとに私の勘違いなら、状況的に不味くなる可能性があるん  
ですけど。

だつてここまで振り回しておいて、「『めんなさい勘違いでした』  
だけで済ませてくれる相手じゃない。  
絶対いじめられる。

涼を追いかけよとしたけど、また腕を掴まれてそれを阻止された。

「どういう事だか説明してくれるよね？桜音

壊れかけのゼンマイ仕掛けのブリキ人形のよう、ぎこちなく海の方向を見る。

その瞬間ものすごく後悔した。

だって、今まで見たことのないような笑顔をこっちに向けていたから。

あのへ、目が笑っていないんですけど。

うう……す、ぐく嫌な予感がする……

## 第十八話 海的罰の執行

「……といつ理由なの」<sup>わけ</sup>

私は中庭で見たことや保健室での片桐さんとの話、そして家に帰らなかつた理由を話した。

さすがに二人の仲が気になつて仕方がなかつた事には触れていない。

「なんでそんな事信じたんだよ」

海はあきれ顔で溜息を吐いた。

「だつて……片桐さんも言つてたし、キスしてたように見えたし」

「あれはただ引っ張られて触れただけで、キスでもなんでもないだろ」

よく考えればそうなのかもしれないなかつたんだけど、あの時はショックのあまり頭が回らなかつた。

「……本当にごめんなさい」

謝罪の言葉を述べ頭を下げる。

肩下まである少しづつのある髪がぱらぱらと落ち左右の視界を遮る。

許してくれるかな……

おそるおそる顔をあげ向かえに座る海の様子を窺いたいが、怖くてそれが出来ず目を瞑つたまま。

ほんの一・三秒しかたつてないはずなのにすゝく長く感じ、自分の鼓動の存在だけがやたら大きく感じる。

「とにかく今日は涼が間に入ってくれてなんとかなつたけど、次はどうなるか分からぬ。だから、今度からちゃんと俺に言つんだ。ほんの些細な事でもいいから。それから、すぐ人に人の話を鵜呑みにするな。本来なら良いことだと思つけど、桜音はそれが極端すぎる」「はい。本当にごめんなさい……」

「わかつたなら、顔あげて」

声のトーンは普段と変わらないように思える。

視線を海の足から顔にかけて少しずつ上げていくと、海は机に頬杖をついてただこっちを見ていた。

その表情はいつも学校で見せてるようにならぬでいて、表情が読めない。

「……許してくれるの？」

「ああ」

「また一緒に住んでくれる？」

「そうしてくれなきゃ俺が困る」

海が苦笑いで応えた。

それを聞いて安心して、少しだけ体の力が緩やかになり握りしめていたスカートを放す。

強く握りしめたためか、紺色のブリーツスカートは皺になっていた。良かった。

「安心するのはまだ早いんじゃないかな？ 桜音」

えつ……

その言葉に顔の筋肉が強張った。

「まだ話は全部終わってない。藤原千里の事が残っているだろ？」

えっと、千里ちゃんの事？

なんていきなりそんな話になつたか分からず、首を傾げると海の手が頬に添えられた。

「警戒心の無さすぎた桜音に、罰を受けて貰わなければならぬと思わないか？」

自分でも早かつたと思う。

その言葉を聞いて、脱兎の如く教室を逃げ出した。

「桜音、俺を撒けると思つてたの？」

最初は思つたよ……だって、追いつかれる……って思つたら逃げ切  
れたんだもん。

さすがにそんなのが何回か続くと、おかしくなってなつたナゾ。  
たぶんきっと海は遊んでたんだと思つ。

「諦めれば？」

近づいてくる海から少しでも遠ざかるために足を一步ずつ後ろに下  
げるが、すぐに硬い物体にぶつかりこれ以上さがれなくなつてしま  
つた。

やばい、もう壁。

「海、絶対こいつなる事わかつてたでしょ」

海は返事の代わりに口角をあけた。

「ずるい。ずるすがる。だからやすやすと教室から逃げれたんだ！！  
よく考えてみれば、いつも海は逃げ出す前に私を捕まるもん。  
結局運動部に勝てるわけもなくて、上手く誘導されるように追いか  
け回され、結局行き止まりに追い込まれてこいつなつてしまつた。

廊下の一番奥に私と海は一人向かってようやく対峙している。  
もう逃げ道ないじゃん。

どうしようかとあれこれ考えるが、最良な考えが浮かんでこない。

「本当に無防備すぎるし、無警戒すぎるよな」

「気をつけるから――今度から気をつけろから――」

「駄目。桜音って口で言つてもわからなそつだし。だから消毒も兼ねて教えてあげなきやならないだる？」  
しょ、消毒つて……まさか！？

海の端麗な顔が近づいてきたかと思ひと、頬に何か柔らかいものが当たられたのだ。

それが唇だとわかると、全身の血液が沸騰するよつた感覚に襲われた。

「「めんなさい」、「めんなさい」、「めんなさい」…ちやんとするから…！」

状況が余りのみこめてないくせに、その場から解放されるためにひたすら謝り続けた。

「桜音、わかつてないだろ」

「わかつてるよ。わかつてるから…！」

一回類にされただけで心臓は早鐘だし、体は逆上せたみたいになつてゐる。

あと数回されてしまつたら、絶対身が持たないよ。  
そうなつてしまつた時の事なんて想像出来ない。

「もうこれで消毒終わり。一回しかされてないもん」

たぶん日下部君に「あいつキスされてたぞ」みたいな感じで聞いたと思つから、誤魔化せるかもしねない。

「そうか」

「そうだよ～」

もう乾いた笑いしか出ない。

「おかしいな。『桜音さんの泣き顔は可愛らしいですね。肌も柔らかいですし。何度も合わせても足りませんでした』って聞いたらなんだが？」

海の眼が細められ、鋭い視線とかちあつた。

えつ、聞いたのつて千里ちゃんにー！？千里ちゃんがそんな事言つたのー？

「田下部君に聞いたんじやないの？」

「田下部には、藤原と桜音がちょっとあつたってしか聞いてない」

「もうなの？」

「今朝わざわざ藤原千里自ら、つちのクラスに報告しに来たんだよ  
海は顔を歪め凹々しそうに言つた。

なんでそんな事を。しかもよつて、海に言つなんて。

「ああ、そうだ。それた場所言つて。じやないと消毒出来ないだろ  
?もしまだ誤魔化そうとしたら、こいつまさにすみから」

「こつ……ぱ……こ……」

あつ、血の気が引いてくらつときた。

私の逃げるすべは、もう見回つの先生に見つかるしかないのかもし  
れない

## 第十九話 出された条件

「な、消毒じうだつた？」

「ゴホッ」

やばい。

隣に座る日下部君の問いかけに、飲んでいた紅茶が気管に詰まつた。私と日下部君は、中庭のベンチに座つてゐる。

良かった、放課後で。昼休みとかなら、人も多いから絶対視線が集中してたよ。

咳きこみながら、なんとか落ち着こいと鎖骨の下辺りを叩く。

それを見た日下部君は、「やつぱな」と言いながらニヤツと笑つた。

あの朝の消毒から数時間後になつてやつと平常心を取り戻す事が出来た。

それなのに

なおも笑つている日下部君を睨む。

やつと気持ちが落ち着いたんだから、その話には触れないでよ。

ほんと顔は赤いし拳動不審だしで大変だつた。

みぐには何かと勘ぐられたし……

「つていうか、なんで知つてんの！？」

「あ～それ適当に言つた。海の奴ああいう性格じゃねえか、だからまさかと思つたんだが本当にされてたんだな」

日下部君は、ソーダー味のアイスに齧りつく。

さつさくすぐそこにあら「コンビニに買いに行つてきたものだ。

あつ、冷たくておいしそう。やっぱ私も買ってきて貰えれば良かった。

「お前もよ、流されてばつかじやなくてたまにはちやんと拒否され。

嫌なら、殴つてでも海を止めろ。海だけじゃねえ、藤原の時だつて  
そうだ」「……うん。でもね、いい訳するわけじゃないけど海のは嫌じやな  
かつたんだ」

千里ちゃんの時は、海の事で頭回らなかつたからよく覚えてないけ  
ど。

「 は?

「あっ!...アイスやっぱしだよ!」

水色のアイスはやけに片方にだけ重心が片寄つていて、溶けた液体  
が棒を伝つて田下部君の指に流れている。

落ちちゃつよ。

「それどうひじやねえよーー!」

いや、でもアイスが……

「お前それどうこう意味かわかつてんのか?」

「何が?」「

「そうくると思つた。お前だもんな。んじやあ聞くが、もし俺にキ  
スされたらどうする?」

「富代先輩に言つける!」

即答で答え、膝の上に置いていた雑誌をめくつた。

「怖え……一瞬想像しちまつたじやねえか……。やつこう事じやな  
くつよ~」

田下部君は、「あ~」とか言いながら地団駄を踏み始めた。

「つたく雑誌なんて読んでんじやねえよーーお前の事だらうが!...」

「あ~っ」

立ち上がりつた田下部君に雑誌を取り上げられてしまつた。

ジャンプして取り上げようとしても、届かない。

これ今日中に読んで、みくに返さないといけないのに。」

「つまり俺じゃ嫌だつて事だろ? とじゃあ、他の奴はどうだ? 水谷は?」

「なんで涼が出てくるの? 涼でもキスは無理だよ。言つておくけど他の人も無理」

「それって、海だからいいんだろ?」

なんか海だからって限定しちゃつたらまるで私が海の事『好き』みたいじゃん。

「好き……?」

田下部君があきれ顔でこいつを見ていくる。

「私、海の事好きなの! ?」

そういうえば今考えるとそれっぽい事は多々あつたような気がする。片桐さんとの関係がやたら気になつて仕方無かつた事とか。

「俺に聞くな! !」

うそでしょー? 普通感覚でわかるの? こんな風にしてやつと氣づくなんて……

あ~、頭が混乱してきた。

「……私って鈍くな?」

「まあ、それは結果オーライつう事で。それと云つておぐが、まだ気づいてねえ事あるからな」

「これの他に! ?」

「ああ。けど、それももうすぐ解決するからいい。行くぞ」

田下部君は、私の腕を掴むと立たせ校舎の中に連れて行こうとする。

「もしかして、体育館に行くとかじゃないよね?」

「よくわかったな」

「やつぱり、そんな事だと思つた。」

告白なんでしたら、一緒に暮せなくなつたりやつ。

「言わないからね」

「なんでだよ」

「振られて気まずくなったりじつすんの！？私、唯一の接点なくすんだよ？」

「んな、振られるとはかぎんねえだろ」「かぎるよーー！」

掴まれていた腕を振りほどく。  
だつて高嶺の花すぎるじやん。私なんかじや無理だよ。

「海には言わないで。絶対に」

「さー、わかんねえな」

絶対言ひ。この口調だと。

口止めしなくちゃ。日下部君の弱点は……  
あっ、あつた。けどこれはさすがに可哀想。でも背に腹はかえられない。

ごめんね、日下部君。

「……もし言つたら、一度と富代先輩と遊び行く時誘わないから」  
いつもよつはつきりとした口調で告げた。

「はあ！？お前、それ俺にとつて一番の脅迫じやねえか！！」

そうなのだ。日下部君は富代先輩と遊びに行くには私がいないと行けない。

なぜなら、一人で遊びに行いつと誘つても断られるから。

「お前そういう奴だったのかよ。……わかつたよ。そのかわり、今すぐじやなくともいいから絶対自分の気持ちは伝える。  
あと、少し自分に自信を持て。お前はなぞぎる」  
それって告白しろって事ー？

「悪いがこれを約束しなきゃいけへ。部長の事は自分でなんとかするからいい」

それじゃあ、うんつていつしかなこじやない。

でも

「答えは？」

「うう……わかった。自身の方はなんとか頑張つてみる。でも、告白するのはすごく先になるかもしねりいよ？」

「あ～、構わないだろ」

条件付きでなんとか口止めに成功したものの、難易度が高すぎる。

はあ……私、これから先どうなるんだろう。

## ハロウイン企画 Trick or Treat? (前書き)

\* このお話はもう一人が付き合っている設定になっています。

## ハロウイン企画 Trick or Treat?

「イタズラしねえの？」

「……は？」

思わず歩いていた足を止め、隣を歩いていた人を見る。

日下部君はコウモリの描かれた袋からクッキーを取り出すと、それを口に運んだ。

日下部君が食べているのは、パンプキンクッキー。

さっきまで部活だったので、その時作ったものあげたのだ。  
同じようにその時作ったものをもう一つ持っている。  
それは海にあげるものだ。

「だからよ～、今日はハロウインだろ。あいつに堂々とイタズラ出来るじゃねえか」

たしかに今日はハロウインだからイタズラが出来る。  
でもそれはお菓子をくれない時であって、貰えば意味がない。

「あいつ菓子とかたぶん持つてねえぞ」

「そうかもね。でも、海の事だから絶対倍になつてかえつてくるからしないよ」

「ああ。あいつなら絶対そうするな」

「でしょ。まあ、海が寝ている時とかなら話は別だけね  
「寝ている時」

「うん」

「だって寝ていれば気づかれないから、イタズラしたことがバレないもん。」

「それなら、やり返される事もないし。」

「逢月」

「ん？」

「悪いけど、部室に忘れもんしたから先に海と帰ってくれ」

「えつ、うん。わかった。じゃあね、バイバイ」

「おう。またな」

そのまま田下部君と別れ、海の待つ教室へと向かつた。

えつ、寝てる。

海は机に伏せて寝ていた。

珍しい。ここまで近づいても起きないなんて……

今、手を伸ばせば触れるぐらいいの距離にいる。

『イタズラしねえの？』

「つ

田下部君ひそかに言われた言葉が頭によぎる。

今がチャンスじゃない？

もう一人の自分の囁きにあっさりと負けてしまった。

「Trick or Treat？」

起これないよう洩えてしまいうらうからこそでそつと呟く。

お菓子くれないからいいよね……？

といつか寝ているから返事なんて出来るはずない。

机に隠れていない頬にそつと唇を落とす。

普段なら恥ずかしくて自分からは絶対にしない。

でも今は、海が寝ているから……

「嘘じやないのか？」

海は上半身を起こすと、いつか側に体<sup>い</sup>と向けた。

「起きちやつたの！？」

「いや、寝てなかつた」

「なんで寝たふりなんかしてんの！？」

「日下部からメール貰つたんだ。寝たふりすれば良い事あるかもしれないって」

よけいな事を…

私もイタズラなんてよけいな事をしきやつたのよ……

「まさか桜音にこんな可愛いイタズラされるなんてな。ハロウインも悪くない。俺も楽しもつかな？」

「いっ、言つておくけどお菓子持つてゐるからねーーー。」  
お菓子があるから海は私にイタズラ出来ないはず。  
良かつた、今日部活あつて……

「Trick or Treat？」

海は意味深な笑みを浮かべる。

えつ、何で？お菓子があることを知つてゐるじやん。  
不思議に思つたけどお菓子を差し出す。

海はそれを受け取ると、机の上に置いた。

「これはこりない」

「な……んで……？」

いつも喜んで貰つてくれるのに。

「そんな悲しそうな顔するなよ。俺がこれを貰つたら、桜音にイタズラ出来なくなるだろ？だから、これはイタズラが終わつてから貰う

「……。」

それつて

いそいで机の上に置かれた袋を取り、それを海に押し付けた。

「いい。ほんとイタズラとかいいから！お菓子あげるからーー！」

「だから、これは貰うけど終わってからつて言つたろ？」

その後攻防戦を繰り広げた結果

私が白旗を掲げ、甘いイタズラを受けてしまった。

## ハロウイン企画 Trick or Treat? (後書き)

とこづわけで、ハロウイン企画でした～。  
じいじまで読んで下さった方ありがとうございました。

## 第四章 第一話 準備完了

「うわー」

鏡に映しだされる自分に思わず感嘆の声をあげた。  
毛先は緩やかに巻かれ、顔もメイクによつて少し大人っぽくなつて  
いる。

やつぱすじいや。自分じゃここまで出来ないもん。  
いつもと違う自分の姿に思わず笑みが零れた。

「気について貰えた？」

「うん。ありがとう、香澄義理姉ちゃん」

イスに座つていた体を捻り、後ろでチークブラシを持つているボブ  
カットの女性にお礼を言つた。

彼女は逢月香澄さんと書いて、私のお兄ちゃんのお嫁さん。  
つまり義理のお姉ちゃんにあたる人。

美容師をしていて、ここは香澄義理姉さんが働いているお店。  
今日は海と水族館に行く日なので髪とメイクをやつて貰いに来たの  
だ。

「気について貰つて良かつた。でも、桜音ちゃんがデートか。  
那智君が知つたら卒倒ものね」

そんな卒倒つて、一緒に出かけるぐらいでおおげせだよ。

つて言えないのがお兄ちゃん。

お兄ちゃんと私は年が十五離れていることもあってよく可憐がつて  
くれるんだけど、少し行き過ぎた所がある。  
お母さん達からはシスコンつて言われているんだよね。

「桜音ちゃん、絶対あの人見つかっちゃ駄目よ。そんな事になつ  
たら、一人の中を絶対邪魔しちゃうから。」

それに、芋づる式に同居の事がバレでもしたら大変な事になるわ

「うん。気をつけるね」

「今日は南町に行くって言つてたから大丈夫だと思つたが、一応用心するに越したことないものね」

お父さん達に聞いて同居 자체は知つているけど、男の人　海と同居している事は知らないのだ。

女人だと思つていて、お兄ちゃんも遠慮して頻繁に入り出していた家には来ない。

その替わり私がお兄ちゃんの家に一週間に一回のペースで顔見せに行つている。

香澄義理姉ちゃんの説得がなければ週一だつたんだよね……

「たしかこの後、お友達が迎えに来てくれるんだつたわよね？」

「うん。バイクで乗せて行つてくれるって」

携帯を取り出し、時刻を確認すると九時半になつとしていた。

ここから待ち合わせ場所の臨海公園までは車で十五分だから間に合う。

「来たら姉さんが知らせに来てくれるから、お茶でも　つて来た  
ようね」

ノックの音が聞こえた後、ドアが開けられ董さんと田下部君が入つて來た。

「あら、可愛い~」

そう言つたベリーショートの女性は董さん。

香澄義理姉ちゃんのお姉さんで、この店長さんだ。

「すいぶんめかしこんだな」

「気合い入り過ぎに見えるかな……？」

「いや。いいんじやねえか。しかし、女は化粧すると印象変わるな  
たぶんそれは、義理姉ちゃんにしてもらつたからだと思つ。」

私がすると化粧しているのかわからなくなるもん。

「じゃあ、そろそろ行くか……と言いたいところだが、あの~俺になんかついてます?」

田下部君が怪訝そうな顔で見つめた先を見ると、義理姉ちゃんが顎に手をあててじーっと田下部君の顔を見ている。

一体どうしたんだろ?!

「あ、ごめんね。ちょっと気になつた事があつて。ねえ、どうかで会つたことない?」

「ないと思いますけど」

「いや、あると思つんだけど……」

そう言つて義理姉ちゃんはまた考えこんでしまつた。

前にお客さんとして來たとかかな。

そんな事をぼんやり思つていたけど、まさかその事に私が関係していたなんてこの時は微塵も思わなかつた。

## 第一話 なんでここに？

臨海公園は土曜ともあって家族連れやカップルで賑わっていた。

私と海が待ち合わせたのは、公園内の大時計広場前。

ここなら目立つし、水族館まで徒歩五分圏内だから場所的にもちょうどいい。

こういう時って、あの人達が居なくなるまで待った方がいいの？それとも待たせてるから行つた方がいいの？

私は頭を抱え、一刻と近づいている約束の時間に追われていた。さつき時計みたら十分前だつたよね。もう海来ているし……

日下部君が見たら、きっと早く行けって怒鳴るよね。

溜息を吐きだすと、時計台の下にいる男の人とその前に立つ一人の女人人に目を向けた。

それは海と、海に声をかけていると思われるお姉さん二人組。

二人とも雑誌から抜け出た人のように綺麗でおしゃれだ。

私は今あのお姉さん達が居なくなつてから行くか、それとも今行かで迷つていたのだ。

……やっぱ行こう。それに待たせるのは悪いもん！！

ざつと見れる範囲で自分の格好を見て確認する。

よし、ゴミとかもついてないし汚れもないし大丈夫。

やつと決心して足を踏み出したんだけど、肩を叩かれ止められてしまつた。

誰？

中途半端に踏み出した足を止め振り返ると、見知った男の人が立っていた。

上は英字がプリントされたTシャツに水色のストライプの半袖シャツを羽織っていて、下は薄い茶色のパンツを履いている。

「千里ちゃん！？」

私の驚きを余所に千里ちゃんは穏やかな笑みを浮かべている。  
えつ、なんでここにいるの？

「おはよう」「わーさま。桜音さん」

「お、おはよー！」

「今日、髪巻いてるんですね。マイクもされてなんだかいつもと雰囲気違いますね」

千里ちゃんはそう言いつて、ゆるやかに巻かれた髪を指に絡ませる。

「……うん。ちょっとやってもらつたの」

「その服も桜音さんに似合つてて、可愛らしくですよ」

「ほんと？良かった」

私の今日の格好は、白の胸下切り替えのキャミロンピに肩からカゴバックを下げている。

そして足元はリボンモチーフのメタリックゴールドのウエッジソールミコールといった感じだ。

白い服つて汚れが目立つからあんま着ないんだけど、これは裾の所がフリルになつていてるし、

左胸の所には花を模したロサージュが付いているのが気に入つたんだよね。

海も可愛いって思つてくれるといな……ってそんな場合じゃない

！！

千里ちゃんをなんとかしなきや。じゃないと海の所に行けない。

「千里ちゃんも」うちに用事があったの？」

「ええ」

「そつか

どうしよう。海にメールして待ち合わせ場所変更してもうった方がいいのかな？

そんな事を考えていると、頬に自分じゃない人の体温を感じた。

は？

メールを打つ為に開いた携帯から目を離し、千里ちゃんの方を見る。すると、浮かべていた穏やかな微笑みが消え真面目な顔になつていた。

えっ、何？どうしたの？

「実は僕、告白しに来たんです」

「告白？」

「はい」

「千里ちゃん好きな人居たの？」

「居ますよ」

誰なんだろう。みく知つてんのかな……

考へても全然見当がつかないや。

うちのクラス？それとも他のクラス？

「桜音さんは相変わらず顔に出やすいですね」

思案してたのがバレたのか、千里ちゃんがクスクスと笑いだしている。

自分でわからんけど、よく言われるんだよね。

だからあんま嘘つけないからポーカーフェイスの人羨ましい。

「その上、鈍い」

「あ～、それも言われるんだよね」

「でしょうね。でも正直、最初はそれで助かってました。気づかれなければ気まずくなりませんから。

けど、そう呑気にしてられなくなってしまったんですね」

なんかこの流れって……  
いや待つて。そう考えるのはただの自意識過剰なだけかもしれない。

だって、千里ちゃんは校内でも海と人気を二分するような人だよ？まさか、そんなわけない。

「本当に顔に出やすい人ですね。そのまさかですよ　僕の好きな人は桜音さんです」

## 第三話 もしかして押しに弱い？

「…………わたし…………？」

頭と口が上手く働かない。

生まれて初めてされた告白はものすごく複雑なものだった。

だって相手は友達の　みくの好きな人。

「信じられませんか？」

信じるも何も状況にまったくついていけでない。

だって千里ちゃんなら相手に困らないし、もっと可愛い子とかいる  
し……

「…………なら信じてもうえるような事をしまじょうが？」

「え？」

疑問に思っている間もなく、顎に手をかけられ視線が芝生から無理  
やり千里ちゃんに切り替えられる。

触れられている手が細く骨ばっていて、男の人なんだと改めて認識  
させられてしまった。

「僕は好きな人にしかキスしないって、この間言いましたよね？」

「あ…………」

数日前の出来事が頭の中に浮かぶ。

「あの時、慰めて貰つていいだけって言われてショックだったんですけど  
すよ。

あれならいくらなんでも気づいてもらえたって思つたんですけど…  
…本当に鈍すぎますよね」

「そうだよね…………いくらなんでも慰めるのにああいう事しないよね。  
でもだってさ、まさか千里ちゃんが私の事好きだなんて思いもしな

いよ。

それにして気づくの遅いつていうか、鈍すぎるこもほどがあるよ、  
私。

「……ごめんなさい」

「いいですよ。気づかれるとなつかいな事もあるので  
やつかいな事つて何があるの？」

ああ、頭痛くなってきた。

たぶん他の人なら気づく事なのに、なんで私つてこいつなんだら？……  
軽く自己嫌悪におちこりしている間にも時は一刻と過ぎていく。

つてちょっと待つて！－このパターンつて……  
千里ちゃんの顔がだんだんアップになってきて、やつと今自分が置  
かれている状況がわかった。

今度は頬とかじやなくて、まさか唇！？

『ファーストキスが事故チュー』で今度はこれ！？

そんなの嫌だ。今度はちゃんと好きな人と

「海つ！」

無意識だった。

気がついたら心の中に浮かんでいた人の名前を叫んでしまっていた。  
それも自分でもよく出たなと思うぐらい大きい声で。  
海がいるのは私達から少し離れた所だし、いつも側は死角になつて  
いて見えないので声が聞こえたとしても間に合わない。

「……ん」

すぐ目の前にはアップの千里ちゃんがいるけど、まだ唇には触れて  
いない。

でもたしかに唇は塞がれてしまつていてる。

でもそれは千里ちゃんの唇によつてじゃなく、もっと大きい何かによつて。

## 第四話 お姫様、間に挟まれ頭を悩ます

あれ？

唇を塞いでいるものをなぞるよつこにしてさわり、何か確かめてみた。  
もしかしてこれって掌……？

そんな事を考へると触っていたものが外れ、唇が外気にさらされる。

「お前、桜音に何をしようとしてるんだ！？」

頭より高い位置で、荒い呼吸と低い怒氣を含んだ声が聞こえた。

「」の声、海だ。  
でもどうして「」つたりに？

「ほんの冗談ですよ。こんなに人が多い場所でするわけないじゃないですか。

するなら人気のない場所……特に貴方の居ない場所でします」

千里ちゃんは私の肩越しにいる人を見てそう告げた。  
その表情は千里ちゃんにしては珍しく無表情。

「え、ちょっと、人が居なくともしちゃダメだよ……」

「ダメですか？」

「ダメ！……」

本当に駄目ですか？と言いながら首を傾げる千里ちゃんを思わず可愛いいって思つたけど、それとこれとは別で絶対にダメだもん。

「どうしてもですか？」

いや、あのその……何回言つても駄目なものは駄目だと思つんですけど……

「そんなふざけた真似許すはずないだろ」「

どう言つたらわかつてもらえるのかわからず口を噤んでいると、変わりに海がものすごく低い声で答えた。

その声に思わず私は震えたんだけど、千里ちゃんはなんともないようだ。

「桜音さんの許可でなく、貴方の許可を得なければならぬ理由が何處にありますか？」

な、なんなのこの空氣。なんか一触即発の雰囲気のような……  
私を挟んで二人の間にかもし出されていいる空氣が明らかに悪い。  
この状況をなんとか出来る人がいたら、今すぐ助けてほしい。  
そう願つても運よくそんな人が通りかかるないので、自分でなんとかするしかなかつた。

「か、海。もう水族館行こうよ……ほら、見る時間なくなっちゃう  
し。ねつ？」

とりあえず、これ以上悪化しないうちに一人を引き離すしかない……  
そう思つて後ろを振りかえり、海にそう言つたんだけどすぐに後悔してしまつた。

うう……眉間に皺とかよせてるし……

後ろに居た袖と襟に赤いラインが入つている黒のポロシャツに細めのネクタイ、ダメージ加工が施されているデニムを履いている男

海は不機嫌オーラ全開で千里ちゃんから視線を外さない。

「……。」

無言はやめて。

私の話に海は耳を傾けず、ひたすら千里ちゃんとにらみ合つて泣きたい気持ちを抑え、名前を呼びながら軽く揺らしてこっちに注意を向けさせようとしたけどそれも無意味だった。

「そもそもなんでお前はここにいるんだよ?」

「え? 桜音さんに聞いたからですよ」

「ちよつ、なんでそんなこと言うの!? 私、言ひてないよーー!」

海の視線が突き刺さる中、首をぶんぶん横に振つて否定した。

「嘘に決まつてゐじゃないですか。僕の桜音さんをそんなに怒らな  
いでください」

「はつ? お前今、誰のつて書つた?」

「ひひり笑う千里ちゃんとは反対に、海はキレかけてこむのかます  
ます田が鋭くなつてこる。

もうやだ……今日の一人いつもと違いますわね……

「そんな恐い顔しなくとも、もう用事も済んだので帰りますよ」

「なら、もういいだる。行くぞ、桜音」

おわつ。

手首を掴まれ引きずられたまま、手を振る千里ちゃんに見送られながら私と海は水族館へと向かった。  
なんか今日一田長へなりそつ……

前回言つていたお礼小説の前編です。

- \*二人はもうすでに付き合つている設定です。
- \*ネタばれになるかもしれません、この一人本編では今のところ、クリスマスと一緒に過ごせない（予定）かもしれないのにパラレルと考えて下さい。

もう寝ているよな。

さつき部屋を出る時に時計を確認したときは、午前三時を少し過ぎていた。

この時間なら確實に寝ているだろう。

手に持つ紙袋を手に、隣の部屋のドアノブに手をかける。付き合う前は言われる通りちゃんと鍵をかけたあつた部屋も、今はすっかり無防備になっているのですんなり入る事が出来た。

物音をたてないように静かに壁際のベットまで進む。

幸いな事にカーテンからもれる月明かりによつて、視界は悪くない。覗き込んで見ると、俺が部屋に侵入しているにもかづかず桜音はすやすやと寝ていた。

それを確認すると、手にしていたものをそつと枕もとに置く。

「メリークリスマス、桜音」

起こしてしまわないように小さい声で呟くと、片手をベットにつき屈むような態勢をとつた。

そして可愛い彼女の額にかかる柔らかい髪を手で優しく払うと、やここで顔をおす。

やつと念願叶い、カレカノとして桜音と初めて迎えるクリスマス。驚かせたくてこいつして夜中に部屋に忍び込み、サンタのまねことをしている。

桜音と出会う前の自分なら考えられない行動だ。誰かの為に何かをするなんて。

あつと驚くだらうな、桜音。

朝起きた時の反応を想像してしまい、顔が綻ぶのが自分でもわかる。だがそれも、桜音の寝言で一気に崩れ落ちた。

「……つよつ……ちゅー……の」  
俺の名前じやなくて、他の男の名前 その上キスだと…?  
一瞬で頭に血が昇る。  
たとえ夢の中でも許せない。

「起きる…桜音…！」

急いで揺すって現実の世界へと呼び戻す。

「……ちゅー……だめ……い」

「桜音…！」

一刻も早く夢の中から起こすため、わきよつ強く揺する。  
そのかいあつてか、桜音がゆっくつと皿をあけ寝ぼけ眼でじつりを見た。

「……かい？」

桜音がおぼろげながら俺を認識したので、無理やり唇を塞ぐ。  
夢の中だとしても、桜音が他の男とキスするなんて「冗談じやない。

Special Thanks 小説 後編（前書き）

後編は少し長めです（ーーーーー）

\* ネタばれになるかもしれません、この二人本編では今のところ、クリスマスと一緒に過ごせない（予定）かもしれないのにパラレルと考えて下さい。

さつきまで用明かりだけが頼りだつたが、今は室内を人口の光りが包んでくれている。

俺と桜音は対面するよつにして、ベットの上に座つていた。

「海の馬鹿っ！－あ、あんなキスするなんて！－」

桜音は顔を真っ赤にしながら半泣きでこつちを睨んでいる。正直怖くない。むしろ可愛いらしく。

「悪かった」

その可愛さに思わず抱きしめたい衝動をなんとか抑え、謝罪の言葉を述べた。

俺は夢の中で涼と桜音がキスしていたと思つたのだが、びつやらいそれは違つたらしい。

あの後桜音を問いただして夢の内容を聞き出すと、俺の勘違いだつた。

『涼がいるから、ひゅーはダメなの。だからダメだつてば、海』

これが正しい桜音の寝言。

どうやら桜音の中の俺は、涼の前で桜音に迫つていたようだ。

「本当にじめん。寝言だから所々しか聞き取れなかつたんだ」

「やきもちやあ」

やきもちなら可愛いのが、俺のは醜い嫉妬だ。

桜音の事になると冷静じゃいられなくなつてしまつ。

桜音が夢の内容を覚えてたから良かつたものを、覚えてなかつた何してたんだろ……

「でも、どうして私の部屋にいるの？」

「ああ、あれだ」

枕もとに置いてある紙袋に視線を向けると、桜音がそれを取った。

「もしかしてこれって」

「ああ。クリスマスプレゼント」

「開けていい？」

俺が頷いたのを確認すると、紙袋から箱を取り出しそれを開ける。すると、中からハート型のジュエリー・ボックスが出てきた。ジュエリー・ボックスの中には、ハートモチーフのネックレスとブレスレットが入っている。

「どうしてわかったの！？」

クリスマス限定ジュエリーセット。

桜音の欲しいものなら、リサーチ済みだ。

「気にいってくれたか？」

「うん！…ありがとう」

大事そうにボックスを眺める桜音を見て、ほっと胸をなでおろす。良かつた……バイトしたかいがあつた。

今回情報源は佐々木でいろいろ面倒だったが、桜音の喜ぶ顔によつて苦労が報われた。

「でもどうしよう……私、まだ心の準備が出来てない……」

桜音の顔が曇ってきた。一体心の準備って何を言つてるんだ？

「でも遅かれ早かれだし……」

桜音は何かブツブツ言つと、クローゼットを開け何か取り出すとこつちに戻ってきた。

手にはツリー・トナカイが描かれているクリスマス仕様の紙袋をもつていてる。

「はい。メリークリスマス」

「ありがとう」

差し出されたものを受けとり、桜音を抱きしめ場所を変えながらキスをおとす。

「もう一つ、海！」

桜音に貰えるものはなんでも嬉しい。たとえ貰えなくとも一緒にいてくれるだけでいい。

「あのね……プレゼントっていうか、もう一つあるの」

まだキスし足りないのに、桜音に唇を手で塞がれてしまった。

「少し皿を瞑つて。いひつて言つまでも絶対開けちゃダメだからねー！」

「わかった

だが俺は、この数秒後に起る出来事によつてこの約束を破つてしまふ。

両頬に桜音の手の存在を感じると、唇になにか柔らかいものが触れた。

もしかして今のは

「……好き」

これはクリスマスの奇跡か？

桜音が好きって言つてくれたついでに、初めてキスしてくれたなんて

！？

「桜音、こつち見て」

顔を見られたくないのか、桜音は俺の胸に顔をうづめるよつとして隠している。

顔、この上なく赤いんだろうな。耳まで真っ赤だし。

抱きしめると、桜音も手をまわして抱きしめ返してくれた。

相変わらず顔は見せてくれないが。

幸せすぎる 一年前はこんな事考えられなかつたのに。

「クリスマス、一緒に楽しもうな」

「……うん」

俺達の初めてのクリスマスは、始まつたばかりだ。

Special Thanks 小説 後編（後書き）

## 第五話 ペンギンのおかげ

「ここに来れば少しば機嫌良くなるんじゃないかなって思ったの……」

透明なガラス越しにラッコが優雅にイカを食べながら泳いでいる。いつもなら可愛い〜〜〜って言つて水槽に張り付くようにして見ているはずなんだけど、今日はさすがに出来ない。

だって海の機嫌が治らないんだもん。

ちらりと左隣にいる海を見ると、腕を組みながら難しい顔をしてそれを見ている。

臨海公園で千里ちゃんと別れてから、ずっと海の機嫌が悪いままなのだ。

お互に何にも言わないから会話ゼロだし。どうしよう……

この状態で今日一日は気まずいし絶対に嫌だ。  
やっぱ何か話しかけた方がいいよね。でもなんてしゃべりかければいいんだろう……？

あれこれ策を考えながらラッコの水槽を離れた先に進んだ。

なんなのこの愛らしさ。

海との微妙な空気をなんとかする案を考えなきゃならなかつたんだけど、今はそれどころじゃない。  
だって、これやっぱすぎるよ〜〜

田の前にはプールがあつて、その奥には岩場がある。

私はひたすらそこにある灰色と白の羽を纏っている小さい生き物を見ていた。

これならたぶん一日見ても絶対飽きない自信がある。

そのぐらい私はすっかり魅了されてしまっていた。

だらしないぐらうこ、もうすっかり骨抜き状態。

もつ可愛こすがるーー・ペンギンの赤ちゃん。

親ペングインの傍にぴたりくっついてペンギンの赤ちゃんがいる。  
えっと……ジョンツーペンギンっていふんだ～。

ヒナはこっちに興味がないのか、全然こっちを見てくれない。  
うう……じつち見て欲しいの。でもいいや、可愛いから。

あ。

それはほんの一瞬の出来事。

ヒナが口を開けて欠伸したのだ。

「ねえ海、見た？見た？可愛いすぎるのーー！」

隣にいる海の腕にしがみつくと、それを興奮気味にしゃべる。  
すると海は左手を口にあてて顔を赤くした。

「 」

あつ、海もヒナの愛らしさにせられちゃったんだ。

なんか動物の赤ちゃんって保護欲かき立てられるもんね。

「……ああ。可愛いな。今すぐ抱きしめて俺以外見せたくない」  
うんうんわかる。

だってふわふわの体抱きしめたいし、あのつぶらな瞳に映るの自分  
だけにしたいもんね。

「ほんと些細な動作一つで心乱されちゃうよね」

「本当に。本人はそんな事気づいていないだろ？けど」

……ん？本人？

ペンギンって人じゃないと思うけど、まあいいか。  
海は微笑みながら私の頬を撫でこっちを見ている。

つてあれ！？海の機嫌なおつてる！！

よかつた～。もしかしてペンギンの赤ちゃんのおかげかな？

## 第五話 ペンギンのぬかサ（後編）

あけましておめでとひいにゃこまわへ（――）  
今年も合鍵をよろしくお願ひしまわ――！――

## 間章 彼女の好きな人（上）

見ていた雑誌を芝生に置くと、寝転びながら携帯を取り出す。

そしてそれを弄り、画面に映し出された画像を見て顔の筋肉を緩めた。

これはこの間水族館に行つたときに撮つたもので、俺と桜音そして、その間にペンギンのキグランミが映し出されている「写メ」だ。

……やっぱ、桜音可愛いな～。

この時はいつもと違つて髪を巻いてたし、メイクもしていて少し大人っぽく、いつもとは少し違つていて新鮮だったんだよな。そのうえ大好きな水族館で興奮したのか、抱きついてきたりスキンシップが多くてやばかった。

まあ、それも桜音が我に返るまでの間だけだったが。

「もしかして、桜音さんの画像でも見ているんですか？」  
この声は……

「あなたにそう言つ顔させるのは、桜音さんしかいませんから」「さつきまで空と雲しか映し出されていなかつた携帯のバックには、女いや、中世的な顔立ちをした男がいた。色素の薄い髪が僅かに吹く風で揺れている。

藤原千里。

こいつが俺の所に来るつて事は、どうせろくな事ではないだろう。前回は桜音にちよつかいをかけて、その事をわざわざ報告に来た。今度は一体なんだよ。

「そんな怖い顔しないでください。こつ見ても傷心中の身なんですか？」

「傷心中？」

まさか、こいつ

携帯をたたみ上半身を起こす。

「ええ。この前桜音さんに振られました」

「……そうか」

「つまらないですね。もう少し違う反応を期待したんですけど」  
何も言えるはずがないだろ。

これが『告白成功しました』なら話は別だが。

「……それで本題はなんだ。まさか、慰めて欲しくて来たわけじゃないだろ？」

「気持ち悪い事を言わないでください。どうして僕があなたに慰められなければならないんですか」

「だつたらなんだ。宣戦布告か?とにかく用があるなり早く話せ。悪いが、これから部活なんだ」

「こいつの事だ。きっと他に何かあるはずだろ?」

俺の所に来た理由が

「宣戦布告なんて今さらじゃありませんか?」

「じゃあ、なんだよ」

藤原は、ほんの少し口角をあげると口を開いた。

「ほんの少しだけ意地悪をしに來たんです」

意地悪ってなんだよ。下らない。

てつくり、また桜音になにかしたんじゃないかと思つたじやないか。  
俺は立ち上がると、あいつの横をすり抜けようとした。

その時だった。あいつが囁くように俺の時間と思考を止める宣戦布告を  
したのは

「あっ、そうそう。知っています? 桜音さん、好きな人がいるそ



## 間章 彼女の好きな人（上）（後書き）

かなり久々の合鍵です。

待つていて下さった方いましたら、すみませんでした>（ーー）<  
ブログの方にも書いてましたが、資格検定があつたので、時間がな  
かなかとれなかつたんです…（ーー）  
でわ、ここまで読んで下さってありがとうございました。

## 彼女の好きな人（中）

桜音の好きな奴に一人だけ心当たりがある。桜音を好きになつてから、俺はそいつの事が羨ましくて妬ましくてしうがなかつた。

誰よりも桜音の近くにいるあいつの事が

ガラス越しに中庭を覗くと、数人の生徒が弁当を食べたり昼寝をしたりと、思い思に昼休みを過ごしていた。

その風景の中で俺はただ一点だけを見ている。

「何見てんだ？」

「……別に」

日下部が紙パックの飲み物を飲みながら、俺の隣に立ち中庭を覗きこむ。

「ああ、あれか」

すぐにわかつたらしく日下部の視線の先には、俺がさつきまで見ていたものが映し出されていた。

そこには、一組の男女。

女が男に膝枕をして貰いながら眠つていて、時折男が女の頭を撫でている。

「あ～っ！～逢月さん、水谷君に膝枕してもらつてる～～！」

「え？どこ？どこ？」

「ほら、あの一番大きい桜の木の下」

廊下を歩いていた二人の女子生徒達が足を止め、俺達と同じように窓際に近づくと中庭を眺めた。

「えつと……あ、いたいた。ほんとだ。いいよね、ああいう彼氏」

「うん。私もああいう彼氏が欲しい！…」

「……あんた彼氏いるでしょ」

「それがさ、聞いてよ。アイツさ　」

桜音と涼はお互いを大事に思いあつていてると思つ。  
そう感じるのは、俺だけじゃなく周りの奴らもそう思つていなはずだ。

周りから一人は付き合つてることと思われるぐらいだから。

「もしかしてお前の様子が最近変なのはあいつらが原因か？」

「俺はいつもと変わらない」

「うそつけ。周りにバレてるぐらいおかしいぞ。だから、逢月も心配してあんなつてんじやねえか」

「なんだよ、それ」

「お前の様子が心配でんま寝てねえんだ。だから、水谷が無理矢理でも眠らせようとしてああしてるわけ。

あいつ田の下のクマ酷かったからよ」

桜音が俺の事を心配してくれていてるのはわかつていた。

時折何か言いたそうに見ていたし、大丈夫？などと気遣いの声をかけてくれていたから。

でもまさか、眠れなくなるまで心配してくれていたとは。不謹慎ながら、少し嬉しかった。

「んで、結局何だよ。お前が落ち込む原因つて。まさか、今さらながらあいつらの仲の良さとかじやねえだろうな」

「違う。どうやら、桜音には好きな奴がいるらしいんだ俺がそう切り出すると、田下部は大きく溜息を吐きだした。

「何、まさかそれが水谷だつていいわけ？あるわけねえじゃん」

「あるわけないって、なんでお前にそんな事がわかるんだよ！…！」

日下部のぐだらないとばかりの言い放った言葉が感に障り、自然と口調が荒くなる。

「知ってるからに決まってるだろ。いつなつて言われてるから言わねえけど」

「はあ！？なんだよ、それ。言えよ…」

「大丈夫だつて。おまえの悪いようにはなんねえから、なんでこいつが桜音の好きな奴を知つているんだ！？一つの間にそんな間柄になつてんだよ。絶対何が何でもはかせてやる。

結局あれから日下部は口を割らなかつた。  
ただ、ヒントだけは教えてくれた。

『あいつの携帯の待ち受け。それみれば一発でわかるぜ』

どうやってみるつていうんだよ。

大体見せてくれつて言つても、好きなやつが待ち受けなら桜音のことだから見せてくれるはずがないだろうが！  
もっとマシなヒントを教えてくれればいいものを。  
もう、いつその事桜音に聞くか。

つて、聞ければ俺はこんなに悩んでないよな……

「ただいま」

重い気持ちを引きずりながら玄関の扉を開けると、

「おかえりなさい」

といつ声と共に足に何かが抱きついてきた。

「なつ　　」

咄嗟にそれを見ると、幼稚園生か小学校低学年ぐらいの小さい男の子だった。

誰だこの子……桜音の親戚だろうか。

その子は愛らしい笑顔をこちらに向けると俺の脚から手を放す。そして、両手を広げると抱っこをせがんできたので抱き上げた。しかしづいぶん人懐っこい子だな。

この時の俺は、まさかこの子が俺の悩みを解決してくれるなんて思いもしなかった。

## 彼女の好きな人（下）

「はい、あ～ん」

桜音がカップからオレンジ色のアイスをすくつと、スプーンをこち  
らに差し向けてくる。

でもそれを頬張ったのは俺じゃなくて、俺の膝の上に座っている男  
の子だった。

「……うまそうだな。蓮都」

「うん。うまいっ！！」

だろうな。桜音に食べさせて貰つてているんだから。  
ああ、俺も食べたい。

俺を玄関で出迎えてくれたこの子は、逢月蓮都。

桜音の兄さんの子供 つまり、桜音の甥っ子だそうだ。  
来年から小学校にあがるつて桜音が言つていたから、五・六才ぐら  
いだろう。

ご両親が結婚記念日らしく、今晚預かることになつたそうだ。

「海にい、海にい」

蓮都の方を見ると俺の口元にアイスの乗つたスプーンを差し出して  
くれていた。

それを口に入れると、冷たさと共にチョコレートの甘さが口の中に  
広がっていく。

「おいしい？」

「ああ。おいしいよ。ありがとう、蓮都」

頭を撫でてやると、蓮都は太陽みたいな笑顔を見せた。

可愛いな。

蓮都は人々見知りしない性格らしく、初対面の俺にもすぐに懐い

てくれた。

もし仮に俺にも弟ができたら、こんな感じになるんだろうか。  
まあ、それはあの二人次第だな。

「ん？ 蓮都どうした？」

蓮都がテーブルに向かつて手を伸ばして何かを取ろうとしている。  
ああ、携帯か。

蓮都の手の先には、テーブルの上に乗った俺の黒い携帯が置いてあ  
つた。

「蓮都ダメ。 それ、海のだから」

「写真撮りたい」

「それなら、私の貸すから。 ね？」

「いいよ、俺の携帯使つても」

「でもほら、壊しちゃうとあれだし……」

桜音はそう言つて、蓮都に携帯を渡した。

だが、蓮都は写メを撮ること無く画面を見たまま動かない。

「どうしたの？ 蓮都。 もしかして使い方わかんない？」

あのね、カメラのイラストあるでしょ、それを押すだけ

つて聞  
いてる？」

蓮都は変わらず画面を見たまま動かない。

さすがに変に思ったのか携帯の画面を桜音も覗くと、顔を赤くして  
すぐさま携帯を蓮都から奪い取るようにして取り上げてしまった。

なんだ？

「忘れてた……」

桜音は半泣きになりながら、携帯を握りしめている。

「蓮都、明日恐竜展連れていくてあげるーー！」

「ほんとかー？」

「うん。お菓子も買ってあげる。だから……」

桜音は小さい声で蓮都に何かを言つと、蓮都が笑顔で首を縦にふつてゐる。

一体、なんだつたんだ?

「蓮都、約束出来る?」

「うん。俺、いわないよ。桜音の携帯が海にいだつて」

「蓮都!!」

桜音が蓮都の口を塞いだ時にはもう遅く、俺はそれを聞いてしまつていた。

桜音と田が合ひつと、蓮都の口を塞いでいた桜音の手が力無く下がつていいく。

「携帯が俺つて蓮都。それどういうことだ?」

「あのね、桜音の携帯開いたら、海にいが眠つてたの」

それつて、待ち受けが俺の寝顔つていう事か?

『あいつの携帯の待ち受け。それみれば一発でわかるぜ』

桜音の好きな奴は俺?



## 最終章 第一話 莉緒

なんでいつなつたの？

っこちつきまで四人で仲良くおしゃべりしてたじちゃん。リビングの中には外から聞こえるセミの鳴き声と、私と涼の二人分の溜息だけが聞こえた。

私の頭を悩ますその原因は、テーブルを挟んで向かえ側に座っている小学生ぐらいの女の子。

彼女はひたすら私の隣に座っている海を睨んでいる。

一方睨まれている海は、別にそんな事など気にする事なく珈琲を飲んでいた。

「莉緒、止めなさい」

涼に注意された莉緒と呼ばれた女の子は、海から視線を外すことなく無視という形でそれを拒絶する。

彼女は、涼の妹の『水谷莉緒』ちゃん。

莉緒ちゃんは、近くの小学校に通っている六年生。

私たちはこれから、莉緒ちゃんの大好きな『聖』に会いに行く事になつてているのだ。

そのため、今日の莉緒ちゃんの格好は実に可愛いらしい。

肩につくつかないかの長さの髪には極細のカチューシャ、服は水色のワンピースに白のボレロを羽織っている。

普段の莉緒ちゃんは動きやすい格好なんだけど、やっぱ好きな芸能人に会えるからか、かなり気合いが入つていてるみたい。

聖っていうのは、今女の子に大人気のモデルさん。

その活動の幅は広く、雑誌だけじゃなくドラマやCMなどいろいろだ。

莉緒ちゃんが聖のファンだといつ事と、莉緒ちゃんの誕生日が近い事を海に話したら、

なんと海が聖と知り合いらしく会わせてくれる事になつたんだけど

……

四人で迎えの車が来てくれるのをお茶しながら待つていたんだけど、急に莉緒ちゃんが今みたいになつてしまつたのだ。

早く迎えの車が来て聖に会えば、莉緒ちゃんのこの状態も治るかな。でもどうして急に海の事覗みはじめちゃつたんだろ？

「……桜お姉ちゃん」

「ん？」

「お兄ちゃんの事好き？」

「はあ？」

莉緒ちゃんはやつと海から視線を外すと、急にそんな質問をしてきた。

その突然の突拍子もない質問に間抜けな声が出てしまつ。この質問と海を睨んでいるの何か関係があるのかな？

よくわかんないけど、涼の事は好きだし『大好きだよ』って答えておひげ。

「だ……」

『だ』までは出たけど、それからの台詞が出せない。なぜなら大きな手が私の口を塞いでいたからだ。

「ん~！~！」

「悪いが、俺以外に言つその言葉なんか聞きたくない

海の手を引き剥がそつと、海の腕を両手で掴みながら海を見る。すると眉間に皺をよせ、不機嫌オーラを纏つた海が今度は涼を睨んでいた。

それを涼は苦笑いで受けている。

なんで！？

「やつぱり！！あんた桜お姉ちゃんの事。。。冗談じゃない。絶対に一人の邪魔なんかさせないんだから！！」

「莉緒、俺たちの事は放つておいてくれ」

「放つておけるわけないでしょ！！だいたいなんでそんなに冷静なのよ。桜お姉ちゃんと離れちやうかもしれないんだよ！！いいの！？」

莉緒ちゃんは涼の両腕を掴んで強く揺すっている。

涼はそれに何かを言おうとしたのか、唇をわずかに動かせたけど言葉を発する事はなかった。

## 第一話 秘恋（前書き）

今回長めです (+ + - +)  
途中でわけよつと思つたんですけど、どうからわけていいかわからなかつたので…

## 第一話 秘恋

あの空氣のまま聖の所に行くと思つてたんだけど、それは私の危惧に終わった。

それは、たぶん迎えに来てくれたこの車のおかげだと思ひ。

私達が乗っているのは、なんとりムジン。

この車は海の家の車で、運転しているのは在原家の専属の運転手さん。

やつぱり最初はやつなるよね……

涼の隣に座っている莉緒ちゃんを見ると、ただ茫然とどこかを見て座っている。

私も最初乗せて貰った時は、莉緒ちゃんと同じような反応だった。だってドラマとかでしか見れないし、普段乗らないもん。

「すごいな。俺初めて乗ったよ」

一方涼は、そう言いながら観察するように広い車内をゆっくり見回していた。

気になるものがあったのか、涼は皿を輝かせながら海を呼び、一点を指している。

あつ、もしかしてテレビ？

涼が見ていた所には、埋め込み式のテレビがあった。

「なあ、これつけてもいいか？」

「ああ」

海の返事を聞くと涼は、スイッチに手を伸ばしそれを押す。すると画面には、イスに座っている学ランを着た男の人とスース姿の女人人が映し出された。

男の人は全体的に髪の毛や瞳の色など色素が薄く、耳が隠れるぐらいで長い髪は所々無造作に外ハネにしている。

「あつ、莉緒ちゃん。ちょうど聖が出ているよ」「えつ！？」

弾かれたように莉緒ちゃんは、画面に映る聖を見つめた。  
聖つてぱつと見るとハーフ？って思っちゃうんだよね。  
田鼻立ちがはつきりしているためか、よく勘違いされるってテレビで言つていたつけ。

「しかし、大人つて感じがするよな。とても同じ年には思え」「お兄ちゃん、ちょっと黙つて。聖の声が聞こえないじゃん」  
り、莉緒ちゃん……

莉緒ちゃんは涼の話を遮ると、テレビを食い入るように見つめながら、聖が話す言葉を聞き漏らさないように集中して聞いている。

『新曲一位おめでとう』『ありがとうございます』

『今回発売された新曲のタイトル「秘恋」は、心に秘めた恋つてい  
う意味だそうですね』  
『はい。そのままで』

聖はスースイ姿の女性アナウンサーに対し、苦笑いで答えた。  
『主人公の男の子の心に秘めている恋　つまり片思いの歌です。  
プロモーションビデオもそれに合わせて学園ドラマっぽくしました』  
あ～、これつてこの間発売した新曲のインタビューなんだ～。  
だから学ランか。

聖はプロモで学ラン姿で歌つているのだ。

私もそのプロモ見たけど、主人公の男の子に感情移入しちゃった。  
プロモは主人公の男の子の片思い目線で進んでいくんだけど、その

片思い中の出来事が共感できるし、聖の歌声が切なくて……

「プロモってどんな内容なんだ?」

「えつ? 在原さん見たことないのー?」

「俺もない」

「信じられない。お兄ちゃんまで……」

莉緒ちゃんは仕方ないなーと言いつと、口を開いた。

「内容的には少女漫画的かな。簡単に言つと学校の王子様的な人がいて、その男の子には好きな女の子がいるんだけど、その女の子とはクラスが違うからなのか、口も聞いたことがないし、面識もないの。」

しかも女の子には周りに彼氏と思われるぐらい仲の良い男の友達がいて、主人公の男の子はいつもそれをただ羨ましく見てるしかできないって話」

主人公の男の子はなんとかその好きな女の子と共に通点を持つけどするんだけど、なかなかそれが見つからないんだよね。も~、じれつたいのなんのそのつて!—思わずプロモ見ながら、気づいてあげて!—つて叫んじやった。

「しかもね、その彼氏と間違われる男友達が主人公の男の子の友達で部活も一緒なの。  
だから部活の差し入れとかもその子が貰つてるの見て凹んだり、雨が降つた時に傘を

莉緒ちゃんの話はそれ以上は続く事はなかつた。  
それはたぶん、私の右隣にいる海のせいだと思つ。  
だって、隣だけ空気が氷点下……

「おい、海。もしかして」

涼は海の方を見ると、海は携帯を取り出し何処かへかけている所だ

つた。

相手が話しちゃうのか、それとも出られないのか、なかなか海が口を開く事はない。

その間も海はテレビから目を離すこととはしなかった。

といふか、むしろ睨んでる。

ど、どうしたの！？なんか空気が不穏に……

『青春って感じがするプロモですよね。もしかして、聖くん自身の体験ですか？』

『いえ。実はこのプロモの主人公の男の子は、僕の友人がモデルなんです。傘のシーンなど所々実話なんですよ』

## 第三話 パフュームと店員さんと

「あれは一体どういうつもりなんだ!! ..... 何の事じゃないだろ  
うが!! ..... ああ、貰った。

まだ見てなかつたんだよ。はつー? 薄情者だつて? なんでそうなる  
んだ!!」

隣りから聞こえてきた怒鳴り声に、たまらず耳を塞ぐ。

海はやつと繋がつた携帯で話をしているみたいなんだけど、かなり  
機嫌が悪い。

眉間に皺をよせながら、受話器越しに相手に文句を言つてゐる。  
絶対相手の人、携帯耳から離してると思つ。

「 ..... ああ、いる。そんなんで氣づくなら、とつて俺の気持ちの  
氣づいてくれている。 ..... いいんだ。それでも俺は。  
だから、もう余計なことするな。 は? そんなことお前に言われ  
なくてもちゃんと考へてる。 ..... こつでもいいだろ。お前には関係  
ない」

海はさつきより少し落ち着いたのか、淡々とした口調になつてゐる。  
誰と話してゐる ..... ?

そういうえば、さつき聖の映像見て電話かけ始めたつけ。

という事は、聖かな?

あれ? そういうえば聖と海つてどういう知り合いなんだつ? ..... ?

「だから、そういうのが余計なお世話だつて言つてるだろ。とにかく  
もうすぐ着くから。 ..... ああ、わかつた。じゃあな」

海は通話を終えたらじぐ、携帯を置むと空いている座席に放り投げ  
た。

そして溜息を吐いて何か少し考へた後、備え付けられているインタ  
ーフォンを押した。

「海のバカ……」

この呟きを聞く人は周りには誰もいない。

白をベースとした室内には、私だけが一人ぼつんと存在している。ここはフランツといって、最近雑誌やテレビで紹介される人気スイーツショップだ。

どの部屋も完全個室でプライバシーは守られている。

もうつ。置いていくなら、最初から連れて行かないでよ。  
別に聖のファンってわけじゃないけど、会うの楽しみにしていたのに。

私以外の他の人　　海と涼と莉緒ちゃんは私を置いてここからモデル事務所に行ってしまい、私だけこの店に取り残されてしまったのだ。

一時間ぐらいしたら戻つてくるから、好きなものなんでも頼んでて良いつて言つてたけど。

でも一体なんだろう。急に私だけ置いていくなんて。  
海に理由聞いたら、「聖のせい」ってしか言わなくてちゃんとした理由教えてくれなかつたし。

あれこれ理由を考えていると、ドアをノックする音と共に「失礼いたします」と白いシャツに黒っぽいエプロンとパンツスタイルの男の店員さんがドアを開けて入ってきた。

あれ？ 私、まだ何も頼んでいないのに。  
しかもあれって

私の目は店員さんの持っている銀色のプレートの上にのっている物  
にくぎ付けだ。

「お待たせいたしました」

店員さんの手によつて、ピンクゴールドのスプーンと共にそれがテ  
ーブルの上に置かれた。

溢れんばかりにのつた季節のフルーツに、バニラアイスとマンゴー<sup>ゼリー</sup>の二重の層。

それらが細かい細工が施されてあるガラスの器に入つている。

フランのパフェだつ！

これみくど、食べたいよね～つて言つてたんだ。でも値段が値段な  
だけにななか手が届かなくて……

だって、これ一つで3000円もするんだもん。

パフェにしては高すぎると思わない？

だって私がしているレジ打ちのバイトが時給650円だよー？  
あつ、でもこれ私頼んでない。

「あのつ、私まだ注文していないんですけど」

店員さんにこれが自分の注文品ではないことを告げると、返つてき  
た返事は想定外のものだった。

「言つことはそれだけなのかよ。どんぐさいのか？ それとも僕の事  
知らないのか？」

「は？」

いきなりそんな事を言われて、すぐさまパフェから店員の顔に視線  
を向けた。

あれ……なんかこの顔どつかで……

ずっとパフェばかり見てたから、全然店員の顔まともに見てなかつたよ……

「あ～～～っ！～！」

私の叫び声を聞くと、その人は、「やつと戻ついたか」と言つて一ブルをはさんで迎え側のイスに座つた。  
どうして！？どうして聖がいるの！？

## 第三話 パフュと店員さんと（後書き）

久々の一か月ぶりの更新です。  
もう検定試験も終わったので、更新普通に戻ります（^\_^）

「おー、おーしゃつ……

口元にあるスプーンの上には四角に切られたマンゴーとバニラアイスが乗っている。

今すぐにでもそれを食べたい……

だって、あんなに食べたかったパフェだもん。でもさすがにこれじゃあ

「ほら、あ～ん」

聖は私の口元にスプーンを差し出しながらそう言つた。  
それをさすがに食べることは出来ず、首を横に振る。  
出来るわけないよ～っ！－聖に食べさせて貰うなんて……  
だって今日が初対面なんだよ！－それに、あの聖にだよ！－  
涼とかにならなんの抵抗もなく食べさせてもらひなど、この状況は  
無理～～～。

「早く口あけなよ」

「自分で食べれるから大丈夫です」つて言おうと思つたんだけど、口あけた瞬間にスプーンを咥えさせられそうなので、ただひたすら首を横に振る。

聖に食べさせて貰うなんて出来ないし、それにあれはどうみても

ちらつと聖の左手を見ると、携帯がこちらに向かわれている。明らかに写める気だし……

一体、聖はここに向じに来たの～～～！？

「まさか、この僕に食べさせられるのが不服とでも？」

「……？」

なかなか食べないと観念し、私はおとなしく白旗を上げた。なり始めてきた。

うつ……海もだけど、整った顔立ちの人が怒るのって恐怖倍増……

その圧力に逃げられないと観念し、私はおとなしく白旗を上げた。覚悟を決めて口を開け、スプーンを口の中に招き入れると程よい甘さが口の中に広がる。

あ、おいしい。

それと同時に、カシャカシャという機械的な音が耳に届いた。やっぱ写メつたし！－

「あ、あの……」

「ああ、大丈夫。心配しなくともよく撮れているから」

「そういうことじゃなくて」

「それどうするんですか？」って聞きたいんです。

聖はこちらを見ることなく、何がおもしろいのかクスクス笑いながら携帯を操作している。

「あ、あとパフェは海が頼んでいたものだから、君の分。だからあとは自分で勝手に食べてね。

他にも食べたいものや飲みたいものがあつたら頼んだら？海のおごりなんだし」

聖はそう言ひとやつと携帯から田を離し、「溶ける前に早く食べなよ」と、私の方にパフェを移動させてくれた。

「聖は……聖さんはどうしてここに？」

「聖でいいよ。同じ年だし敬語もいらない。ここに来たのはただ、噂の桜の精を見に来ただけ」

私はそれを聞いて首を傾げた。

さくらのせいつて何？もしかして、桜音と間違えたのかな？  
聖はそんな私を見て、何かわかつたのか「……ああ」と呟いた。

「別に名前間違えとかじゃないよ。桜の精つていうのは、桜の妖精の事で君の事。海の仲間内の間では、君はそう呼ばれている。まあ、他にも桜の姫君なんても呼んでいるやつもいるみたいだけどね」

「妖精！？姫！？私が！？」

「他に誰がいるっていうの？」

なつ、なんでそんな事になつてるの～～つ！？

思わずテーブルに肘をついたまま頭を抱えてしまつた。

「しようがないよ。あの海の寵愛を受けてしまつたんだから」

「……寵愛？」

海は優しいけど、寵愛受けているのかな？実感がないから、よくわからない。

「そう、寵愛。もしくは溺愛でも可だけば。まあ、どうするの？桜の精。逃げるなら今のうひだよ」



## 第五話 一人して

あ、もう着いちゃったんだ。  
もつちよつと乗つてたかっただけどなあ……

今まで風と一緒に次々と移り変わっていく風景だったのに、今はそれがなくなり視線の先には見慣れた私の家になつている。

私はゆづくりと背中に回していた手を緩め、バイクを降りた。

「ありがとう。送つてくれて」

被つていたヘルメットを取り日下部君に渡すと、さつと手で髪をなおす。

バイクを運転してくれていたのは日下部君。  
送つてくれるつていつので、お言葉に甘えて家まで送つて貰つたのだ。

「いや。今日は悪かつたな。付き合つてもらつて」

「うん。いいよ、夏休みだから時間あるし」

私はただ今、夏休みまつただ中。なので、時間はたっぷりとある。私も時間を有意義に使おうとバイトを増やしたり、涼達と海に遊びに行つたりと楽しんでいた。

もちろん、来年受験生なので塾に行つたり学校の課題もしているけど。

「それに楽しかったもん。なんかモデルさんにもなつた気分だつたよ」

私はさつきまで日下部君のバイト先 スタジオに居た。

そこで私は日下部君の[写真練習]のためのモデル代わりをしていたのだ。

練習つて言つても、本格的だつたんだよね。

だつてメイクもプロのメイクさんだつたし、服や小物も人気のブランド物をスタイリストさんが選んでくれたんだもん。

ただちょっとポーズとるのがなかなか難しかつたんだよね。

最初どうとつていいかわからなかつたんだけど、用意されてあつた雑誌とか参考にしたり、日下部君の指示でなんとかなつた。

「なんかシーンごとにセットも組まれたりして、まるで雑誌か写真集の撮影みたいって錯覚しちゃつた」

「あ～、逢月。実はそのことなんだが……」

日下部君は何か奥歯に物が挟まつたような言い方をして、なかなか言葉を発しない。

ん～、なんだらう？ 何か言いたいことがあるのかな？

日下部君が言うの待つてたら、後ろから「桜音」つて一つの声によつて名前を呼ばれた。

それは涼と海の声。

あ、部活終わつたんだ。

私は振り返つたんだけど、ジャージ姿の一人の姿を見て言葉が出なかつた。

「何、お前ら喧嘩でもしてきたのかよ？」

日下部君が海と涼の顔を見ながら言つた。

日下部君がそう聞きたくなるのもわかるぐらい、海と涼の顔には口や頬に殴られた後があつたのだ。

「しょ、消毒！…」

そうだ、ぼうつと見ている場合じやない！！

急いで家の中で治療しようつと一人の腕を掴んだんだけど、それを涼に外されてしまつ。

「大丈夫だよ、桜音。俺も海も保健室でして貰つたから」

「でつ、でも……」

「心配するな。そんな見た田ほど痛くないし  
海は少しでも私の事を安心させようとしたのか、そつと私の頭  
を撫で始めた。

普段ならそれで落ち着いたり出来るかも知れないけど、今はそんな  
事できない。

一体誰と喧嘩したの……？

海は見た田ほど痛くないって言つてているけど、唇の端が腫れたりし  
て痛そうだ。

「えっ、マジで？俺、結構本氣で殴ったのに」

「！？」

さらりと言つた涼の言葉に私と田下部君は絶句し、海はぱつが悪そ  
うに顔をそむけた。

一体、一人に何があったの！？

## 第五話 一人して（後書き）

長らく放置しててすみません。

パソコン壊れて修理中でした（――・・）

長かった…

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました^\_^(――)v

## 第六話 からかう理由

だめだ。やつぱり氣になつて頭から離れない。

私は見終わったテレビを消し、クッションを抱えこんでソファへと寝転がつた。

理由はもちろん、今日の涼と海の喧嘩の理由についてだ。

おかげでさつきまで見ていたドラマの内容を全然覚えてない。

それにしてもあの二人、一体なんで殴り合ひの喧嘩なんでしたんだ  
るひ？

二人に聞いたんだけど、涼も海も教えてくれないし……  
もしかして部活の事かもしないとかいろいろ考えてみたけど、  
推測にしかすぎない上に理由として納得できるものが全然浮かんで  
こなかつた。

どちらから先に手を出したかわかんないけど、あの二人の事だから  
それなりの理由つていってるのは確かなんだろ？

「でも、もう大丈夫だよね」

だって涼も海もある後、普通に何事もなく会話してたし、明日も一  
緒に部活行く話もしてたもん。

ここは、やっぱしあらそつと様子を見……

「…？」

なつ、何！？

突然右頬に感じた弾力のある柔らかい感触に思考を停止されてしま

つた。

この感触たしか前にも感じた事がある。

あれはたしか……

頬を押さえてガバッと起き上ると、思い当たる原因を引き起しにした人の名を叫んだ。

「海っ！――」

最初は虫か何かが当たったのかなあって思つたんだけど、触れたものが柔らかかつたし、気づいたら人の気配を感じてたので、まさかと思つたらやつぱり――。頬に柔らかい感触があつたのは、海が私にキスしたせいだ。

「ん？ どうしたんだ？」

わかつてゐくせに、クスクス笑うなつ――

海はさつきまでお風呂に入つていたため、Tシャツにハーフパンツというラフな格好をしている。

あつ。

髪から雫が落ちてくるのが見えた。

海は最近、暑いからつて理由でドライヤーをかけない。

そのため、水滴が落ちてきてもいよいよ肩からタオルをかけてくる。

もへ、ちゃんと乾かしてつて言つてるのに。

つて、今はそれどころじゃないし――

「私の事からかうの辞めてつて、前にも言つたじゃん――」

恥ずかしさのあまり半泣きになりながら、私は海に怒鳴つた。

海は隙あらば私の事を膝の上に座らせられたり、抱きしめたりする時がある。

しかも「桜音、真っ赤」とか言いながら頬をつつきながら、からかつてくるんだよ？

「ほんと恥ずかしいの。だから、絶対辞めて。わかった？」

そう言って隣に座った海の顔を見るけど、海は幸せそうに微笑んでいる。

えへっと、私一応怒鳴ったんですけど？

「それはちょっと無理だな」

「なんで辞めてくれないの！？海の意地悪つー！」

「意地悪かあ……桜音はほんと可愛いすぎるよな

はっ！？私が可愛い！？

もしかして、涼と喧嘩して頭打ったとか……？

病院連れて行つた方がいいのか考へてると、ぽんぽんと頭を撫でられてしまった。

「って、ちょっと待つて撫でないで。頭撫でられるの弱いんだからーー！」

海に頭を撫でられて私は、いつも通り力が抜けリラックスモード。私はさつきの事をすっかり忘れ、海の肩にもたれるようにしている。

「……はあ。なんでこんなに無防備なんだよ」

海はため息まじりに呟いたけど、知らない。

だって、弱いもんは弱いんだもん。

私は心地よさのあまり目を閉じながら、それを聞いていた。

「桜音

「んへ……」

あ、やっぱー。眠くなつてきちゃつた。

寝るなら部屋に行かなきやとは思つたけど、面倒だ。少しだけここで寝ちゃおつかな……

「花火大会、一緒に約束覚えてるか？」

眠さのあまり返事をするのも億劫だったので、私はただ首を縦に動かした。

来月花火大会があるんだけど、そこに行こうって海に誘われていたのだ。

その間に海の誕生日があつたり、海の部活の合宿があつたりといろいろイベント事がある。

「……………桜……伝え……事が……」

あ〜、もう駄目だ。

やばい。ちゃんと話を聞かなきゃいけないのに……

海が何か言つてる気がするけど、眠りの世界に引きづりこまれてしまつた私にはわからなかつた。

## 第七話 企み…？

わ～っ、可愛い。

私の視線の先には白の生地に薑の花、薄い青地に兔などの布が並んでいる。

どれも可愛いけど、反物なんだよね。これ。

畳みの上に並べられているのは、どれも浴衣の反物。そのため花火大会までに浴衣として仕上がるかわからないし、それに何より 予算内に絶対に収まらないよ～！～

私は夏祭りに着て行く浴衣を新調しようと、圭吾さん……海のお父さんお勧めのこのお店に連れてきてもらったんだけど、ちょっと悔している。

だって、連れできちんちんのが『賽極』だったんだもん。

賽極は、江戸時代からある老舗の呉服屋さん。

一見さんお断りのお店で、愛用者はもちろん由緒ある家柄の人や政治家や社長さんばかり。

最初に気づけば良かつたんだけど、名前しか聞いた事なかつたし、のれんに書かれていた賽極って文字が崩されすぎて読めなかつたんだよね……

ん～、圭吾さんにこのお店に既製品ないか聞いてみようかな。

そつちだと私が買えそうなものあるかもしないし。

そう思つて圭吾さんの方を見ると、圭吾さんは撫子や菊などが描かれている反物と、紫陽花の描かれている反物を見比べていた。

時折圭吾さんが、キクさんと呼んでいたお店のお婆さんと話をしている。

あ～、そういうえば、みちるさんにサプライズで浴衣をプレゼントするんだって言ってたつけ。

「どうしようかな……」

邪魔するのも悪いし、他の店員さんに聞いた方がいいかな？  
そんな事を考えてると、聞きなれた声が耳に入ってきた。

「ほら、これ写真」

この声って

あ、やつぱり。田下部君だ。

声の方向に目を向けると、やつぱり思い当った人がいた。  
でも田下部君は一人じゃないみたいだった。

田下部君の隣りには、鮮やかな着物に身を包んだ女の子が歩いている。

同じぐらいの年かな？

髪はおかげで目は一重、すっとした鼻立ちの和風美女だ。  
二人は私に気づかず通りすぎようとしている。

「本当なら写真ではなく、桜の姫を連れて来ていただいた方が良い  
のですけど。そうしたのなら、私もお会いする事が出来ますのに」  
桜の姫 もしかしてそれって、私の事……？

聖と逢った時に海の友達が私の事を「桜の妖精」とか「桜の姫君」とか言つていて聞いた。

あの時一人一人にあつて訂正入れたって思つたんだけど、さすがに私の事を話してるのなら声をかけるにかけれない。

「しううがねえだろ。あいつ連れてきたら、俺達が動いてるのが海にバレちまうかもしだねえからな。それに逢いてえのなら、当日逢えるだろ」

「まあ、それはそうですけども。でも、海さんにバレてしまふなんて少し考えすぎじゃありませんの？」

「あのな、お前はわかつてねえって。アイツは逢月の事なら些細な

変化でも氣づくつゝの「

「海さんが姫の事を溺愛しているのは、わかつてますわ。現に浴衣の予約だつて」

やばっ！

あまり見過ぎたのか、その女の子の視線が急にこちらに向いて田が合つてしまつたのだ。

あ

そういうやばい事に田下部君と田が合つてしまつ。どうやらふこに話と足を止め、こいつを見た女の子を説て想つたじつへ視線を追つたみたいだ。

「逢田お前なんだ」「……」「！」

「こ、こんなにむけ……田下部君……」

私はぎこちなく手を上げた。

## 第七話 企み…？（後書き）

読んでくれている方ほんとありがと「う」やれこます！  
更新遅いえに、文章とか下手だし、ありがちな話なのに……  
今回は早めに更新できました。  
このペースをなんとか続けられれば^ ^ ;

## 第八話 パーティをしませんか

テーブルの上には、お花の和菓子が赤い漆皿の上にのっている。私はそれを竹の楊枝で切ると、口の中に入れた。

うん、おいしい！！

ここは賽極のお店と同敷地内にある、凛さんが住んでいるお屋敷。話があるからと、浴衣を見ている圭吾さんを残して私は田下部君達にここに連れてこられたのだ。

「お口に合いますか？」

「はい。とても」

「よかったですわ」

着物姿の美女・凛さんは私の返事を聞くとにっこりと微笑んだ。

彼女は、さいごくひる凛さんと書いて、ここ賽極のお嬢様。

年は私と一緒に、陸王学園高等部の一年生なんだって。

陸王って言つたら、幼等部から大学まである社長子息・子女などが通つ名門校。

海も元々中等部まで陸王の生徒だつたんだけど、推薦で高校からうちの学校に入学。

もちろん、この事はうちの学校の生徒達はみんな知ってる。

陸王はエスカレーター式なのに、どうして外部の高校に来たのかつて入学当初すぐ噂になつてたから。

結局理由としては、うちの学校がバスケが強かつたつて事だつたんだけど。

「あ～。早速だが、逢月。話なんだけどよ～」

田下部君が、みたらし団子を食べながら話を始めた。

あつー！お団子私も食べたかったのにー！

「もうすぐ海の誕生日だろ？そんでも俺と凛、それと他の奴らで海の誕生日パーティーを計画中なんだ」「いつやるの？」

「23日です。金曜日で平日ですが、ちょうど夏休み中なので、あ。それじゃあ、海の誕生日田下部君にパーティーなんだ。つて事は、あと一週間と少しだとか。

「もちろん参加するよな？」「うん……」

これはもう即答。だって、海の誕生日パーティーだもん。私もちょうど、料理を考えたりして海の誕生日をお祝いしようと思つてたのだ。だから、田下部君達も一緒に心強い。だって海との付き合いが長いから、こうこう知つてそつだもん。あつ、そうだ。海の好きなものとか聞いておこうっと。私は、プレゼントまだ買つてないんだよね。

「田下部君。海が欲しいものってわかる？」  
ちょうど今日浴衣見た後に買いに行こうって思つてたんだ。  
海に何か欲しいのある？って聞いたら、何もいらないって言われちゃつたし。

「あー、それならお前にリボ」「

パチンと田下部君が凛さんに扇子で頭を軽く叩かれた。

「まったく、貴方ときたら」「なんだよ！あいつ一番喜ぶじやねえか！だから、俺もこいつの写真し」「

……私の写真が何？

田下部君はわざとらしくせき込むと、何事もなかつたように緑茶を飲み始める。

なんか、気になる～。

「もちろん、誕生日パーティーの事は海さんには秘密です。もしされそうになつたら、なんとか誤魔化して頂もらえませんか？」

「誤魔化す……」

ん～、難しいかも。

でも、なんとか頑張る…！

「そんな考えねえでも、簡単だ。惱殺だ。惱殺」

「は？」

思わず凛さんとハモつてしまつた。

何言つてんの！？

「は？じゃねえよ。その事がぶつ飛ぶぐらい、惱殺してしまえばいいんだつつの」

「ちなみに、どうやって……？」

そんなスキルが私にあるわけない。

というか、そもそもよくそんな発想が出て来たね。

「抱きついて、キスの一いつ一いつでもしてやれ」

「ちょっと……」

無理す&死ぬでしょ！？」

「相変わらず貴方は無責任すぎるの発言ばかり」

凛さんは大きくため息をはくと、冷めた目で田下部君を見る。

「どこがだよ。海はこいつの事となると、抱きつかれたぐらいで顔赤くして固まる純情少年になるんだぜ？ そう考へると、出来なぐはないだろ」

「本当にですか？あの海さんが……！？」  
凛さんの目が大きく開かれた。

「信じられないだろ？この間のモデルが逢月なりひつなってたんだ  
うつな」

「モデルって？」

「海のバイトに決まってるだろ。この間、モデルの女との絡みでキ  
スシーンあってよ

## 第九話 気づいたやつたかも

海の部屋って本当にシンプルだ。

鉄製のベットと、ブラックの木製の机、それから収納ケースや香水が保管されているスチールラックしかない。

雑誌やスウェットなどもフローリングに置かれてないし、どこもかしこも綺麗に整理整頓されている。

そんな室内には「あ、あの……その……」といつ、私のじどうもどろな台詞がBGMがわりに何度も繰り返されていた。

「……ごめんなさい」

「いじょ、桜音。ゆっくりでいいから

きっと田下部君ならとっくに「せつせつ要件を言え……」ってキレてるはずだ。

それなのに海は私が言い出すのを待ってくれている。  
海って、ほんと優しい。

「うん。あのね……その……海って……」

私はまたそこから先がなかなか言えなかつた。

一体いつになつたら、このスパイラルから逃れられるの!?

それに海にもいろいろ予定あるし、早く言わなきゃ。

机の上にある、さつきまで海が使っていたノートパソコンに向けると、

画面はすっかり省エネモードになっていて、オレンジ色のランプだけが点灯していた。

その隣には書類の束が置かれている。

海は圭吾さんの所で、経営の勉強をしているみたいだからそれ関連の資料かもしねー。

これ以上いたら海の邪魔になっちゃうよ。

それに、そろそろ正座がキツイ。

足の感覚がなく、これは絶対もつそろそろ痺れてくるはずだ。

そうなつたら部屋から出れなくなっちゃって、ますます海の邪魔になっちゃう。

よしと私は心の中で気合を入れ、私は意を決して口を開いた。

「あのね、海つて最近誰かとキスした事ある……？」

「は？」

海は目を大きく見開いて、じっと見てくる。

そりゃあ、そうだよね。

いきなりこんな事聞かれたら、誰だって驚くはず。

でもやっぱり、昨日、田下部君が言つた事が気になつてしまふがな  
いんだもんっ……！

「 あるよ」

えつー？本当に撮影でモテルさんとキスしたの！？

海の言葉に思わず海の腕をつかむと、海が声を出さずにクックツと  
喉で笑つた。

「 桜音は、もう忘れちやつたのか？ついこの間の事だぞ」

そう言って伸びされた海の手が私の頬に触れる。

もしかして……これは……！！

とつさに近づいてきた海の唇を手のひらで塞ぐ。

先手必勝。やっぱ思った通りだつたし……！

海がなぜか不満そつた顔をしてるけど、今はひとりあんず気にしない  
事にする。

「違うのーーー私以外の人とつて事……！」

私は手のひらをはずし、海の唇を外気に触れさせた。

「桜音以外と？」

「うん」

「あるわけないだろ

海は私の皿を見てきつぱりと断言した。

「本当ー？」

「本当。なんで俺が桜音以外とキスしなきゃならないんだよ

海はそう言つて私の事を抱き寄せる、ギュッと抱きしめた。

「大体俺がキスしたり、こいつして触れたって思つるのは桜音だけだ

「私だけ……？」

「ああ。桜音だけだ

心臓の音もやばいけど、それ以上に嬉しい。  
海がこうしてくれるのが、私だけって事が。

「絶対？」

「ああ、絶対

私はその言葉を聞くと海の背に手をまわし、ギュッと抱きしめ返す。  
少し伝わってくれると良いな。私も海と同じ気持ちだよって。  
まだ言葉にして伝えられないから。

……あれ？

今、もしかしてって思つたことがある。

海つて、私以外とキスとかしないんだよね？

それつてもしかして

でも、海が私なんか……

私はこの時自分の事で精いっぱいだったため、海が時間が止まった  
かのように

動かなくなってしまったのに気付かなかつた。

## 第十話 本人の知らぬ間に進行中。

やつぱこれってうぬぼれなのかな？

ここ最近考えている事がある。

もしかしたら、海が私の事を好きなんぢゃないかって。  
だって、普通好きな人としかキスしないよね？

海、私としかキスしないって言つてたし。

でも……

海は高嶺の花。

だつて世が世なら王子様と平民娘だよ？  
あきらかに不釣り合いだもん。  
でも、海のあの発言

あ～つ。も～、頭の中こんがらがる！！

……やつぱみくに相談しよう。

きつと驚かれると思うけど。

私はみくに海の事が好きつて言つてない。

だつてみくつて海の事嫌いなのかな、すぐつつかかつてくるんだもん

……

「逢月桜音！！」

「うわっ」

突然耳元で怒鳴られ、思わず両手で耳を塞ぐ。

その声の主によつて急速に私は現実世界へと戻されてしまった。

あ、やばっ。私、たしか今……！！

声の主が誰かわかつた瞬間、サーつと血の気が引いていくを感じ

だ。

恐る恐るその人の気配がする方向に田を向ける。

すると案の定、眉間に皺をよせこっちを睨んでいる田下部君と田があつた。

こつ、怖つ。

田下部君の後ろにまレフ板とライトが見え、その手にはカメラが握られている。

「お前、今何してるかわかつてゐるよな?」

「あ、撮影中です……」

私は田下部君に頼まれて、今日もまた練習台になつていたのだ。今回はこの間と違い、背中に羽をつけられ天使の格好をさせられている。

もちろんマイクはプロの人によつて貰い、服もスタイリストさんが用意してくれていたもの。

「ねえ、どうでもいいけど早く撮りなよ」

そう言いながら、あきれ顔でこっちを見ているのは人気モデルの聖。今日の彼の格好は、上がキラキラ輝くドクロが大きく描かれている白Tシャツ、下は紫のカラー デニムにウォレット チョーン。さつきまでこの隣りのAスタジオで撮影だつたらしく、それが終わつたのでこちらの様子を見に來たらしい。

思うんだけど、私じゃなく被写体を聖にすればいいと思つ。だつて、本物のモデルさんなんだし。

「んな事わかつてゐつて。けどよ、モデルのこいつがボケつとしてたらどうにもなんねえだろ」

「たしかにそうだけど。でもこのスタジオ使えるの、後30分しかないんだよ。それに、今日中にデータ持つてないと当日まで間

「合々わなくなるじやんか」

ん？・当口まで聞に合わない？

「ねえ、これって『眞の撮影練習』だよね？」

「あ？ 何だよ急に」

だって聖の話聞いてると疑問を抱かずにはいられなくて。

「とにかく、撮影続けるべ。逢月、お前ボケつとすんなよ」

「え、ちよつ……」

誰か私の不安を拭つて！！

そつと思つた時だった。

「逢月 桜音つてどの女よ！－！」

と甲高い声が聞こえたのは

## 第十一話 愛海

スタイリストの相川さんやメイクの笠井さんの制止を聞かず、カツカツとミコールの音を響かせながら、その女の人は私達の前へとやって来た。

白い半袖のパフスリーブのカットソーに、ドット柄のベアワンピースを重ね着していく、ワンピースには赤い太ベルトを巻いている。

「どうしてここに……？」

名前を聞かずとも、私はもうその人が誰なのかを知っている。だってこの人は

スッと通った鼻に目力抜群のぱっちりな目、グロスによつて薔薇のように色づけられた唇。

本来なら長い明るい茶色の髪は、編み込まれシニードカット風にされている。

笑うとえぐぼが出て可愛いんだけど、無表情なのでそれは見えない。

どうして愛海があいみがここにー？

整つた顔に、スラリとした体に長い脚。

それはまるで雑誌から飛び出してきたモデルさんのよつ……じやなく、この人は正真正銘本物のモデルさん。

彼女が専属モデルをしているファッショングラビュアル雑誌は、私も愛読中。

本来ならそんな人が目の前にいるので、驚きのあまりテンションがあがるはずなんだけど、この状況じゃそうはいかない。

「まさか、あんたが逢月桜音？」

腕を組みながら愛海さんは、刺すような視線で私を見下ろしている。背高つ。

日下部君と視線一緒にだから170?は絶対に超えているはず。私の身長は155?なので愛海さんを見上げる形になる。

「やつですけど……」

おどおどしながら返事をすると、鼻で笑われてしまった。

「こんな大掛かりなセットまで用意して、まさかモデル気どり?」「あ、いえ。別にそんなつもりじゃないです」

たしかにセットが大掛かりって事は同意する。

まるで雑誌か何かの撮影してるみたいだもん。

だつてシャンティアとか、アンティーク風の赤いベルベットのソファとか、セットがちゃんと組まれてあるんだよ?

「だつたら今すぐ辞めなさいよ。みつともない」

み、みつともない……

確かにこいつこう格好は、可愛い子がやればいいと思つたが。

でもさ、これそもそも写真撮影の練習だし!..

そう、これはあくまで練習。世に出るわけじゃない。

「まさか自分で似合つてると思つてるとか?」

「いえ……」

「でしそうね。だつてそれ酷過ぎるもの」

愛海さんは吹き出して笑い始めた。

もう嫌だ。

笑われてまでやりたくないもん。

「もう無理」って断りひとつ日下部君の方の様子を見ると、カメラをいじつていた。

ちょっと、まさかこの状態で撮影するの…?

「日下部く

」

田下部君に声をかけようとしたんだけど、急に走った手首の痛みに言葉が止まってしまった。

痛い……

痛みに顔を顰めながら手首を見ると、愛海さんが私の手首を掴んでいた。

「まさか、撮影続ける気じゃないでしょ？」「だからそれを今から聞こうと……

「さつさと着替えて帰つたら？すつじこ田ざわり」「ぐいっと引つ張られ、前に体重がかかってしまった。やばい。

大抵やばいって思つたら、もう遅い。

この時の私は衣装としてヒールが高めのブーツを着用していた。

しかも十五センチはあるんじゃないかつてぐらいのもの。

そんなの履くの初めてだから、私はまだまともに歩く事が出来ない。そんな状況でバランスを崩してしまつたらどうなるかなんて、もうわかりきつている。

## 第十一話 愛海（後書き）

ここで区切ります。

## 第十一話　何気に酷くない？

急にひつぱりてしまい、私は案の定床に倒れこんでしまった。愛海さんは私がバランスを崩したのがわかると、とつせんに手を離したため無事だ。

痛い……

頬を床にぶつけて痛いし、何より足首がじんじんとする。あ……もしかして足捻っちゃったかも……

右足をさすりながら、起き上がろうとすると「大丈夫か?」と田下部君が手を差し伸べてくれた。

「ありがとう」

お礼を言つて田下部君の手をとり、起き上がろうとする。だが、普通に立とうとしてしまったため、右足に力が入ってしまった。

やばっ。

そのため右足に激痛が走り、ふら付いてしまつ。また床と衝突！？と思つたけど、咄嗟に聖が支えてくれたので倒れずにするんだ。

「まさか足捻つたとか言わないでよ？」

「えつと……その……」

聖に対しても私は曖昧に笑う。その間も足の痛みは続いている。どうしよう……もしかして捻挫かもしれない。

「ちょっと足見せてみる」

しゃがみ込んだ田下部君は右足を触っている。もしかして、触診をしてるのかな？

「田下部君、捻挫とか詳しいの？」

「あ～、ちょっとな」

へ～、何か運動とかしてたのかも。

この時の私はあまり触れなかつた。

もう少し触れていれば、この時私のファーストキスの相手がわかつたのに。

「骨は折れてないが、一応病院行つた方がいいな」

日下部君は立ちあがるとさう私にそう告げる。

病院か。タクシー呼ばなきや。何番だつけ？

そんな事を考えていると聖が、

「なら、次僕移動だから乗せて行くよ。鈴木さん喫煙室こらから、呼んでくる」

と言つてくれた。

マネージャーの鈴木さんを呼びに行ひつと、聖はドアの方向に向かつて歩き出す。

でも、その足が愛海さんの言葉によつて止まつてしまひ。

「残念。足捻つたのなら、撮影は中止ね」

「愛海や、他に言つ事ないの？」

聖はかなり立腹なのか、両腕を組んで愛海さんを睨んでいる。

その声のトーンはかなり低く、威圧感がすこい。

「わざとじやないにしる、このト怪我したかもしれないんだよ？君の下らない嫉妬のせいだ」

「　」

端正な愛海さんの顔が歪む。

「正直、僕にもこの子の良さなんぞつぱりわからない。だつてあまりにも……」

聖は私の方を見ると、ため息を吐く。

あまりに何！？まあ、大体予想はつくけど。どうせ普通つて言つた

いんでしょう？

ほんと帰りたい。なんで私、今日ボロボロ言われなきゃいけないの！？

「この子はずば抜けて可愛いわけじゃないし、特別頭がいいわけじゃない。

それにせしあたって、これだといつものもない」

「ちょっと待って！！聖、私の事嫌いなの！？」  
「たしかにこれと書いて得意だって言う事はない。  
頭も良くも悪くもない中だし、顔もスタイルも普通。  
本当の事かもしないけど、わざわざから酷くない！？」

「え？別に普通だけど。なに？好きだって書いてほしいの？」

いや、そう書いて事じやなくて……

真顔で書ひ聖に、私は言葉を失う。

「だから愛海が氣に食わないのもわかるよ。だって海とはあまりに釣り合わなさすぎる。

でもさ、愛海だってもひわかってるんでしょ？海が本気な事。わからぬわけないよね？

あの海がこの子のためにモテルのバイトしてるぐらいだから

「え？海って私の為にバイトしてるの？」

とつれにそう聞き返そうとしたけど、雰囲気的に出来なく口を開じる。

「だから君が何を言おうが何をしようが海の氣持ちは変わらない。  
この子の格好より、嫉妬でやつあたりする君の方がよっぽどみつともないよ」

「じゃあ、海はこの女の何処が好きなのよー？」

え？

ボロボロ言われテンションが下がりまくった私だつたけど、その言葉によつて浮上する。

やつぱり海つて私の事好きでいてくれるの？思ひ違ひじゃなくて？

「ねえねえ、海つて……」

隣にいる田下部君の服を引っ張る。

田下部君なら、海の好きな人わかるかも。  
でも反応がない。

あれ？どうしたんだろう？

田下部君を見ると、目を大きく見開いたまま一点を見つめている。  
それに気づいた聖たちもその視線を追つ。

あ。あれば

「愛海、ちょうどいいじゃんか。この子のビーチがいいのが、本人に  
聞いてみれば？」

## 第十二話 只今、かん口令発令中。

「一体これはどういう事なんだ！？」

スタジオの中に海の怒鳴り声が響く。

海は腕を組んで日下部君と聖を睨んでいた。

その視線は鋭く思わず後ずさりをしてしまった。

うわ～、やっぱ大人っぽい。

そんな空氣の中、私は一人海に見惚れていた。

いつもの制服や私服と違つて、今日の海はグレイのストライプタイ

プのスーツに水色のネクタイ、

それに無地の白いワイシャツを着用している。

海は時々こつしてスーツで出掛ける時があった。

それはほとんどが啓吾さんの会社に経営の勉強をしに行く時だったり、パーティーダつたり、ほとんどがお仕事関係の時だ。

今日もスーツ着ているから、お仕事関係かもしけない。

「あ～、これはなんていつかよ、あれだ。あれ

私の隣では日下部君がじどうもじるになりながらも、なんとか誤魔化そうとしている。

一方の聖の方はといづれ、落ち着いて海の睨みを流していた。

「海、どうしてここにいるの？」

「今は俺の事なんてどうでもいい。それよりも桜音、一体その格好はなんだ」

「一応天使だよ」

私の今の格好はパフスリーブの白い膝上のワンピースに、紐で締めるタイプのコルセットを巻いている。

ワンピースは、裾の部分をパニエで膨らませたり、リボンやフリル

がふんだんに使用されるなど甘めだ。

そして首には花の「サー・ジュー」のチヨーカー、背中には天使の羽。その上、金髪のウイッグにブルーのカラコンをつけている。

「天使に見えない？」

「いや、見える。あまりに似合はずぎて、最初見た時本物の天使かと思つたぐらいだ」

「……え。それはないとと思うよ……」

だって日下部君なんて、これ見た時「幼稚園のお遊戯会か！」「つて言つてたもん。

なんかもつと神聖なものにしたかったのに、かなりイメージが違うものになつたらしい。

そもそも私にそれを求めるにはハードルが高すぎると思つ。

「それで、桜音はどうしてこんな愛らしい格好しているんだ？」  
海は穏やかな微笑みを浮かべながら、私を見ている。  
愛らしいのか……？という疑問は浮かんでくるが、海がそう言ってくれるなら少し嬉しいかも。

「内緒」

「そうか、内緒か」。 で？日下部、帰るならこの状況を説明してから帰れ」

あ。今、途中から声のトーン明らかに変わった。  
海の言葉に扉に向かつてこそ逃走中の日下部君の大きな体がビクッと動く。

「つうか、なんでいんだよ！ 今日お前入つてなかつただろ」「親父の仕事の付き合いだ。ついでに聖に顔出しをしようとしたら、桜音もいるしお前もいるし。  
それで、ここで何してんだよ？」  
「まだ言えねえよ！」「

それにしてもなんで隠したがるんだろう？

ただ私をモデル代わりにして「撮影練習してました」って言えぱい  
いだけなのに。

どうやら日下部君はこの事を海に内緒にしたいらしい。  
そのため私を含めスタイルリストさんなどスタッフ全員に、かん口令  
が敷かれている。

「まさか、また桜音使つて妙な事考えてるんじゃないだろな？」  
私に向ける柔らかな視線とは打つて変わつて、  
海はまるで肉食獣が獲物を狙うような視線で日下部君を見ている。  
その視線に負けたのか日下部君が口を開きかけたんだけど、  
それが音となつて私達の耳に届く事はなかつた。  
てっきり日下部君がしゃべると思つていたら、聖がしゃべり出して  
しまつたからだ。

「ねえ、海。桜の姫が他の男に触られるの嫌？」

「は？ 急に何言つてんだよ。そんなの当たり前だろ」

「そう。じゃあ、どうしようか？ 海が運ぶ？」

聖は顎にてをかけ首を傾げ、海に尋ねる。

「お前、一体何が言いたいんだ？ それとこの状況何か関係あるのか  
よ？」

「関係はないよ。別に大した事じゃないけど、一応言つておかなき  
やと思つてさ。

桜の姫さ、愛海に引つ張られて転倒したんだ。姫が海の寵愛を受け  
てんのがお気に召さないみたい

「はあ！？ 大丈夫なのか！？」

「え？ うん。全然平気」

つていうか、少し落ち着いて。

海は私の両肩に手をおき、ゆすりながら尋ねてきた。

「愛海、どうこうつもりだ。話があるなら、俺が受ける。今後一切  
桜音には手を出すな」

愛海さんは青ざめて震えている。

無理もない。

だって海の周りの温度マイナスの世界だし、声だって地を這ひよう  
な声だし……

「姫、足捻っちゃったんだって。これから病院に連れて行きたいん  
だけど、海どうする?」

あ、聖言つちやダメっ！！

海、心配性だから絶対大騒ぎになっちゃう！！

私の想像通り、数秒後私を抱きかかえた青ざめた海が廊下を全力疾  
走していた。

## 第十四話 恋の相談ならやつぱり。

なんだか、少し緊張する……

少しでも落ち着くため、紅茶を飲んだ。  
そしてテーブルをはさんでむかえ側にあるダークブラウンの  
皮ばりのソファに座っている人に向ける。

するとそこには紺と白のマリンタイプの半袖のカットソーに、  
デニムのショートパンツという格好のみくがこちらを見ていた。

「足、大丈夫なの？」

「うん、平気。軽い捻挫だつて」

私の右足には、ぐるぐると包帯が巻かれている。

あの後海に病院に連れて行つてもらい、お医者さんに見て貰つた。  
そして、下された診断は軽度の捻挫だつた。

三日間は運動もせず大人しくしてれば、一週間ぐらいで治るみたい。  
これなら、海の誕生日パーティーにギリギリ間に合つ。

「良かったね、軽くてすんでさ。でもさ、なんで捻挫なんでしたたの  
？」

「うん。実はその事も含め、みくに相談したい事があつたんだ  
「相談？いいよ、何？」

みくはそう言つと、麦茶に口を付ける。

実は今日はみくに海の事を相談しようと思い、家に来て貰つたのだ。  
海は部活中で家にいないので、話すにはけつぱりいいし。

「あのね、実は好きな人がいるの。それで…… つてみく！？」

まだ肝心の内容を離していないのに、みくが麦茶を詰まらせたらしくゴホゴホと咳き込んでしまつていてる。

「だつ、大丈夫！？」

「だい……じょ……ぶ」

私が立ち上がり立てるの見て、みくはそれを手で制する。  
そして何度も咳き込むとやがて落ち着いたのか、大きく深呼吸し目  
に溜まつた涙を擦つた。

「あんた好きな奴いたの！？それってうちの学校！？うか、そもそもそいつは誰よ！？」

みくはダンシとテーブルに手をつき、前のめりになつてこう。  
その迫力に、若干の恐怖心を感じずにはいられない。

「あっ、あのね隠してたわけじゃないよ。何度も言おうとしたの…！  
でもみくその人の事苦手つていうか、嫌つていうか…」

「はあ？ 私が嫌いな奴？」

「うん」

だつてみく海の話題とか耳にするも、すべてもじろくなもそつなく  
顔するじやん。

それに前に「海の事苦手？」つて聞いたり、「ムカツク」つて言つ  
てたし。

「…で、誰なのよ。名前言つてくれなきゃわかんなこよ。もしか  
して言えないとか？」

「言えたくない。あのね、海なの…」

「は？ かい？ かい…？」

みくは首を傾げながら、ぶつぶつと海の名前を何度も呟いている。  
もしかして、誰だかわかんないのかな？

やがて思いついたのか「まさか…！」と応援団顔負けの声で叫ぶと  
立ちあがつた。

ちょつ、『近所さん』に迷惑が…！

「まさか、海つてあの在原海の事じゃないでしょね…？」

返事の代わりに頷くと、みくは力が抜けたようにソファに座りこんでしまう。

えつ、ちょっと…？ みく…？

「ありえない。まさかこうなるなんて

みくはそう言つたまま急に黙りこんでしまった。

どうしたんだろ…？

どれくらい経つたのかな？

それは数秒だったのかもしれないし、数分だったのかもしれない。  
みぐが黙りこんでしまってから、しばらくぶりにその口が開く。  
そしてその言葉に、私はしばし呆然となつた。

「あんた達が付き合つたら、アタシと桜音遊べなくなるじゃない！」

！」

「は？」

なんで付き合つとかの話になるわけ？

とこうか、遊べなくなるってどういう事？

もし仮に海と付き合つたとしても、みくとは遊べるはずだよ。

「いい、桜音。あいつはね、あなたの事が大好きなのよ…。いやもう好きっていうか、うつとおしいぐらいの溺愛レベルで。だからあいつは桜音の事になると、私にまで焼きもち焼くぐらい器が小さい男なの…！」

「は？」

「は？ ジゃない～っ！」

思わず肩がビクッとなつた。

えつ、何？なんなの！？

急に立ち上がり拳を握りしめ始め、みくは段々ヒートアップしてきはじめてしまった。

「いい？ 桜音。私は在原海の事を嫌いでもないし、苦手でもない。

ただムカつくだけなのよー！」

ああ、思いだしただけでも腹立つ。あの時の事　」

## 第十四話 恋の相談なりやつぱつ。（後書き）

一ヶ月以上ぶりの更新つて…

こんな亀更新でも読んで下さつてる方、ありがとうございますーーー。

## 第十五話 眠り姫とHIMI様

「ねえ、一体何があったの？」  
首を傾げみくを見つめる。

するとみくは苦虫でも噛みつぶしたような顔をしていた。  
えつ、ほんと何があったの〜〜〜！？

なんかみぐの様子を見ていると、すこく不安になってしまふ。

「パシリにされたり、無理やり携帯の番号とアドレス交換させられ  
た。

まあどれも元をたどれば、あいつの桜音バカのせいだけど  
「はあ！？ いつ！？」

思つたより大声が出てしまい、慌てて自分の口を押さえる。  
海がみくをパシリにしたなんて信じられない。  
それと、私バカって一体何なの？それ。

「いつだつたか覚えてないけど、あんた中庭に日向ぼっこに行つ  
た時あつたでしょ？」

クーラーで体冷えたからつて言つてさ」

「え？」

いつのことだらう。

クーラーで冷えると、結構頻繁に廊下とか中庭に出ちゃつてたんだ  
よね。

そのためみぐの話しているのがいつのことなのか、見当がつかない。

「桜音田向ぼっこに行つて、あの暑い中そのまま寝ちやつた時の  
事よ。

ほら熱射病になると悪いからつて、あんたが寝てる間に運ばれた時  
あつたじゅん」

「あつ、あの時のこと…！」

思いだした。あれはいつだっけ？

私もみくと同じではつきりとした日にちは覚えてない。

でもテスト勉強してたから、テスト週間より前のことだとと思つ。あの日クーラーで体の冷えた私は、中庭で日向ぼっこをしてたんだけど、

そのまま夏の暑い日差しの下で寝てしまつたのだ。

だつてあの時お腹ご飯食べ終わつた後だつたし、昨夜テスト勉強してかなり眠かつたんだもん。

「あの時びっくりしたんだよ。だつて中庭で寝てたのに、起きたら写真部の部室だつたんだから」

目を覚ますと中庭のベンチにあつた私の体は、なぜか部室のソファの上へと移動されてあつた。

わけがわからずそばにいたみくに聞くと、「熱射病になると悪いから運んだ」との説明があつた。

そう言えば、結局あれは誰が運んでくれたんだり？

みくは、「引きずつて運んだ」つてわけのわからない事言つし。

「その日、実は後からアタシも中庭に行つたのよ。学校抜け出してコンビニに行くために」

「コンビニ行くなら、昇降口から出るんじゃないの？」

中庭寄つてから行くんじゃなくて、直に昇降口に行つて外に出た方が早いと思うんだけどな～。

「バカつ。そんな事したら守衛に見付かってすぐバレるでしょうが！！裏門から」つそり行くのよ

「でも、裏門つて鍵掛かつてないつけ？」

「……。」

みくの沈黙を聞いて、合鍵か何か持つてゐるつていうのがなんとなくわかつた。

「一体何処で手に入れたんだ？」

「とにかく、中庭突き抜けて東棟に向かつ。そんでそこの空き教室から裏門に抜けるルートを使うと、最短コースなのよ。だから、アタシも中庭に向かつたわけ」

「うん」

「そしたらそこで偶然見ちゃつたのよ」

「何を？」

「眠り姫が王子様にお姫様だつことそれでいるところ」

「……眠り姫？」

「……ん？姫？」

あれ、なんだらうつ？急に背中に変な汗が。

合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負（前編）（前書き）

なんとか、バレンタインギリギリ間に合ひた～。  
蒼依から、いつも読んでくれていてる方にお礼小説です。  
付き合つてる設定なので、未来編。

「サイズどう?..きつくない?」

「うん、丁度いいよ」

「良かった〜」

私の返事に隣りに立っていた、制服にグレーのカーディガンを羽織つている女の子は、ほつと胸をなで下ろした。少し脱色したセミシートの髪に、トレードマークの赤い太めのフレーム眼鏡。

彼女は、クラスメイトの田村ゆかりちゃん。

趣味が洋服を作る事らしく、部活も被服部に所属してるの。

「被服部って、ほんといろいろな衣装作ってるよね」

私は感心しながら、被服室の中央にある大きい鏡を覗く。するとそこに映っているのは自分の姿は、白いフリルのブラウスに黒いミニワンピース、それに白いエプロンという格好。ワンピースの裾や二ハイにはフリルが飾り付けられていて甘めだ。メイド服初めて着ちゃった。

この服はゆかりちゃんが製作したもので、試着を頼まれたの。すっごく着心地いいし、安っぽく見えない。

「被服部って人数少ないけどすっごく個性的な子ばっかでさ、イベントでコスプレする子からデザイナー志望の子までいろんな人が所属してんの。だから、結構いろんなの作ってるんだ〜」  
ゆかりちゃんはそう言いながら、紙袋をあさり始める。

そして何か白いふわふわしたものを取り出すと、私にイスに座る様に促した。

「ね〜、何それ？」

「ん？ ちょっと待つてね。すぐわかるから」

髪を梳かれたかなって思つたら、何かクリップでも止めているようなパチンというような音が聞こえてきた。

もしかして、何かヘアアクセでもつけてるのかな？ なんてぼんやり考へると、「桜音～」といづ声と一緒に被服室のドアが開かれた。

あ、みくだ。

一瞬こっちを見て動きを止めたみくは、やがて「ちょっと、何それ！…可愛いんだけど…」と言ひながら、私達の方へと駆け寄つてくる。

「ゆかりちゃんが作つたの」

「すっげえ。この猫耳本物みたい。ふわふわして可愛いし…」

…猫耳？

ゆっくりと手を頭上に持つていき、何があるか手で確かめると、たしかにふわふわしたものに触れる事が出来た。

ちょっと…なんで猫耳！？

手鏡を取り出し、見てみると私には猫耳が着けられていた。しかも、生えてるみたいに違和感無いし…！

「でしょ。桜音ちゃんに似合つて思つて徹夜して作つたの。

あ、でも桜音ちゃんウサギつて感じもするよね」

「あ～、わかるわかる。なんか、桜音つて小動物つて感じするもんいや、一人とも少し冷静になつて考えてよ。

メイド服に猫耳だよ？

こういうのは、それこそ似合う人を選ぶと思つけど。

「これなら、間違いなくどのチョコよりもインパクト大でしょ

「もしかしてこの衣装つて…」

「うん、そう。桜音ちゃん、バレンタインのことです」「く悩んでたでしょ？だからこれなら他のチョコなんて記憶にも残らないぐらい思い出に残るかなって思つたんだ。それあげるから、着てね」「そっち！？そっちの方向にいっちゃったの！？」

今度の日曜はバレンタインデー。

実はそのバレンタインが私の頭を悩ませているのだ。

この間田下部君とバレンタインの話になつた時に、海が毎年すごい数のチョコを貰うって話を聞いてしまつた。

学校だけじゃなく、実家にも送られてくるって一体どんな数なん……そんな話を聞いてしまい、普通の手作りチョコじゃ太刀打ちできないと思つたのだ。

だから、「インパクトのあるチョコって何？」って、みくやゆかりちゃん達に聞いた事があつた。  
でも、さすがにこれは……

「あのね、気持ちは嬉しいけど……無理じゃないかな……」「なんで？似合つてるよ」

「いや、無理でしょ！？」「これで海の前に出るんだよ？」

可愛い子ならありかもしれないけど。

「えへ、逢月さんなら大丈夫だよ。在原くんも喜んでくれると思つけどな」「

「えつ？ 海つていうの好きなの？」

「ん~こうこうの好きっていうか、在原くんは逢月さんが……ゆかりちゃんの言葉を遮るように、みくの囁きが聞こえてきた。

「桜音知らなかつたの？ あいつ、いつもコスプレとか大好きなんだよ。だから、桜音も時々着てあげなきや。そしたら、桜音の事もつと好きになるとおもうんだけどな～」

戸惑つ私に囁く悪魔の囁き。

その囁きは数分続き、結局私はその衣装を貰つて帰つた。  
猫耳付きで。

## 合鍵バレンタイン企画 インパクトで勝負（中編）

あの、せめて「なんて格好してるんだ！？」とかでもいいから、何か言葉を下さい。

じやないと、この静寂に耐え切れないです

隣りに座っている海を見ながら、私はそつと溜息を吐く。海は斜めにソファに座り、隣りにいる私の事を見ていく。何処見てんだろう？

その瞳はどうか遠い所を見ているようだ。

今日はバレンタイン当日。

ゆかりちゃんに貰った衣装を着て、みんなと違うチラシで差をつけようとしたんだけど……

私が視界に入ったと思ったら、海がこうなってしまった。  
もしかして、引いたり切っているのかもしれない。

「海～、海つてばー！」

ダメだ。揺らしても名前を呼んでも何の反応もしてくれないよ。  
うーん、こうなったらみくから聞いた対処方法で。  
実はこの間もしかして海がフリーズするかもしれないって聞いていたのだ。

そしてその時、ついでに対処方法も聞いておいた。

「海。起きないと、一週間キス禁止命令出すよ？」  
「はあー？」

つこわづきまで固まつたのが嘘のように、海は体を大きく動かした。

おおっ、さすがみく。

「キス禁止命令！？しかも一週間もだとー!?まるで拷問じゃないか！！」

そんなの絶対に嫌だ。どうしてだ！？桜音「両肩を海に掴まれ、激しく揺さぶられる。

拷問ってそんな大げさな。

海にとつては重大な事なのか、ものすごく真剣な顔をしていた。

「ねえ、海。冗談だから、少し落ち着いて。ねつ？」

肩にかかっている海の手にそっと触れ、なんとか静まると促す。

「本当か？」

「うん」

「……桜音。あんまり俺をいじめないでくれ

海は私を自分の膝の上にのせ、抱きしめると同時に息を吐いた。

「それで、どうしたんだ？」この格好。幻覚かと思つて、しばらく動けなかつたぞ？」「

「引いてたんじゃなくて？」

「引くわけ無いだろ。こんな可愛いのに」

そう言って海は、ちゅと音をたてて頬にキスをする。も～。

思わずその場所を手で押さえたんだけど、その手を掴まれ今度はその指先にキスをされてしまった。

……たまに思うんだけど、海つてキス魔？

「しかし良くなってるよな。衣装もだが、この猫耳。本当に生えてるよつに見えるわ〜」

「す、いよね〜。これ、ゆかりちゃんが作つたの。海、いっぱいチヨコ貰うでしょ？」

だから、インパクトに残るチヨコを贈りたいって言つてたの。

そしたら、ゆかりちゃんがこれを着てチヨコあげたら？って

「……たしかに、インパクトは残るな。でもな、桜音。

俺は桜音からのチヨコ以外いらない。だから全部、断つてるんだ

「ええっ！？」

「机の上にあるものやロッカーに勝手に置かれた物は全部人にあげてるんだが、知らなかつたのか？」

知らなかつた……

も～、誰か教えてよ！！そしたら、この恰好せずにすんだのに。

## 合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負（後編）

「…………で、桜音。俺、その…………そろそろ欲しいんだが……」「うふ。ちゃんとあるよ。はい」

私は「ラウンの包装紙に、ゴールドのリボンで綺麗にラッピングされている物を海に渡す。

すると海は、「ありがとう」と言いながらそれを大事そつに受け取ると、田をキラキラと輝かせながらそれを見つめた。  
よかつた～。すぐ喜んでくれているみたい。

「あ、そうだ。あのね、海ってメイドさんの格好が好きなの？それとも、ナース服とかなの？」

私のその言葉に、海は生チョコを口まで持つていったまま動きを止める。

あ、また固まっちゃった。

やつぱりうに趣味って、人に知られたくないものだったのかも。

「…………桜音。いつ俺がそんな事を言った？」

「え？違うの！？だつてそう聞いたよ」

「佐々木か。佐々木だろ！－こうこう」と言うのは、あいつしかいなー！」

海が珍しく声を荒げて叫んだ。  
すごい、海。よくわかったね。

「ほんとにあいつは、また桜音をからかって。いいか、桜音。  
俺は別にコスプレとか興味ない。ただ桜音のは、ありだつて思ったけど

「そうなの？興味ないのなら、着替え……」

「それはダメだ。まだ着替えるな

そう言つた海の田が血走つてこむみづ見えるのは、氣のせいだらうか？

汚すと悪いし、この格好恥ずかしいから着替えたいんだけどな。

「まだ良く見てないし、それに」「

「それに?」

首を傾げ海を見上げると、口角の上がった海と田があつた。あ。なんだろう。

これ、逃げた方がいいような気がする。

すぐさま逃げるため海の膝から降りようとしたんだけど、読まれていたらしく、腰に海の腕が巻きつけられ降りれない。

「桜音。メイドの仕事ってなんだ?」

メイドさんのお仕事って、紅茶持つてきたりするやつじゃないの? うちでメイドさんいたことないから、ドリマとかの知識しかないからよくわかんないけど。

「ご主人様にお仕えするのが仕事だよな?」

「ん~、まあ そ うだと思つけど……」

「そ うだよな。なら、桜音。今 の 桜音 の 格好 は 何?」

「え、メイドさん」

それ以外何に見えるんだろう?

「良く出来ました」

海に頭を撫でられるけど、なんかいつもと違つて落ち着かない。むしろ、ちょっとした恐怖を感じる。

「しかも、今日はバレンタイン。」「」「、桜音に貰つたチョコがあります。はい、桜音」「」「ん」

「食べちゃ駄目だぞ」と言われ、唇にチョコを咥えさせられてしま

つた。

「桜音がメイドさんなら、『主人様は俺だよな』待つて！…おかしいでしょ！…？ 私、メイドの格好してるけど本物のメイドさんじゃないよ…？ しゃべれないので、首を激しく横に振る。」

「可愛いメイドさん。『主人様にチヨコを食べさせてまさか

その予想通り、海は何の躊躇いもなく私の咥えていたチヨコを食べ始めた。

しかも、唇についたチヨコなめられちゃったし。

「～～つ！…？」

「うん。皿い」

いや、待つて！…普通に食べてよつ！…

「せっかく桜音がそんな可愛い恰好してくれてるんだから、一緒に乐しまないとな。

桜音手作りチヨコまだいっぱいあるし

血の氣の引く私とは違い、晴れ晴れとした海の笑顔。

生チヨコ八個作つたから、あと七個。

これあと七回？無理。無理すぎる。

海とは付き合つてゐるけど、いつまでたつても慣れない私にはハードルが高い。

そんな追い込まれた私に、良い案が浮かんだ。

そうだ。チヨコ、全部食べちゃえればいいんだ。

すぐさま行動に移し、ものすごい勢いでチヨコを全部平らげて問題解決！！

……なんて都合良くなるわけもなく、数分後「このままチョコを食べさせればよかつた」

つて思ひぐらこの田にあつてしまつた。

## 合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負（後編）（後書き）

これでバレンタイン企画は終了です。

本編とブログの番外編は今書いてる途中なので、

これからもお付き合いして下さるとうれしいです。

ではでは、稚拙な文でしたが読んで下さった方ありがとうございました。

## 第十六話 秘密の崩壊

私のばかーーつ！－－なんで寝ちゃったのよ！－－  
赤面する顔を手で覆いながら、激しくあの時寝てしまつた事をもの  
すごく後悔していた。

もう嫌だ。穴があつたら入りたい。

みくが中庭で見たのは、海にお姫様だつこされる私だつたらしい。  
毎回思うけど、なんで私つて一度寝るとなかなか起きないの？  
この間だつてリビングのソファで寝ちゃつて、そのまま海に部屋に  
運ばれちゃつてたし。

今度からその辺で気軽に寝ないよ！こしなきや－－  
つて毎回思つんだけビ、眠気には勝てない。

だめすぎるよ、私……

「普通そんな光景見たら、言葉も忘れ茫然と見るじやん？それな  
にあの王子め！－アタシに氣づくと『そこでぼーっと突つ立つて  
のなら、悪いが飲み物買つてくれないか？できれば、スポーツ  
ドリンク』って言ったのよ！？大体、なんでアタシが買つてこなく  
ちゃなんないの！？自分で買いに行けよつて話でしうが－－  
まあ、結局なんだかんだあつて行つたけど」

みくはテーブルの上にあつたタルトの苺に、フォークをざくつと突  
き刺すとそれを口の中に入れた。

なんだらう？－食べるだけなんだけど、ちよつと怖い。

「もしかして、さつき言つてたパシリにされたつてその事？」

「そうよ。あんた寝起きに飲んだでしょ？ちなみにあんときアタシ  
が食べてたアイス、あれあいつの奢り。アタシの分も買つてきて良  
いって言われたから」

「ええっ！？あれ海の奢りだったの！？」

【写眞部の部屋で田を覚ました時、みくがペットボトルを渡してくれた。

寝起きだつたからか、すつゝく喉乾いて美味しかったから覚えてる。

まさか、あれが海の奢りだなんて……

てつきりみくのお奢りだと思つてた。だつて「お金払つよ」って言つたら、「奢りだからいい」とて言つてたんだもん。

後で海にお礼言わなきや。

「最初はあいつがなんで桜音を気にかけるのかわからなかつた。でも部屋に行つてから、あいつが桜音の事を好きだつてわかつたのよ」

「どひし

「ただいま

どひじて～と聞こいつとしたんだけビ、玄関先から聞こえてきたその声に血の氣が引き、言葉が出なかつた。

「なんか今の声つて……」

「じめん！～ちよつと待つてて～！」

なんで！？なんで帰つてくるの！？

まだ部活中のはずなのに、海が帰つてきてしまつたよつだ。  
こうなつたら少しだけどつかで時間つぶしてもらひうか、二階に上がつて貰おう。

そう思つて慌てて立ち上がつた瞬間、足に激痛が走つてしまつた。

「ちょっと大丈夫！？」

右足を押さえてしゃがみ込んでしまつた私を見て、みくは慌てて私の傍まできてくれた。

「……平氣」

「平氣じやないでしょ！～あんた捻挫してんのに、普通に体重かけ

て立ち上がるなんて「

痛い。痛いけど、海がここに来ちゃうかもしない。  
なんとか玄関に行かなきや。

そう思つて、もう一度立ち上がりつとした時だつた。

リビングのドアが開かれたのは

## 第十七話 他人には見えて自分には見えないもの

「桜音」

「は、はいっ！！」

みくに呼ばれ、思わず体がビクつく。

だって怖いんだもん……

目の前のみくは、腕を組んだまま般若のような顔でこっちを睨んでいる。

「説明しろ。なんでこの男がただいまって言いながら、家の中入ってきたのよ？」

「あの、その……」

「桜音……」

どう話せばいいのかがわからず、うまく言葉を発することが出来ない私にイラついたのか、みくはさつきより強く私の名を呼んだ。

ど、どうしよう！？みくに海との同居バレちゃったよ……

海にみくが来たことを言いに行こうとしたんだけど、その前に海がリビングに入ってきたのだ。

ここはなんとか誤魔化すべき？

いや、もう誤魔化せないから正直に言つべき？

どうしたらいいのかわからず、視線で海に助けを求めた。

すると海はその視線の意味にわかつてくれたのか、口を開く。

「大体想像出来ていてると思うが、俺と桜音は一緒に住んでいる」

「海は私の肩に手をかけると、みくに説明し始めてくれた。

だが、それを聞いてみくが顔を顰めてしまう。

「桜音バカになんか聞いてない。アタシは、桜音に聞いてるんだ」

「状況を説明するなら、別に俺だつたいいだろ」

「あんた、桜音バカは否定しないの？」

「自覚があるからな」

「でしようね。だつたら、黙つてな」

「だからなんで俺じや駄目なんだ？これは俺も関係あるだろが」

「アタシは桜音に聞いてるの。あんた桜音じやないでしうが！！」

「みくは烈火の如く怒りまくし立てている。一方、海は流水のごとくそれを流す。

温度差のある二人だ。

「か、海。私が話した方がいいみたいだから、話してもいい？」  
「このままじゃ埒があかない。」

そう判断して、私はみくに自分の口から説明する事にした。  
「じゃないと永遠に二人の口論が続きそんなんだもん。」

「大丈夫か？」

「うん」

海に笑顔で返事をすると、深呼吸し、向かえに座るみくを見つめた。  
若干、口元がひきつるのは仕方ない。

「あのね、お父さん達が海外に転勤になつたのは、みくにも話した  
でしょ？その時日本に残る条件を出されたの。それが、海と一緒に  
住むこと。なんか女の子の一人暮らしは危ないからだつて。海もち  
ょうどお家の関係で一人暮らしをしようとしてたから、ちょうど良  
いタイミングだつたの」

「……ねえ、桜音。それはそれで危なくないかと思うのは、アタシ  
だけか？こいつ男だよ？」

「私も最初思つたけど、海は大丈夫だよ。ねつ？」

私が海に同意を求めるが、みくは海に憐れんだ視線を向ける。

その視線を受けた海は「放つておいてくれ」と言い、ぱつが悪そう  
に顔をそむけた。

「『じめんね。事情が事情だから、言えなかつたの』

「別に良いわよ。正直、話してくれなかつた事については少しムカついてる。でも、アタシも桜音の立場ならきっと言えなかつたからしちゃうがないとも思う。だから、気にしないで」

黙つてた事怒られるかな？って思つてたのに、みくはあつさうと受け入れてくれた。

「ごめんね、ありがとう。みく。

「……で、在原海。あんたほんと巧くやつたわね。外堀から埋めるなんて。これは作戦勝ちなの？」

みくは残つていた一口分のタルトを口に頬張ると、海に向かつてそう言った。

「勝ちかどうかはまだわからない。ただ、桜音が『境界線』の中に入つてくれたのは確かだ。少し無理やり感があったのは、否めないが」

「境界線？ああ、『あの話』あんた知つてんの？」

「耳に入つて來たからな」

「ふうん。で？いつその結果がわかるのよ？」

「近々」

「そう。ヘタレも覚悟決めたつてわけ」

「ヘタレって言つな。慎重つて言え」

みくと海の会話に、私は首を傾げる。  
ほとんどの会話が意味不明だ。

なんか、置いてけぼりつて感じがするよ。

だって、一人の話ちつともわかんないんだもん。

そりやあ私が知らない海の事を、みくが知つてゐる事もあるのは当たり前だ。

もちろん、逆もある。

でも……

頭ではわかっていても、焼きもちを妬いてしまう。

こんな風にみくと話してゐる海を見てるだけなのに。

焼きもちだけじゃなくて、自分に対するコンプレックスとかも含  
わさつて不安もある。

みくは美人で大人っぽい。

よく町で声掛けられるし。

海だって、そんなみくの事好きになるかも知れない。

そしたら勝ち目なんて全然ない。

人と比べるのは良くないし、きりがないと思つても比べちゃう。

性格なのかな……？

涼には「桜音には桜音のよさがある」って言つたけど、そんなのわか  
んない。

前に日下部君に「自分に自信持つて、ちゃんと海に気持ち伝える」  
って言われたけど、  
どうやつたら自身つて持てるんだろう。



## 第十八話 そのメールは

うわ～。カラフルなティベアだ。

ゆつたりとしたカントリー調のBGMを聞きながら、私は目の前のウッドタイプの棚に飾られているものに目が釘付けになっていた。それはレッド、ブルー、イエロー、ホワイト、グリーンの五色のティベア。

それぞれのティベアの首にはリボンが巻かれ、胸の前に抱えるようにして本を持っている。

このお店オリジナルかなあ？

私はそつと、そのティベアに手を伸ばす。

ここは、aliceっていう雑貨屋さん。

駅からかなり歩くんだけど、品ぞろえが多いためか店内には結構人が多い。

今日は海の誕生日のプレゼントをみくと買いに来たついでに、何か良いメッセージカードがないかな？って思つてここに覗きに来たのだ。

「メッセージベアにするの？」

「え？ メッセージベア？」

首を傾げ隣りに居たみくを見つめる。

みくはボヘミアンタイプの白チュニックに、茶色のショートパンツという格好をしていた。

「知らない？この付属の本にメッセージが書き込めるようになつてんのよ」

みくはそう言つと、ティベアの持つていた本を抜き取ると私に見

せる。

すると本だと思つていたそれは、メッセージカードのようなものになつていた。

へへ。一見すると本なんだけど、そのメッセージを書く所以外開けないようになつてるんだ。

「……まあ。あんたの場合、赤だけね」

「え？ なんで？」

「これにはそれぞれテーマがあんのよ。たとえば、友情ならこの縁。お腹を押すと……」

みくがクマのお腹を押すと、「みんな仲良し。みんな好き」と機械的な子供の声が聞こえてきた。

どうやらこのテーマはテーマ」との何かをしゃべるみたい。

「赤は恋愛。『好き好き、大好きー』って言つりしよ。いいじゃん、じれ在原に。ちょうど、メッセージカード買いに来たんだしさ」

たしかにメッセーゼカードを買いに来たよ？  
でも、これを渡したら、私の気持ち気づかれちゃうじゃんか！！

「ほら、あんたはこっち」

「あ」

みくは私が持つていたグリーンのティベアと棚にあつたレッドのティベアを交換してしまつた。

「もつと、みく！――」

「いいじゃん。桜音が告れないなら、このクマにしてもらこなよ？  
ほら、タグにも『キミの想いをボクが代わりに届けるよ』って書いてあるんだし」

ティベアに着いていたちょっと大きめのタグを私に向ける。

するとたしかにそこには、『キミの想いをボクが代わりに届けるよ』とクマのイラスト付きで書かれていた。

告るなんて私には無理だもん……

私は棚にティーベアを置くと、まだ何か言つてゐるみくを置いて、メッシュカードのコーナーへと向かおうと足を踏み出す。

その時だった。

私の携帯が鳴りだしたのは。

「やばっ」

この着うたはメールだからすぐ元切れると想つけど、店内には他のお客様さんもいるから迷惑になっちゃう。

急いでカバンから出してキーを押し、大ニュースといつタイトルがつけられたメールを開いた。

「……え」

時すでに遅し。

後悔しても仕方がないのはわかっている。

でも

送付者は友達からで、『大ニュースだよ。なんどあの王子様に、彼女がいるらしいよ！…さつき西公園で見つけて激写しちゃった』という文章だった。

何これ……

友達は私が海の事を好きな事を知らない。

だからたぶん、噂話といつか、『シップ感覚で送つてきただと思う。

震える手で添付ファイルも開くと、そこには腕を組み微笑んでいるカッフルの画像が出てきた。

それは海と知らない綺麗な女人の姿だった。

## 第十九話 真相は本人に聞かないとわからない

世の中には似ている人が三人はいるっていう。  
だから私もそんな淡い思いを期待していたんだ。  
ほんのわずかの砂粒ぐらいのものだけど

私はピンク色の携帯画面をじっと見ている人を、テストの答案用紙が返却されるのを待つように、やや強張った面持ちで見ていた。  
その人は紫と白のタンクトップを重ね着し、迷彩のカーゴパンツといつ姿で、ソファに座っている。

携帯を見ている人 日下部君は、ほんの三・四秒ほど画面を見たかと思うと、すぐ携帯をこっちに返してきた。

「そんで、どうなのよ？」

静まりかえったリビングの中、隣りに座っているみくの声がやけに響く。

その催促を聞き、日下部君が口を開いた。

でもそれはほんのわずかな希望を否定する言葉だった。

「海だろ」

やっぱ、海なんだ……

日下部君の言葉に私はうな垂れながら、受け取った携帯の画面を見た。

そこに映し出されているのは、腕を組んで微笑みあつてているカップル。

外国の女の人がプリントされたTシャツに、ブラックデニムという格好の海と、

グラデーションのかかった白と緑のマキシ丈ワンピースに、麦わら

## 帽子姿の美女。

綺麗な女のは、海の腕に絡まる様にして腕を組んでいた。  
すつごくお似合いな一人。

それはきっと、他の人が見ても思つかやうはず。

「双子の兄弟とかじゃなくて！？」

「いや、これどっからどつ見ても海だろ。つつか、あいつ一人っ子  
だし」

「じゃあ、何？あいつ、桜音の事諦めて他の女と付き合つてんの！

？

テーブルから身を乗り出し、田下部君の襟元を掴み上げ詰め寄つてしまつたみくを、私は慌てて止めに入った。

「みく！…

そんなみくをなんとか落ち着かせようとすると、なかなか上手くいかない。

すると、田下部君が「あー、うぜえ」と言いながら、自力でみくの手を掴んで引きはがした。

「あいつが逢月の事諦めるわけねえだろ！…お前だつて知ってるだろうが」

「知つてるつうの。だから信じられないのよ。アタシが桜音に抱きついたりしただけで、あんな視線向けてくるような独占欲の塊みたいな男が、他の女と楽しそうにしてるなんて。何か弱みでも握られてんじやないの！？」

「かもな」

……え。

私とみくは、その言葉に思わずお互い目を合わせてしまった。

「何、マジなの？」

「なんこと本人に聞かねえとわからんねえよ。ただ、この女と海がそ

ういう関係じやねえって事だけはわかる

「あんた、この女が誰なのか知つてんの？」

「ああ。」Jの女は、白石彩しらい。お前ら、白石病院しらいびょういんつて聞いた事あるだろ？」

「うん。たしか、『日下部病院』と並ぶぐらい大きい病院だよね」  
白石病院も日下部病院もこのあたりでは、有名な大病院。  
だから知らない人なんていないはず。

「こいつは、そこの人娘だ。顔は良いが、性格がものすごく最悪。  
まあ、甘やかされて育ったのか、すっげーわがままなんだよ。けど  
最近なんか好きな奴が出来たとかで、少しづつまともになつて来て  
るけどな」

「まさか、それが在原海の事！？」

みぐの声がうるさかつたのか、日下部君は一瞬眉を顰める。

「……違えよ。なんか、どつかの美大生。一回見た事あんだけ、  
すっげー冴えねえ奴だつたような気がする。つうか俺なんか呼び出  
すより、海本人に聞けよ」

「それが、電話もメールも送つてんのに返事返つて来ないのよ」「  
「なんだよ、アイツ気づいてねえのか。とにかく、あいつに聞かね  
えとわかんねえんだよ」

海が家に帰つて来たら、ちゃんと聞いてみようかな。  
もしかして、日下部君の言う通りかもしれないし。  
でも、もし彼女とかだったら

そんな事が一瞬頭をかすめ、思わずスカートの裾を握つた。

「つうか、腹減んねえ？ピザでも頼もうぜ」

「あ」

そうだった。

すっかりこの騒ぎで忘れちゃつてたけど、私たちまだ夕飯食べてな

かつたんだっけ。

時計を見詰めると、七時半だった。

食欲ないけど、みくと日下部君はきっとお腹すいてるよね。

「じめんね。今、ピザ屋さんに電話を……」

慌てて立ち上がりとしたら、急に視界が闇に包まれてしまった。  
うそつ。停電！？

「最悪。停電じゃん。桜音、懐中電灯かロウソクある？」

「う、うん。ちょっと待ってて」

まだあまり時間が経っていないから日が慣れてないため、あまり見え  
ない。

たしかテレビ台の近くに懐中電灯が……

「テーブルとか気をつけなよ」

「うん。大丈……」

私の返事は鈍いガシッといふ音のせいいで途中で途切れてしまった。

「 」

もう声にならない。

「おい、大丈夫か？」

日下部君の声が耳元で聞こえてくるが、大丈夫じゃない。  
正直、痛すぎる。

スネと小指をテーブルにぶつけたあげく、バランスを崩して倒れて  
しまったのだ。

だが幸いなことに、倒れたのが日下部君が座っていたソファだった  
ため、私は何とか抱きとめられた。

日下部君を巻き込む形にはなったけど。



## 第一十話 ファーストキス騒動 はじまり

も「うひょ」と早く電気点いてよ……

さつきまでは暗闇の世界だつたのに、いまではすっかり光が戻つて来て、テーブルや観葉植物のある場所まではっきりとわかる。

ちょうどタイミング良く、私がバランスを崩し日下部君に倒れ込んだ所で停電が復旧し明かりが点いたのだ。

でも良かった。

日下部君が抱きとめてくれて。

じゃないと、テーブルとかに頭ぶつけたかもしれないもん。

ただ、日下部君を押しつぶしてゐみたいな感じでちょっと申し訳な  
いけど。

「桜音、大丈夫！？」

「うん、平氣」

もぞもぞと動き、顔を日下部君の鎖骨あたりからみくへと移そつと  
している最中、ちょっと気になるのを見つけてしまった。

それは右鎖骨にある、ほくろ。

斜めに三つあつて、普段は気付かないぐらいの大きさだけど、この  
ぐらい至近距離だと見える小さいもの。

あれ……？これ、どうかで見た事あるような……

「おい、逢月。怪我とかねえなら、さつわと遇け」

「え。あ、うん。」こめんなさい

きつと氣のせいだよね。

そう思い深く考えず上半身を動かし日下部君から離れる。

そしてピザ屋さんに「リバリーを頼むために、電話のある部屋の隅

へと移動した。

「漫画とかだと、」いつの時つて弾みでキスしちゃつてたつう事あるじやん。ほら、事故チューみたいな」

「縁起でもねえ事言うんじゃねえ。そつなつたら、俺の身が危ねえだろ！！」

何で身が危ないんだる？？

私は首を傾げながら、聞こえてくる田中部君とみくの会話に首を傾げた。

「は？ 何マジで返してんの？ んなこと、實際にあるわけないじやん」

「それが實際あんただよ。中学の時、坂上公園の階段で。歩いてたらヤンキー達に絡まれてる奴がいてよ、そいつが足滑りせて落ちてきたのに巻き込まれちまつたんだよ」

……え。

「へへ。そんな事、本当にあるんだ。まさか、あんたそれがファーストキスとか？」

「んなわけねえだろ。でも相手がそうだったらしくよ、泣かれちまつた」

「ちょっと待つて。それって、何か……

その話に心当たりがあつた私は、思わずぱぱ屋さんの広告を探す手を止めた。

\* \* \*

私のファーストキスは、いわゆる事故チューってやつ。

中学一年の秋、お母さんに頼まれて学区外の北区にある、お兄ちゃんの家に行く途中だつた。

その時暗くなつてきたからつて、近道がてらに坂上公園を通つたのが運が悪かったんだと思つ。

私はたまたまそこにいた不良の人達に目を付けられ、追いかけまわされてしまったのだ。

そしてさらに運が悪い事に、逃げる途中で階段から足を滑らし落下してしまつた。

そっからば、漫画とかで良くあるパターン。

転げ落ちる時に、人を巻き込んでしまい一緒に転げ落ちてしまつたのだ。

顔はあまり覚えてないんだけど、その人が金髪に学ラン姿の男の子と言ひ事だけは覚えている。

その男の子も私も幸いな事に大きい怪我とかはしなかつたんだけど、二人倒れ込んだ弾みでその時に事故チューしてしまつたのだ。

ただでさえ巻き込んでしまつて悪い事をしたのに、私つてばその時ファーストキスだつたから、号泣してさらに迷惑かけまくっちゃつたんだよね……

あ～、なんかだんだん思い出してきた。

その後その子が不良を追いかけてくれて、田下部病院に連れて行ってくれたんだつけ。

なんか頭とか打つてるかも知れないから、一応念のためだつて言って。

そう言えば、今思つとすつゝ面倒見が良かつた人だつたよつた氣

がする。

お兄ちゃん達に電話して呼んでくれたし、迎えくるまで傍に置いてくれたし。

あれ？ その子名前なんだっけ……

何とか思い出そうとするけど、私の記憶じゃ無理みたい。

ただふと思い出したのは、検査を担当してくれた女医さんとの事を「姉貴」って呼んでた事。

検査中とかその女医さんと話した時、こここの病院の娘さんって言ってたから、日下部病院の「令嬢って事は確かだよね。

あれ？ って事は、その男の子も日下部病院の関係者って事じやん。

……ん？ 日下部病院？

辿り着いてしまった答えに気をとられ、手から広告がするりと抜け床に散らばるよつて落ちる。

もしかして

「ねえ日下部くん……私のファーストキスって、もしかして日下部君なの！？」

そう叫んで日下部君とみくの方を振り向いた瞬間、言つた事を後悔した。

だって私の視界にはソファに座つて口をぽかんと開けている日下部君とみく、それからドアに手をかけたまま目を大きく見開いている海が映し出されたから。



## 第一十話 ファーストキス騒動 終結？

「桜音のファーストキスがお前だと……！？」

咲く様に言った海の言葉を聞いて、私は思わず頭を抱えたくなった。

や、やばい。完全に聞かれちゃったよ。

でもあれは事故ちゅーだつたし。

消毒とか言わないよね……？

前回の「罰と消毒」の件を思いだし、思わず頬に熱が集まってしまう。

だがそれと同時に、外国の女の人がプリントされたTシャツに、ブラックデニムという格好の海を見て、やっぱり送られてきたのは海なんだつて思つてしまい胸が痛んだ。

「どうこうことだ」

低く唸るような海の声に、日下部君の大きな体がびくつく。

「ちょ、待て！…俺は、何も知らねえつうの…！」

「なら桜音が嘘ついたつていうのか」

「は？ なんこと知らねえし！…つか、俺マジ身に覚えねえんだよ」  
なんでこんな緊迫した状況になるの…？

胸倉を掴まれ責めた日下部君に、眉がつりあがり鋭い眼で睨んでいる海。

とにかく、止めなくつちや…！

「え」

止めるために海達の元に駆け寄り海の腕に触れるが、私はそのまま動けなくなってしまつ。

それはふわりと漂ってきた甘つたるい香りが原因だった。

もしかして、あの女の子の香水？  
頭に浮かぶのは、あの「与メの映像。

「嫌いっ！！」

気が付いたら、海から離れてみくの背後に隠れちゃっていた。  
ギュッとみくの服を握りしめながら、唇を噛みしめる。

「どうしたのよ？」

「あの匂いやだつ」

「は？匂い？」

あの香水の香りが嫌なんじやない。

あの女の子の香りが海についたのが嫌。

……うう。もしかして嫉妬深いのかな？私。

「あ～、だそうだ在原海。桜音が嫌なのは、その甘ったるい香りなんだつてさ。だから嫌われたとかじやないから、そんな死にそうな顔する事ないんじやない？」

は？死にそうな顔？

ちらつと海の様子を伺おうとしたけど、海がものすごい勢いでドアの方へと走り去つていってしまったのでそれを見る事は出来なかつた。

\* \*

\*

「やつあは心臓が止まるかと思つた……」

それはこゝちの方なんですけど……っ!!

和は海に育てられた者たるが故に、海の胸の上に座らせておられる。

つていうか、みく達いるのにっ！！

「何を大げさな事をつて、あんたの場合は言えないわね。」  
桜音バカ  
だから

……なんでもみくも田下部君も普通にしてんの?

二人とも私と海が座るソーテの反対側は座っているけど  
何事もな  
いようにしている。

「もう香水の香りしないだろ」

「うん」

それはしない

海はあの後シャンハイを落しに行つたらしい

ちゃんと拭かないと房でてきたから髪とか濡れたままだしTシャツには張り付いているしで、最初「雨に振られたの？」って感じの格

今はちやんと髪も乾かして濡れていらない新しい服に着替えて貰つて  
いる。

「なあ桜音。桜音のファーストキスの相手が日下部なんかって本当なのか？」

「な  
の  
か  
?」

「おい。なんかってなんだよ。」  
「うか、そもそも身に覚えがねえって言つてるだろうが」「

「うん。その事なんだけど、実はね……」

L

私は中学の時自分の身に起った事を全部話した。

不良に絡まれた事や階段から落とした事を話している時など、時々  
私に回されている海の腕に少し力がこもる時があつたけど。

「それで、お前は身に覚えがあるのか？……って聞くまでもなさそうだな」

海はため息を吐くと日下部君を見た。

日下部君ってポーカーフェイスとか苦手みたい。

もう、完全に目が泳いでいる。

「だから事故なんだよ……事故」

「それはわかった

「は？マジで？んじゃあ、お咎めなし？」

「咎め？なんでそんな事する必要があるんだ。お前が、いなければ  
桜音が大怪我していたかもしれない。むしろ礼を言つよ」

海は日下部君にそう言つと、「無事でよかったです」と言いながら私の  
頭を撫でた。

よかつた。これで全て丸く収まつたみたい。

なんて安堵してたけど、数時間後みく達が帰つた後このリビング  
に私の叫びが木霊する事態になるなんて知る由もなかつた。



## 第一十一話 甘い夢を

静まりかえったリビングの中、テレビのバラエティー番組だけが流れている。

それは11時からあるやつで、私が毎週楽しみにしているやつだ。通常ならソファに座り見てはいるはずなんだが、見ることができないなぜなら

「ダメっ！－！」

「なんで？」

「ダメなものはダメなのっ！－！」

そう言つて逃げよつと思つても、後方を壁、前方を海、そしておまけに左右を海の両手によつて行く手が阻まれてしまつて逃げられなり。

もう。こうなる事がわかつてたなら、日下部くんとみくに泊つて貰つたのに－！

「だつてあれば事故チューだもん」

「ああ。それはわかつてる。でも、触れたんだり？」  
いや、触れた事は触れたけど。

つて、唇指でなぞらないで－！

私は海との攻防戦を繰り広げているため、テレビを見る事が出来ない。

あれはキスじゃないから消毒なんて必要ないのに、海が「消毒するつて言つて聞かないのだ。

「俺じや駄目か？」

その問いに私は首を振る。

駄目じゃない。

だつて私は海の事が好き。海とならキスしたいって思つ。でも最初が事故チューで、次が消毒なんて嫌だもん。だから今度はちゃんとキスしたい。

「あのね、海がダメとかじゃなくてちゃんとしたいの」「ちゃんと?」

「うん。最初が事故チューで次は消毒なんて嫌なの。だからね、ちゃんと海と普通にキスしたいの……って、海聞てる?」「海の様子がおかしい事に首を傾げ海を見つめる。

すると海は口元に手を当てて顔を真っ赤にさせていた。

海の視線の先には、私がいるけどたぶん私の事を見てないと思つ。なぜなら、海の目の前で手を振つても何の反応もしないから。どうしようか考えると、ふいに携帯が鳴つた。

この着うたは海の……

それは、海が好きな海外のアーティストの曲だつた。

「ねえ、海。携帯鳴つてるよ」

服を引っ張りながら言つけど、何の反応もしてくれない。もーっ。緊急だつたらどうするのよ。

私は海の元を離れ、テープルの上にある海の携帯を取る。するとディスプレイには、『白石彩』と映し出されていた。これつて、海と公園で腕組んでいた子だ……

そういえば私、まだ海とこの女の人の関係聞いてない。

ファーストキス騒動のせいで、私はまだ海とこの女の人の関係について聞いてなかつた。

手の中の携帯はまだ止まず、今も私の手の中で鳴り響いている。

電話に勝手に出る訳に行かないのはわかつていいけど、気になってしまつ。

「桜音……それは俺とキスしていにって言つ意味なのか！？」

ぼーっと携帯のイルミネーションを見ていると、海の叫ぶような声が聞こえてきたので振りかえる。

すると海が左右を見回して私を探していた。

「あれ……？ 桜音がいない……」

後方にあるから、死角に入つていて見えてないらしい。

「ひつちにいるよ。あのね、白虹彩さんから電話

私は海の傍に行き、携帯を差し出す。

すると海はその名前を聞くと、眉を顰めた。

海は私から携帯を受け取ると、携帯を切つたのか曲が止む。そして携帯をソファに放り投げた。

「でないの？」

「今はそんな事より、さつきの事だ。桜音。あれば、俺とならキスしてもいいって事なのか！？」

その問い合わせ返事は決まつていて。

私は「クンと首を縦に動かした。

「海じやなきやいや……」

いまちよつと顔見られたくない。絶対ゆでダコ状態のはずだ。

私はそれを隠すために海にギュッとしがみ付く。

すると、私の体に海の腕が回され抱きしめられる。

そして海は耳元で囁やいた。

それは甘さを持った言葉。

「

桜音。好きだ

## 第一十一話 桜音だけ

『好きだ』その海の言葉に一瞬何もかもわからなくなつた。時間も言葉を発する方法も。

ただ一つだけわかる事は、私と海の鼓動の音だけ。

それはざらざらの音かわからないぐらに溶け合つていた。

「……ほんと?」

やつと出たのは、すぐにでもかき消されそうな声だった。

声が震えているように聞こえるのは、まだ現実に戻り切れてないからなのか、それとも本当に震えているからなのか。

「ああ、本當だ」

その言葉を聞き、海から体を離し顔をゆっくり上げる。すると海が穏やかに微笑んでいた。

これは現実だよね……?

まるで夢を見ているように、ふわふわと安定していないうだつて私だよ?

聖にも前に言われたけど、私は特別可愛くもないし、これと言つて何もない。

それなのに好だつて言つてくれているなんて

「こんな気持ち初めてなんだ」

頬に触れたぬくもり。それは海の大きな手。

いつも海に触れられると恥ずかしさで逃げたくなる。でも今はそれよりも心地よさの方が上回つてしまつていた。

「……釣り合わないよ」

「わかつてゐる。だが、ちゃんと桜音にふさわしこようにならねばならないから」

「違つよ。海がじゃなくて、私がだもん。私は愛海さんみたいに可愛くないし、みくみみたいにスタイル良くないから」

「なんでそこで愛海と佐々木が出てへるんだ？」

海は首を傾げた。

だって海はカツコイイし、頭も良いし。

私は何も持つてないのに

「桜音は桜音だ。俺は、桜音以外は何とも思わない

「じゃあ、白石さんは？腕組んで歩いてたもん……」

れつき電話も来てたみたいだし。

容姿的にも家的にも海と合いついた。

「違つ……あれば言つ事聞かないと桜音にバラすつて言つから仕方

なく、今日だけって約束で言つ事聞いたんだ……」

「私に何をバラすの？」

「うう。それは、その……」

海は「う」もじながら視線を泳ぎ始めてしまつ。

「とにかく、俺は桜音だけなんだ。信じてくれ

まるで捨てられた子犬のような顔をしている海と目があつた。

無言でそれを見ていると、眉を下げる海に「桜音……」といふ、すがりつぶやき的な弱々しい声で名前を呼ばれてしまつた。

「……うん。信じる

「ほんとかー? ありがと」

「えつ、ちょつ」

力いっぱいギュッと抱きしまられてしまつた。

なんか、子供みたいで可愛い。

私は、海の背中に手を回した。



## 第一二三話　みく的サプライズ

「　　んで？王子に告られて、それから？」

「え？終わりだけど？」

みくの言葉に首を傾げ、スプーンでジョーラードをすくつて食べた。  
うんっ！…お米のジョーラード初めて食べたけど、これおいしい。  
ゴマもおいしそうだつたけど、こつちにして正解だつたかも。  
おいしさに思わず頬を緩ますと、隣りから何やら不穏な空気が漂つ  
てきた。

「『え？終わりだけど？』じゃないだろうがー！しかもなに暢気に  
ジョーラードなんか食べてんのよー！」

急にそう怒鳴りながらみくはベンチから立ち上がる。  
えつ、なんで怒ってるの～？

私を見下ろしてこむるみくの気迫に、思わずジョーラードを持つ手が弱  
くなってしまひ。

「だつ、だつて昨日の事はそれで本当に終わりなんだもん。それに、  
ジョーラード食べたいって最初に言つたのみくだよ」

噴水の前を通る人たちが、不審そうにベンチに座る私達を見ている。  
「アタシが言いたいのは、んな事じゃない。なんで在原海に告られ  
たのに、そこで終わるのよ！？桜音も好きだつて言えれば良かつたじ  
やんか！…」

「だつて言つて恥ずかしいし、海じゃないとキスやだつて言つたん  
だよ？だから、わかつてくれるんじゃないかなつて思つたんだもん  
……。それこそその後、二人でテレビ見始めちゃつたし……」

「はあ！？テレビだと？」

え～と、みくさん？目が座つてるんですけど？

あまりの近迫に田をそらす。

「怖い。

「『テレビ』じゃないでしょ？ が……あんた達、一人して何やつてんのよ……せつかくの良い雰囲気なのに……」

「うひ、じめんなさい」

「あ～っ……ほんと『コレ』が……」

みくはカバンを『ごそ』とあさり、何かを取りだした。

それはみくの携帯電話だった。

ストラップはシルバーの蝶のモチーフのものがつけられ、本体はラインストーンで綺麗に『コレーション』されている。

「電話？」

みくはそれには何も言わない。

「あ。もしもし、アタシ。は？ 別に何もないわよ。桜音なら隣りでジョラード食べてる。……あんた前から思つてたんだけど、その桜音とアタシの態度の違についてどうなのよ？ ムカつくわね。……明後日、在原誕生日でしょ？ あ～、よかつたわね。桜音に祝つてもらえて。……『コレ』すんなキモイ」

本当にみくは海の事が嫌いじゃないの？

みくの話しか聞こえないため内容はよくわからないうれしうと思つた。

「あ～、も～うるさい。電話口で大声だすな。……いいのかな？ 切つても。まあ、アタシは別に切つてもいいんだけど？ そうね、さつわと要件だけ言つわ。桜音があんたの誕生日にキスをプレゼントしようと思つてるんだけど、迷惑かな？ って悩んでるのよ……」

「ん～……」

慌てて否定しようとしたが、先を読まれみくの手によって口を塞がれてしまった。

ちょっと待つて。本人が外野つておかしいでしょ！？

「マジで。……それで、あんたはもちろん迷惑じゃないわよね？……ちょっと、雄叫びあげんのやめてくんない？うつさいんだけど。……は？ 桜音に代われ？ 今いないわ。アイスが手について洗いに行つたから」

「おまえのことは、金語りやんとした言葉にならぬ。」

「じゃあ、切るわよ。……はいはい。わかってる。ちゃんと桜音の事見てるし、何かあつたら連絡入れる。はい、はい。じゃあね」  
みくは携帯を切ったのを確認すると、私の口から手を離す。

「良かつたね。王子、狂喜乱舞」

「……」  
「……」

カバンから携帯を出し、すぐ否定しようとしたんだけど、ディスプレイを見て首を傾げた。

「桜音、あんた携帯の充電切れてるの忘れてた?」

「残念う。かけられないわね」  
たしかに、私の携帯からはかけられない。  
でも

「みくの携帯貸してよー！」

「え。  
無理  
」

「なんで！？意地悪つ！！」

「意地悪つて酷いわね。とつととくつつけてあげよつとしたんのよ。いいの？桜音。あんた達両思いかもしれないけど、付き合つてないのよ？」

「え……」

「そうでしょ？あんた彼女でもなんでもないんだからたしかにそうだ。」

私達は付き合つてゐわけじゃない。

「彼女になりたくないの？」

「……なりたい」

「だったら、ちゃんと気持ち伝えなきゃ。そしてちゃんと、カレカノになりなよ」

「うん、わかった。海にちゃんと気持ち伝えてみる。でもさ、それとキスするのって何か関係あるの？」

「は？別にないわよ。ただ、おもしろいからこいつかなつて～」「みくつ！～

公園に木靈するのは、私の怒鳴り声。  
それを聞いてみくはただ笑つていた。

も～っ。家に帰つたら、ちゃんと海に誤解解かなかきゃ。

海だつて今頃絶対おかしく思つてゐはずだもん。

だって、私がそういう事言つわけないもんね。

みくが勝手に言つたことだつて普通考えればわかるはずだし。

そんな私の考えが安易なものだと、数時間後に思い知る事になる。

## 第一十四話 ちゅうと落ち着いて

ん~。今日の夕食ビーフシチュー?

たしか、冷蔵庫に海老とイカが少し残つてたよね。

他の材料もあるし、シーフードカレーにでもしようかな~。  
頭で今日の夕飯を考えながら、材料を取り出すために冷蔵庫を開けた時だった。

玄関の方でなにやら物音がしたのは。

それは音を変え、一いつ時に段々近づいてきた。

何か急ぎなのかな?

廊下を走る音に、私は首を傾げた。

玄関にはちゃんと鍵をかけておいたから、他人には開けられない。  
なのでおそらくこちらに向かっているのは海だと思う。

一端開けた冷蔵庫を閉め、廊下へと通じるドアへと向かった。  
緊急の用事とかだと悪いし。

ドアに手をかけようと腕を伸ばしたら「桜音つーーー」とこづけと共に、海によりドアが開けられてしまった。

入室してきた海は、バスケット部指定のTシャツビジャージ姿。

そして肩にはスポーツバックを背負つている。

今日練習試合つて言つてたから、買つたのかな?

その表情は何か良い事でもあったのか、海は極上の笑みを浮かべていた。

なんか、連都が欲しいおもちゃが手に入った時みたいな顔してる。

「なんでこんなに可愛すきやるんだーーー!」

「は?」

脈絡もなくいきなりガバッと海に抱きしめられ、急に視界が遮られてしまう。

なつ、何事！？

何度も抱きしめられれば免疫がつくんだろう。

未だになれないで反射的にジタバタと悪あがきをする。

そんな行動を起こしても腕の拘束は解けず、ただ体力の無駄遣いにしかならないとわかっているんだけど……

「桜音。俺、こんなに誕生日が楽しみなのは初めてだ

「何か欲しいものでもプレゼントして貰えるの？」

そうだとしたら、海のテンションが高いのも頷ける。

どうしよう。腕時計とかだったらダブっちゃうよ……

私は、海の誕生日プレゼントに腕時計を用意してしまったのだ。

腕時計なら、学校に行く時も路西さんのお会社に行く時も使えるって思つたから。

まさか、ここでそれって時計？なんて聞けるわけもないし。

「ああ、最高のプレゼントだ。桜音が俺にキスしてくれるなんて」

「え」

その言葉に表情筋達が動くのを辞めた。

ま、待つて。まさか……

「それってまさかみくから聞いた話？」

「そうだ。そんな事で悩むなんて可憐い。悩まなくてもいいんだぞ？俺はいつも大歓迎なんだからな」

ええっ！？なんでおかしいって思わないの！？

普通なら私が言つたんじやないつて気づくはずなのに、海はまったく気づいてない。

「あのね、海。その事なんだけど……」

「今年の誕生日は絶対に忘れられない。なんていつたつて桜音が祝つてくれる上に、最高のプレゼントまでくれるんだもんな。夢みた

いだ

どうしよう。なんか言ひにくくいよ。

こんなに喜ばれると、言ひのを躊躇つてしまひ。

みく、責任とつてみなーー！

## 第一十五話 五分前行動ならぬ、一時間前行動（前書き）

長いのでわけようとしたけど、分けれなかつた…  
今回ちよつと長めです。

## 第一十五話 五分前行動ならぬ、一時間前行動

「ねえ、本当にここでやるの？」

私は案内された部屋を見て、思わず一緒に来た日下部君を見た。

今日は海の誕生日パーティー当口。  
サプライズで海を驚かせるのに、一足先に私が驚かされてしまつて  
いる。

だつて、まさかパーティー会場がホテルのパーティールームだなん  
て

私が今いる部屋は、30人は余裕で入れるぐらいの広さ。

室内には、五人は座れる大きなソファが上座に置かれ、左右には花  
が生けられてある。その他に、端には数十個のイスや所々にクロス  
のかけられた丸いテーブルが数個設置されている。

日下部君の話ではこの後ここに、食事や飲み物が台車で運ばれてく  
るそうだ。

「他にどつか良いとこあつたのかよ？なら早めに言えって」

「違うくて。ここホテルだよ！！しかも、タホナロイヤルホテル！  
！」

ここは俗に言う高級志向の人達が泊るホテルとして有名なタホナロ  
イヤルホテル。

全国や海外にも展開している大きなホテルでランクもかなり高く、  
一部のホテル施設を除き、ほとんど会員制を用いている。

そのためまわりに何気なく飾られている、シャンデリアや絵画など  
調度品なんかきっと値段がそうとうするはずだ。

「あー。金の心配はすんな。パトロンがいるから

「パ、パトロンっ！？」

「……お前、今変な風にとらえただろ」

えへと。実は、はい。

だつて私の持つてるイメージそつなんだもん。

「 海の親父さんが払ってくれるんだよ」

「えつ。啓吾さんが？」

「ああ。それより、お前着替えて来いよ」

「え。やつぱり正装じやなきや駄目なの？」

「 そうだよね。こんなちやんとした会場のパーティーだもん。あ。でも私、海に正装してきてって言つてない。それに私自体も着替え持つてきてないよ。」

「いや、別に普段着で構わねえ。だが、お前だけは別だ」「なんで私だけ着替えなきやならないの？」

「お前も主役みたいなもんだろ。おい、凛。こいつのき

……つ

て、お前、まだ落ち込んでんのかよ？」

田下部君の視線の先には部屋の隅でしゃがみ込んでいる凛さんがいる。

どうしたんだね？

「凛さんどうしたの？」

私もしゃがみ込んで凛さんと向かい合つ。

「姫の……逢月さんの衣装に最初着物を用意してたんです。桜の姫ですものやつぱり着物でしそう。それなのに、私のせいで……」

「何かあったの？」

首を傾げて凛さんを見る。

すると、私と凛さんを影が覆つた。

どうやら田下部君がこっちに来たようだ。

「」いつが張りきりすぎた上に妥協しなかったから、着物がキロ単位にまで及んだんだよ。さすがにお前には重すぎると思つて却下したんだ。長時間だしな。そんなに落ち込むなら、別に重ね着なんてしなくてもよかつたんじゃねえのかよ

「駄目ですわ！！桜の姫とい

日下部君のあきれた声に、凛さんが急に立ち上がり声を荒だてた時だった。

ノックと共に、扉が開けられたのは。

あれは……

「啓吾さんっ！…！」

そこには、啓吾さん　海のお父さんが優しく微笑んでこちらを見ている。

私はその人の姿を見ると、駆け寄った。

「今日は海のためにわざわざあつがとう、桜音ひやん。それに、日下部くんに凛ちゃん」

「まあ。小父さま。わざわざ！」足労頂いて申し訳ありません

「仕事でこっちまで来たから、立ち寄つてみたんだ。本来ならゆつくつとお礼を言いたいんだけど、」めんね緊急事態なんだ

「どうかされたのですか？」

急に日下部君と凛さんの顔が引き締まる。

「……海がもう来てるんだ」

この啓吾さんの言葉に、私達三人は動搖した。

だって

「まだ待ち合わせ時間の一時間前ですよ？」

日下部君は携帯を出して、ディスプレイを見つめている。

「おー、逢月。お前ちゃんと一時つて言つたんだろうな？」「

「言つたよー！ 11時にロビーって

昨日、ちゃんと海に言つたもん。

海もちやんと「わかつた。楽しみにしてる」って言つたし。

「桜音ちゃんの言い間違えとかじゃないんだ。どうやら桜音ちゃんに祝つてもらうのが、かなり嬉しいらしく待ち切れなかつたみたい」  
そう啓吾さんは苦笑いで答えた。

「そうだとしても早すぎだな……一時間も前に待つて何してんだよ……」

「困りましたわね。ロビーから早々に移動して頂かなこと。他の方達がいらっしゃっては、バレてしましますわ」  
たしかに。知り合いと1・2人と会つても偶然で片付けられるけど、何かおかしい事に何人もだつたら気づくよね。

「じめんね。海を連れ出したいんだけど、僕も仕事があつてちょっと無理そなんだ。何気なく何処かで時間まで潰すようこつて言つたんだけど、もしかしたら桜音ちゃんがもしかしたら来るかもしけないつて」

「来るわけねえだろ。一時間前だぞ？ あいつはまつたく……」

日下部君が頭を抱え込んでしまつ。

「あのね、もう私下に行こつか？ そんで、海と2階のテラスでお茶して時間まで待つてるよ」

「そうですわね。それが一番得策かもしません。ですが、姫がこんな時間にいたら不審がりませんか？」

そう言われてみれば、そうかも。

「別にいいんじゃねえか。待ち切れなかつたみたいな事言えば。今あいつなら、なんでも誤魔化せる気がする。一応何かバレそうになつたら、逢月。お前が色仕掛けでもなんでもして誤魔化せ

「ええつー？ 仕掛けの色なんてないよー！」

「俺にはまったくわからないが、海には通じるから問題ない。とにかく、行け」

「う、うん」

プレゼントとかどうじょ。

でも後でここ来るよね。バックだけ持つていこうかな。私はバックを掴むと、扉を開けて海の元へと向かった。

## 第一十六話 変わったのは君のおかげ

その人はすぐに見付けることが出来た。

ロビーには書類を眺めているスーツ姿の人や、パーティー前なのかドレスを着た人達など結構人が多く座っていた。

その中から海をすぐに見つけられたのは、彼の容姿が良かつたからつて訳だけじゃない。

どうしたんだろう……？

私はその光景に首を傾げる。

だつて海は何度も携帯のディスプレイを確認したり、ロビーから見える正面入り口の自動ドアが開くのに一々反応しているんだもん。そんな不審な行動しているから、すぐに見付けることができたのだ。

「海、なんか落ち着かないみたいですね」

そんな海の様子を少し離れた所から見つめ、隣りに居る人に話しかける。

すると私の隣りに立っている人　啓吾さんの様子もおかしい事に気付いた。

なにやら笑いを噛み殺すのに必死になつて、右手で口に手を当てる。

それでも殺し切れなかつた笑いが漏れはじめていた。

「啓吾さん……？」

「ああ、ごめんな。あれが海なのかと思うと、ついおもしろくて」「えっ！？おもしろいですか？」

「うん、おもしろいよ。だつて、あの海があんな風にしているんだよ？親の僕でも信じられない。本当に桜音ちゃん効果だね。あ～、DVRカメラとか持つてないのが悔やまれるよ

そんなにおもしろいのかな？」

私にとっては、ただそわそわしているよつこじか見えないんだけど。  
私と啓吾さんは、海の元へと向かつた。

\* \* \*

やつぱり驚いちゃうよね。

白いTシャツにローワッペンのついた黒の半袖シャツを羽織り、グレーのチェックのパンツ姿の男の人は、後ろを振り返ったままの姿勢で固まっていた。

目を大きく見開き数回瞬きをしてくる。

「桜音……？」

海は私の名前をつぶやくと、携帯のディスプレイに目を向けた。

たぶん早く来すぎた私を見て、時間を確認しているのかもしれない。

「どうしたんだ？ 時間まだかなりあるよな？」

「君と同じで待ち切れなかつたんだって。だから早めに来ちゃつたんだよね？ 桜音ちゃん」

「え、あ、はい」

本当はパーティー準備で早めに来てたんだけどね。

海は私が啓吾さんの言葉に返事をすると、満面の笑みを浮かべ「桜音っ！」「呼びながら急に立ち上がり、両手を広げて私の方にその腕を伸ばした。

えつ！？

一瞬抱きしめられたって思つたんだけど、すかさず啓吾さんが私の肩を抱き体を横にすりしてくれたので抱きつかれずにするんだ。

た、助かった……

さすがにこの人がいつぱいいるロビーではかなり恥ずかしいもん。ほつとする私とは違い、海は不服そうだ。

啓吾さんを睨んでいる。

「何すんだよ。親父」

「ここにはロビーだよ。少しほは我慢しなさい。桜音ちゃんに迷惑がかかるだらっ」

海は啓吾さんの言葉にしぶしぶ手を降ろすと、今度は私の手を握つた。

「……これぐらいなりいいだら」

えつ！？これってカッフル繋ぎ！？

海とは手を繋ぐけど、こんな風に繋いだ事はなかった。些細な変化なんだけど、気にしちゃう。

「うん。微笑ましいと思つよ」「ねつ

啓吾さんはクスクスと笑つている。

「しかし、海は本当に変わったね。もちろん、良い方向じだよ？」

「ああ。それは自覚ある」

「だらうね。これも桜音ちゃんのおかげだ」

「え？」

「桜音ちゃん、ありがとう。君のおかげだ。前はまさか、こいつに一つ海が見れるなんて思いもしてなかつたからね」

「海、変わつたのかな？」

一緒に住む前つて、私あんま接点なかつたからよくわからんこよ。首を傾げる私を、啓吾さんは柔らかな目で見つめていた。



## 第一一十七話 パーティー開始

「ここか？」

「うんっ！！」

私は手を繋いでいる相手に対し、頷く。すると海は眉を顰めながら私から大きめの白い扉に視線を移すと、首を傾げた。

私達が立っている大理石に赤いカーペットが敷かれている廊下には、他にも数か所の扉が視界に入ってくる。

ついさっきまでテラスでお茶をしていた私達は、ここ5階のパーティー会場前まで来ていた。

予定時間より10分ぐらい早いけど、日下部君からのメールで「準備早めにしたから来い」との連絡がきちゃつたので問題はないみたい。

「桜音。こここの階は、パーティー会場ばかりなんだ。だから、ここもそうだぞ？」

「うん、知ってるよ」

「一体何があるんだ？」

「内緒。ねつ、早く開けて。開けて！！」

私は繋いでいた手を離すと、海の背中を押し早く開けるように促す。早く海の驚く顔が見たいって思うと同時に、少し緊張し始めていた。だって中にいるのは知らない人が多い。

その上、私はちょっと人見知りするタイプなのだ。

「……わかった。じゃあ、開けるぞ？」

「うん」

せかされるようにして海がゆっくりと扉を開けると、中には日下部

くんや凛さんの他に数十人の人達が立っているのが確認出来る。

ざっとみて、15人から20人ぐらいかも。

日下部と凛さん以外知らない人ばかりだ。

「海、誕生日おめでとうー！」

大勢のお祝いの言葉と一緒に、パンツという音と共に紙吹雪が飛んできた。

どうやらみんなクラッカーを手にしていたらしく、それを鳴らしたらしい。

海の反応はと「う」と想像通り。

視界に入ってきた景色に対し、海は目を真ん丸くし茫然と立つている。

大成功～！

そう思つたのは私だけじゃなく、室内にいた人達も同じだったみたい。

お腹を抱えて笑っている人や、お互いの両手を叩きあつている人などがいた。

「なんで、お前らがここに……？」

「喜べ。今日はお前の誕生日だろ？だから、俺達が祝つてやるうとわざわざ集まつてやつたんだ」

「もしかして、桜音も知つてたのか！？」

海はまだ取つ手に手をかけたままの体勢で、首を私の方に向ける。

「うん。ごめんね」

だつて言つたらサプライズじゃなくなつちゃうもん。

予想通り、驚いてくれて私的には嬉しい。

「さあ、海さんも逢月さんも中にお入りになつて下さい。みなさん、

主役もいらっしゃったので、さっそくパーティーを始めましょう

「

この凛さんの開始の声に、室内にいたみんなの歓声が聞こえてくる。未だ上手く飲みこめないのか反応が鈍い海の手を引いて、私は室内へと海をエスコートした。

どんなパーティーになるんだろう？楽しみ。

すっかりパーティーに浮かれていた私は、まさかこの後想像もしていなかつた状態に陥るなんて思いもしなかつた。

## 第一十八話 サプライズプレゼント

海の誕生日パーティーも中盤となりかけた頃。

パーティー会場にある五人は座れるような大きいソファ。

そこを囲むようにして、今回集まつた人達が全員集結していた。

みんなが注目しているのは、ソファに座つている海の手元。

それはシルバーの紙でラッピングされたノートぐらいのサイズの物体を、海が綺麗に包装をはずしているところだつた。

ただ今、みんなで海にプレゼント渡しタイム中なのだ。

用意されたテーブルの上には、今まで開けられたプレゼントの品々が並べられている。それは香水や、デジタルフォトフレームなど様々な品物が並んでいる。

ちなみに海が開けているのは、日下部君が海に送つたプレゼント。

この渡す順番は何を基準にして決めたのかわからんけど、司会進行役の日下部君によつて決められていた。

私の順番は日下部君の次でラストなんだつて。

日下部君、何を送つたんだろう？

みんなと一緒に、私も海の手元を好奇心に満ちた目でみていた。

少しずつ覆われた物が取られていき、中に包まれていたものが現れ始める。

……え。

完全に中身のえたプレゼントの品物に、私は思わず動きが止まつた。

「あつ、[写真集じゃん！！」

花柄のサロペット姿の女の子の声に、私はこれが現実なんだと改めて認識した。

赤いレトロ風なワンピースに黄色のベルト姿の女の子が、シャボン玉を膨らましている表紙。

これがただの写真集ならいい。

これは

「しかも、姫の写真集だ。可愛い」

「本當だ。すげえな、いつ撮ったんだ？」日下部

言わないで～っ！！

そう。この表紙の女の子は、私。

日下部君に頼まれて被写体の練習になつた時に撮られたものだ。

「返して…！」

海からとつ上げようとしたんだけど、海の方がすばやかつた。

私と対方の方に写真集を移動させたのだ。

その上、それを阻止しようとして身を乗り出した私の両手は海の左手によつて拘束されてしまつ。

「駄目。これは俺が貰つたんだから、俺のもの」

そんな事言われても、本人が知らない間に作られてたんだよ？

著作権侵害とかになると思うっ！！

「そんなもの燃やしてよ」

「何言つてるんだ。燃やすなんて勿体ないだろ。それにしても可愛いな。あの時これを撮っていたのか？」

海はソファに写真集を置き、右手でページをめくつていぐ。

その表情はどこか嬉しそうだ。

「ちよつ、見ちやだめだつてば！！」

あ～う、もうー！

こんなことになるのがわかつてれば、被写体の練習になんて絶対にならなかつたのに一つ！

## 第二十九話 ファーストキスは突然に

「おい、逢月。次お前だぞ。時間限られてんだからな  
ちょっと、日下部君。私に何か言う事ないの！？」

今度から先輩と遊ぶ時、絶対に声かけてあげないんだからねっ！  
私は日下部君を睨むと、しぶしぶ隣りに置いておいた紙袋を海に差し出した。

「お誕生日おめでとう、海」

「ありがとう」

紙袋の中身は、腕時計の入った小箱とそれから

「テディベア？」

海の手の中には真っ赤な本を抱えたテディベアがある。  
これは、あの時みくに教えて貰ったメッセージベア。  
私は自分の気持ちを、このメッセージベアに託した。  
念のために、説明がついているタグは外している。

「これってメッセージベアじゃん。しかも赤だし！  
「赤だと何があるのか？」

海はその言葉に首を傾げながら、テディベアを見つめた。

「は？もしかして、海知らねえの？」

「知らない」

「え～っ！？姫が赤のやつくれたのにー？」

どうやらここにいるほとんどの人は、メッセージベアの事を知っているみたい。やっぱ、多くの言つた通り有名なのかも。

「桜音。メッセージベアって何だ？」

「メッセージベアってそれぞれ色に意味があつて、その人の気持ちを代わりに気持ちを届けてくれるの」

「気持ち……」

「うん」

「そつか。じゃあ、これには桜音の気持ちがあるんだな」

「え」

私は海の行動に思わず固まってしまった。

なぜなら、海がテディベアを抱きしめ始めたからだ。マズイ。ボタンを押されると、しゃべっちゃう……！

「海っ！…だからそのテディベアとメッセージカードは、後で誰も居ない時に見て」

メッセージカードには誕生日おめでとうといつお祝いの言葉と、この間の海の告白の返事が書かれている。

「ん？ああ、わかった」

海がテディベアをテーブルへと移動させたのを見て、安堵の息を吐く。

「じゃあ、こっちの箱開けて良いか？」

「うん」

海は腕時計の入った小箱のリボンをほどき始める。よかつた。まさか、こんな大勢の所で『好き好き大好き～』なんてしゃべり始められたら、ちょっと……いやかなり気まずいもん。

「 なあ、こいつデベソじゃねえ？」

「は？」

田下部君の声に顔を上げると、田下部君がメッセージベアを持っていた。

「ちょっと、何してるの！？」

それデベソとかじゃなくて、ボタンだし。

「押しちゃダメっ！」

立ち上がり慌てて田下部君を止めようとしたんだけど、駄目だった。  
押しちゃダメといふと、押したくなる人間がいる。  
田下部君もそのタイプだったようだ。

「好き好き大好き～っ！！」

時すでに遅し。静まりかえった室内に、機械的な声が響く。

「逢月さん、大丈夫ですか……？」

凛さんが気をつかってくれているけど、大丈夫なわけがない。  
海には、一人で居る時に知らせたかったのに～っ。

「～、「ごめんなさい」

なぜかわからないが、居たまれなくなり謝ると、私は鞄を掴み脱  
兎の如く逃げ出していた。

\* \* \*

早く来てよ～！エレベーター～！

祈るようにエレベーターの上部にある数字を見た。  
数字は徐々に変わつていつていてる。

もう少し。

つて、来た。

エレベーターが開くと私はすぐに乗り込んだ。  
幸い中には誰もいない。

1のボタンを押し、閉のボタンを押す。

良かつた。これで助かつた。

閉まりかえる扉を見ながらそう思った瞬間、エレベーターが突然開いてしまう。

それは、誰かの手によるものだつた。

「ええっ！？」

開かれた扉の前に居たのは、海だつた。  
近づいてくる海から逃げるにも、ここは箱の中。  
海をすり抜けなければ、逃げ場はない。  
慌てふためく私に海は何を言葉をかける事無く、ただ私の唇を塞いだ

## 第三十話 カレカノ

い、今キスしたの？……！？  
感覚の残る唇に、指を這わせる。

ファーストキスのシチュエーションについていろいろ勝手に想像したけど、こんなシチュエーションは全く想像していなかつた。  
相手が海なら場所なんてどこでもいい。  
でも、いきなりすぎるよ～～！

「桜音。これ本当なのか？」  
「え？」

未だ真っ白な思考の中、急速に現実の世界へと戻されていく。  
海の手によつて田の前に差し出されたのは、小さめの本のよつなも  
の。

そこには『海へ お誕生日おめでとう。私も海の事が大好きです』  
とかかれていた。

これつて、あのメッセージベアのメッセージカードじゃん…！  
他の人見てないよね！？

キスされたかと思ったら、自分の告白カード……  
急激に動き出した物事に、何もかもがついていけない。

「桜音、ここに書かれているのは本当なのか？それとも誰かの悪戯  
か何かなのか？」

「はあ！？」

このメッセージ書くのに、すごく時間がかかった。

それはどう伝えていいかわからなかつたし、こういつ風なの書いた  
事ないから書くと書きすごく不安だつた。

それなのに、まさかの悪戯扱いつて酷い。

「もう海なんか知らないつ……！」

「デリカシーなさすぎだよ。

私は海の隣りをすり抜け、エレベーターから降りる。

「冗談じゃない。人が勇気出して書いたのに……」

「こうなつたら、みくに愚痴つてやるつ……！」

そう思つて携帯を取りだした瞬間、左腕を引っ張られ後方に倒れそうになつてしまつ。

「『ごめん、桜音。本当に』『ごめん。許してくれ』

耳元では、海のせっぱ詰まつた声が聞こえて来る。

私が倒れ込んだのは、床ではなく海の腕の中だつた。

ビーナスやら、私は海に後ろから抱きしめられていく感じ。

「酷いよ。悪戯とかつて……」「

「『ごめん。信じられなかつたんだ。まさか桜音が俺の事を好きだなんて』

「私が海の事好きなのかわかんないのに、キスしたの？」

「ああ。このカード見たら、何も考えられなくなつてつい。『ごめんな。出来ればエレベーターとかじやなく、ちゃんととした場所だつたら良かつたんだけど……』

「海とだから良いよ」

そう答えると海の腕の力が弱くなり、拘束がとれはじめる。

自由になつた体を、私はゆっくりと海の方に向かせた。

するとそこには、顔を真っ赤にしながらはにかんだ海がいた。

「俺の彼女」

いつもと違い、ちょっと浮かれているのか声が少し高い。

「えつ？ 彼女？」

私の言葉に対し、海のはにかんだ笑顔が凍りつく。

「彼女になつてくれないのか！？」

「なりたいよ。でもさ、その……」

付き合つて下さいつて言われてないもん。

私の言葉が小さくなつたのでわかつたのか、海は「ああ」と何か理解したようだ。

ほら、やつぱり言葉にしてくれた方がはつきつするじゃない？

「逢月桜音さん」

「はっ、はい」

急にあらためた言い方をされ、思わず姿勢を正す。

「大好きです。俺と付き合つて下さい」

「はい。お、お願いします」

「ひづらひそよろしくお願いします」

なんだか良くなきれないけど、お互い礼儀正しくお辞儀をしてしまう。

顔を上げると皿と皿があつてしまい、私達はつい思わず笑いあつてしまつた。

## 第三十一話 無理でしょ

「なあ、桜音。体、柔らかい方が？」

「え？ 堅い方……」

自慢じやないが、堅い。

前屈で手が床にまったくつかないぐらい堅い。

「みくは柔らかいよ。べたってくつつくもん」

私はバスタオルとフェイスタオルを海へと渡すと、その隣にしゃがみこんだ。

海の周りにはTシャツや歯ブラシなどその他にジャージなど、たまざまなものが置かれていた。

これは明日から始まるバスケ部夏の合宿の荷物。

4泊5日での泊まり込みになるため、結構大荷物だ。スポーツバックもいつものと違い、合宿用に使っている大きめのを

今回は使用するらしい。

「じゃあ、無理か」

海はその大きいスポーツバックを見つめながら、ため息を吐く。  
それは無理すれば、大人一人は入れるぐらいの大きさ。  
でも、かなり体柔らかくないと無理そう。  
そういうえば、こういうのに入る芸人さんいたつけ。

「何が無理なの？」

「桜音がここに入るのが」

え！？ 入るつて、まさかこのスポーツバックの中つー？

そんな事、考えるまでもないでしょうが！！

「も～つ。無理に決まってるでしょ」

「冗談だよ。こつそり連れて行きたいのは山々だけどな」

そりやあ、私だって一緒に居たいよ？

両思いになつたの、ついこの間の事だし。

夏休みだもん、一緒に出かけたりもしたい。

でも、部活はしようがない。

「四泊かあ～」

「ちよつ、海つ！？」

急に後ろから抱きしめられ、裏返った声が出てしまう。

た、体温が上昇していく～～～！！

顔が赤くなつていくのは自分でもわかる。

元々免疫ない上に、まだ口が浅いためこいつのに慣れていない。

「ひっ、荷造りしなきゃ」

「ん？ 後ですよ。今は、桜音」

つて、耳にキスしないで！！

なんか、お付き合いをしてから海のスキンシップが激しくなつていく気がする。

「桜音、こいつ向いて？」

海の拘束が解け、私はそのまま海の方向に体を向けた。すると、頬に手が添えられ海の顔が近づいてくる。

え、ええつ！？

田をギュウッと閉じると、やっぱりキスされた。

触れるだけのキス。

いろいろ経験のある海とは違い、それだけでも私の限界は超えてしまっている。

そのため、関係が進むのはかなりのスローテンポになるって事は明

確なこと。

それが不安だ。

だって、海に面倒とか思われそうで

「ほんと、可愛いな」

海は私の事をまた抱きしめると、ギュッとした。

可愛いって私が？思わず首を傾げた。

「四日も会えなくなるのか……」

「あつとすぐだよ。私も部活の合宿の時、あつといつ聞に過ぎたもん

「まさか、家庭部も合宿あるのか！？」

海は拘束を解くと、私の両肩に手を乗せ聞いてきた。

「え？無いよ。文化部だし。合宿は中学の時のやつ

「……良かった。桜音も合宿だと、またそれ違いになつてしまつか  
と想つた

「大丈夫だよ。中学の時、バスケ部で行つた合宿の事だから」

私はまた荷造りの準備を始める。

早くおわして海とゆつくりしたい。

「桜音は、バスケ部だつたのか～。以外だな、全く知らなかつたよ。女子の試合応援に行つたりした時あつたから、もしかして会つてゐかもな。

何か録画したやつあるか？DVDとか。桜音のプレイしているの見たい

「ん～。そういうロボロは無いよ。私、マネージャーだつたもん。あ、でも会場では海と会つてるよ。だって、うちの学校と試合したから

私は衣類を買っておいた圧縮出来るビールを数枚取り出すと、

半分を海に差し出す。

これって便利なんだよね。

荷物の面積かなり減るから、結構旅行行くときとか愛用している。

つて、海？

ビニールを海に差し出したんだけど、海は受け取ってくれない。  
これにTシャツ入れて欲しいんだけど……

「ちょっと待て。まさか、男バスのマネージャーだったのか！？」

「あ、うん」

あれ？ これって以外と知られてないの？

だから、男子バスケ部の人と仲良いんだけど。

涼が他校のメンバーと交流あつたから、私も自然に面識があるようになつていつた。そのためうちの学校の男子バスケ部の人達数人も、

先輩後輩関係なくその中学の時から面識ある人がいる。

「桜音がマネージャーか。良いな……」

海は何かを考えているのか、ぼーっとしている。

どうしたんだろう？

何か考え方でもしているのかもしないし、少し放つておこうっと。

## 第三十一話 お兄ちやん

あ～、やつぱ暑い。

「デパートから出ると、外の日差しが容赦なく私達を照らした。夏だから暑いのは当たり前なんだけど、今年は特に暑いよつに感じる。

室内ではクーラーが効いてたから、温度差のため余計そういう余計感じるのかも。

「連都。ちやんと帽子被つてる？」

「うん」

私は手を繋いでいる連都を見た。

連都の頭にはちやんと麦わら帽子が被つてある。

ちやんと熱中症対策はしておかないと。

水筒もちやんと鞄の中に入れておいて水分補給もさせてもらひだりの暑さじやちょっと心配だ。

「連都。具合悪くなつたら、ちやんと言えよ。熱射病とかなつたら大変だからな」

連都を挟んで左隣りにいる彼も心配だつたらしく、少し屈みこんで連都に話していた。

「うん。くー兄もね」

「おう」

くー兄」と、田下部君は連都の空いている方の手を握つている。

私達はさつままでこのデパートであつた恐竜展を見ていた。

本来なら私が連れて来る予定だつたんだけど、連都がどうしても「くー兄も一緒にいい」と言つて聞かなかつたのだ。

日下部君と連都が知り合つたのは、ついこの間。

私が連都を公園で遊ばせてたら、偶然会つた。

意外にも日下部君は子供好きらしく、連都とも口が暮れるまで遊んでくれた。

それはありがたかったと思う。

私も夏バテ中だったから、へろへろだったし。

でもその日から連都は何かにつけて「くー兄と遊ぶ」と言ひだすようになつちゃつて、連都が私と遊んでくれなくなつてしまつたのだ。プールに誘つても、「くー兄と行く」つて言つし。

連都は私の甥っ子なのにな!!

あまりの仲の良さに、ちょっと焼きもちを焼いてしまう。

「お前、海がいない間は連都の家にいるんだって？」

「うん。一人で平氣つて言つたんだけどね」

海は今、男バスの合宿のまつただ中。

そのため合宿中は私一人で家にいなければならぬ。

心配性の海は、それを酷く嫌がつた。

そのため私は海が合宿間、お兄ちゃんの家にお邪魔する事にしたのだ。

だつて最初、女性専用ホテルを取るつて言いだしたんだもん……

「海らしいな。あいつはお前のことを　　つと。連都どじつした？」  
急に手を引っ張られ、私も日下部君も連都を見た。

どじつしたんだもん??

「とーちゃんがいるの??!!」

「は? お兄ちゃん?」

連都が満面の笑みを浮かべ一点を見ている。

私もそこに視線を移すと、公衆電話の前に見知つた男がいた。

姿をはっきりと確認出来るぐらいに距離は近い。

「あ、本当だ」

仕事中なのが、携帯で話をしながらスケジュール帳を見ていた。黒髪の短髪に、営業だから外回りが多いせいか日に焼けた肌。

お父さんと同じ田元に鼻。

彼は逢月那智私のお兄ちゃんだ。

「あれ、お前の兄ちゃんか？」

「うん」

三人の視線に気づいたのか、彼は田線をじりりと向けるとほほ笑みを浮かべた。

だがすぐにその顔は厳しくなり、ある一点を睨んだ。

それについ早く反応したのはその視線が集中している、田下部君。

「……なんで俺、睨まれてんだ？」

「まあ、なんでだろ？」「..

私と田下部君はお互い顔を合わせて首を傾げた。

まさかこの後私と海の同居生活にピリオドを打つかもしれない出来事が起るなんて、

この時の私は知る由もなかつた。



## 第三十一話 あいつがじゅべる

なんでこんなに機嫌悪いのかなあー？

私は隣りに座つてお兄ちゃんを見つめた。

イラついているのか、左手の人さし指でテープルをトントンと叩いている。

その視線は反対側に座つて連都を抱つこしている田下部君に向かっていた。

もしかして連都が田下部君と仲が良いから焼きもち？

連都是子供用のメニューの写真を指しながら、「ぐー兄は何する？俺、ハンバーグ！…」とわざわざからずつと田下部君にかまいつぱなしだ。

一方がまわれている田下部君は、視線で私に助けを求めている。それは連都のことじゃなく、お兄ちゃんのことだ。

私はそれに対し手を顔の前で合わせて、口パクで「めんと謝る。

「ねえお兄ちゃん、お仕事はいいの？」

「昼休憩」

「そつかー。もしかして、みんなでお腹食べたいからここに連れてきたの？」

「違うだろーー！」

そうシッキミをいたのは、お兄ちゃんではなく田下部君。いや、うん。いくら私でもそれはないってわかってるよ。でもだって、場所と時間的にそつなかもしないって可能性も捨てきれないんだもん。

私達がいるのは、カントリー調のカフェ。

表の道路に面した場所にあり、お兄ちゃんは「顔貸せ」と田下部君

を近くにあつたここに連れて去られてしまつたため、私達も強制的に来ている。

「お前、ずいぶん連都に懐かれているな?」

あ～。やっぱりお兄ちゃん、焼きもち妬いてたんだ。  
うん、それはわかるよ。だつて連都つてば、日下部君ばかり構う  
んだもん。

席だつて一緒に座らうつて言つたのに、くー兄と座るつて言つし。

「……はい。こいつ可愛いですね。俺、大抵子供に逃げられるんで  
それは日下部君の顔が強面だからかもしない。

本人は子供好きで迷子の子とか見るとすぐに駆け寄るんだけど、「  
怖い」って泣かれてる。

最初何も情報がない状態だと、入つて外見で情報を得るもんね。

「当たり前だろ? が、連都は俺の息子だからな。そして、桜音は俺  
の妹だ」

「それ、日下部君知つてるよ。さつきちょっと説明したもん。ねえ、  
それより何食べる?」

私はメニュー表を広げ、お兄ちゃんにも見やすこようにな私とお兄ち  
ゃんの中間に置いた。

もしかしたら、お腹空いているから怒りやすくなつているのかもし  
れないと思つたのだ。

「私、Aランチのドリンクはアイスティーにする。みんなは?」

「桜音は少し黙つてなさい  
「え」

カフェに食事に来てるのになぜー?

私はしぶしぶメニュー表を片付けた。

「どこの馬の骨かは知らないが、上手く連都を手なづけたな。その調子に桜音との距離も縮めようと企んでいるだろ？が、俺の目が黒いつかはさうはさせない」

「……いや、俺は逢月の事別になんとも思つてないですって。それに、俺ちゃんと好きな相手いますし。ただ成り行きで連都共々面倒見ているだけで……」

「そんな事言つて、桜音のこと好きなんだろ？――」

「それは無いですって」

「本当か？」

「マジっすよ」

しつこいよ、お兄ちゃん。

お兄ちゃんは数秒日下部君を見たかと思つて、今度は私に視線を移す。

「桜音はこいつの事どう思つてるんだ？」

「え？ 友達だよ。何？ もしかして、私が日下部君を好きだと思つてるの？ あるわけないじゃん」

「そうか。じゃあ桜音がこいつの事好きとかこの男が狙つているとか、そんなんじゃないんだな。だよな、涼からなんの報告もなかつたしな」

「うん」

涼からの報告がよくわからないが。

「そつか。兄ちゃん誤解してたみたいだ」

「も～、なんでそんな勘違いしたの？ 大体私が付き合つてるのは、日下部君じゃなくて海だもん」

「そうか、この男じゃなくて海か。…… って海って誰だ！？ いきなり立ち上がり叫びをあげたお兄ちゃんに、室内の視線が集まる。

あれ？ 私何かマズイ事言つた？

お兄ちゃんに見降られ、きょとんとする私に、「空氣を読め……」  
ところ田下部君の言葉が覆いかぶせつた。

## 第三十四話 一人の秘密が知られる時

「桜音。兄ちゃんに黙秘権は使用出来ないってやつをから言つてゐるだろ。いかげんに海といつ男が何処の馬の骨なのか言になさこ」「いいからお兄ちゃん早く食べたり?せつかくのワンド冷めちゃうよ」

私は隣りにいるお兄ちゃんにそつと、オムライスを口に運ぶ。ん~。家で食べるときはケチャップだから、デミグラスソースが新鮮な感じがする。

今度うちで作る時も、デミグラスソースで作つてみようかな~。

「食べるがまづ答へなさい。海といつ男は何処のビニツなんだ」「も~、しつこい。お昼休み終わっちゃうよ~」

両親には海とお付き合いしている事を電話で報告済みだ。私は報告しなくてもいいって思つたんだけど、海が……

なんでもけじめとして必要だつて思つたらしく、アメリカに行つて直接私の両親に話すつて言い始めたのだ。

さすがにそこまでしなくていいって思つた私は、電話で報告するからと止めた。

あの時はなんとも言えない空氣だつたんだよね。

海が付き合つようになりましたつて話してくれたんだけど、お母さん大喜びだつたらしい。

いつまでもお母さんの騒ぐ声が漏れて聞こえてきたんだもん。

そんでお母さんは反対に、お父さんは絶句だつた。

海から電話変わつた時、「本当か? 桜音はうちの桜音か?」なんて

わけのわからない質問されたり、「涼君は知っているのか? 涼君はどうしてここ?」とかなぜか涼の質問をされたんだよね。

その時海と同居している事は「那智にバレるとつむたから、一緒に住んでいる事は内緒にしておきなさい」お母さんと言われかけたので言わない。

だから付き合っている事は内緒にあるつもりはないんだけど、あまりのお兄ちゃんのしつこさにじり寄る気が失せてしまったのだ。

心配してくれるのは嬉しいけど、ちょっと過保護過ぎるよ。

私だつてもう高校生だもん。

お兄ちゃんの後ろにくつ付いていた子供じゃない。

「父ちゃんは、海兄にあいたいの~?」

あまりにしつこかつたからか、連都はスプーン片手にお兄ちゃんに尋ねた。

「連都。お前、もしかして知ってるのか!~?」

「うん」

あ、そうだ忘れてた。連都は海と面識あつたんだった!~!

田下部君は巻き込まれるのが嫌で、海の事知らないって言つたけど。

「だったら、おじいちゃんの家にいけばあえるよ~。海兄は、桜音といつしょにおじいちゃんの家にすんでるから」

れ、連都。それ、一番言つちやダメな事……

特徴とか言つかと思ったら、隠し通さなきやいけない事を連都は言つてしまつた。

ちよつとマズイかもしない。

おやるおやるお兄ちゃんの方を見ると、目を大きく見開き、口もぽかんと開けている。そりやあ、そうだと思ひつ。だつてお兄ちゃん、私が同居しているのは女人だつて思つてたんだから。

「一緒に住んでいるだと……？」

次第にお兄ちゃんが纏つていた空気がピコピコとしたものに変わつていいく。

あ〜、これ絶対にマズイ。  
もしかしたら、海に迷惑かけちゃうかもしけないよ

\* \* \*

最悪だ。

潤む視界の中、私は毎にお兄ちゃんと会つた事を激しく後悔してい  
た。

「桜音！…開けなさい。帰るぞ」  
扉を叩く音と、荒立てているお兄ちゃんの声が聞こえる。  
でもお兄ちゃんは絶対に入つては来れない。  
鍵はかけてあるから決して入れないはずだから。

絶対お兄ちゃんの所になんか戻らないもん……

私は見慣れた自分の部屋で布団を被り、扉の外から聞こえて来るお

兄ちゃんの声を少しでも遮断しようと試みた。

電気も着けてないため、外から入る光がなく室内は真っ暗だ。

それでも田代が慣れたせいか、何処に何かあるかは少しはわかる。

「ヒーヒが私の家だもんっ！！」

「兄ちゃんは昼も言ったが、あの男との同居なんて許さない。桜音がうちに来なければ、あの男の荷物は全て業者に引き取つてもらう。そして兄ちゃん達がここに引っ越ししてお前と暮らす」

「そんな勝手な事しないでよ！…」

お昼に海との同居がバレてから、お兄ちゃんは大激怒した。よりもよつて私の携帯を取りあげたのだ。

合宿中の海との連絡手段これしかないので。

その上、海との同居を許さないと、私をお兄ちゃん達のアパートに住まわせるとまで言つた。

そんな事したら、海と暮らせなくなっちゃう。

だから私は香澄義理姉ちゃんが帰宅すると、事情を話して予定より早く自宅に帰宅したのだ。

まさか、帰宅して話を聞きつけたお兄ちゃんが来るなんて思つてもみなかつたけど。

……どうしよう。

こんな事に海を巻きこんで、面倒だつて思われてお荷物になりたくない。

## Happy Halloween 狼さんの正体は？（前編）（前書き）

10月と言えばハロウイン。

という事で、碧威から読んでくれている人達にお礼番外編ヒロです。

\*過去です（桜音・海一年の時）

## Happy Halloween 狼さんの正体は？（前編）

あ。ここまで聞こえたやついるよ。

しーんと静まりかえつていて廊下から、窓の外へと顔を出し上を見上げる。

私が見ているのはここ三階上、つまり五階だ。

五階は家庭科室や被服室などがあるんだけど、この笑い声はたぶん家庭科室から聞こえてくるものだと想つ。

しうつがないよね、すうごく盛り上がってるもん。  
でも、少し声落とさないと先生に怒られちゃつかも。

家庭科室では、ハロウインパーティーの真っ最中。  
もちろんハロウインといつ事で、ちゃんとコスプレもありー！

衣装提供は被服部と演劇部で、お菓子は家庭部提供。  
最初は三つの部活だけだったんだけど、どうからか話を聞きつけ乱入者が続出。

そのため飲食費300円の会費制とし、誰でも参加自由にしたのだ。  
さすがに食べ物も飲み物も足りないので、コンビニに買い出しに行つている。

だから大人数になってしまったので、家庭科室の声がここまで届くのかもしれない。

私も早くこれ届けてパーティーに戻るつと。

ちらりと手に持っている籠に目を向けると、足を速めた。

籠の中には一切れずつ切られたパンプキンケーキが入つていて。

これは家庭部の手作りで、先生達へと渡すもの。

私はこれを家庭部の先輩に頼まれて、職員室に持つていいく途中なのだ。

一人じゃなくみくも一緒にたんだけど、みくは途中で友達と会つちゃつておしゃべり中。

「赤ずきんちゃん」

「え？」

突然聞こえた男の人の声に思わず体がビクつき、足を止めてしまった。

だつて放課後だからか、廊下には誰も居なく静かなんだもん。それに、何か口調が冗談半分でからかっているみたいだつたから。おそるおそる振り返ると、いつの間に制服を着崩した二人の男が立つていた。

誰っ！？

顔を見ても相手は誰だかわからない。

ただその人達の態度や服装から、ちょっとガラが悪いように感じる。

スニーカーのラインの色が赤だから、三年生だよね。  
その人達を見て、それ以外の情報がない。

ただ、ニヤ付いている二人の雰囲気にマズイって事はわかる。

こんな格好をしているせい！？

私の今の格好は、あかずきんちゃん。

これは演劇部に借りた衣装でハロウィンパーティーのために着ていたのだ。

みくを待つてれば良かつた……  
ただただ後悔だけが襲つてくる。

「うなつたら逃げよ。それしかない。

巻き込まれないよう咄嗟に走り出すと、後ろから追いかけてくる。  
なんでついてくるの〜！！

涙目になりながら、必死で走るもの、腕を掴まれ掴まつてしまつ。  
「は、離して下さ」  
「え〜、なんで？」  
「ダメだよ〜、赤ずきんちゃん。こんな所を歩いていると、悪い才  
オカミさんに食べられちゃうよ？」  
肩とか一人に馴れ馴れしくベタベタ触られ、嫌悪感で気持ちが悪い。  
その上恐怖心で体が震えてきました。

「どうしたの〜？震えちゃつて可愛い」  
腕を掴んでいる奴が、ニヤニヤと笑いながら聞いてくる。  
逃げなきやと思うけど、体が自由に動かない。

涼、みく助けて！！

ギュッと手を握り心の中で叫ぶ。  
涼は家庭科室でパーティーに参加中だし、みくは友達と談笑中。  
だからここには来る可能性は少ない。  
それでも、私はなぜか助けを求めてしまつていた。

「桜音ーー。」

突然聞こえてきたその声に、先輩達が私の腕や肩から手が離れる。

え？

声の方向を見ると、オオカミさんが立っていた。  
正確にはオオカミのキグルミを着た人だけだ……

誰？もしかして、パーティの参加者？

声の主に思い当たる人がいない。

オオカミさんは私の方へ来ると、先輩の前に立ちはだかつてくれた。  
どうやらオオカミさんは私を守ってくれるよ！

「なんだよ、お前」

「オオカミのくせに王子氣ぢり？」

先輩達は私からターゲットをオオカミさんに変え、絡み始めてしま  
う。

えっ、どうしよう…？ オオカミさんが危ない…！  
みくみたいに空手とか習つてたら助ける事が出来るかもしけないけ  
ど、私じゃ足手まといにしかならないよ。  
どうしたらいいかわからずただ見ていると、オオカミさんが手であ  
つかに行けと命図をしていた。

……でも…！

迷つたけど、私はオオカミさんの通り走つた。  
私に出来る事はない。

すぐに先生を呼んで来なきや…！



H a p p y H a l l o w e e n

狼さんの正体は？

(前編) (後編)

！」と声で読んで下さりありがとうございました。お忙しけれども

## Happy Halloween 狼さんの正体は？（後編）

「元気だしなよ？」

「だつて……」

ピーターパンやメイドの格好をした人達が騒いでいる部屋の隅で、私は一人うな垂れていた。  
魔女の格好をしたみくが励ましてているけど、私はオオカミのキグルミの人の事で頭がいっぱい。

あの後先生を連れてオオカミさんの所に向かつたんだけど、オオカミさんも先輩もいなかつた。

何処かに連れて行かれて、殴られてたらじうしょう。

無事でいて欲しいよ。

元々絡まれてたの私だつたのに、巻き込んじやつた……

「桜音。オオカミ探して來たぞ」「えつ！？」

涼の声に顔を上げると、そこにはドラキュラの格好をした涼とあの時のオオカミが立つっていた。

オオカミさんだつ！！

どうやら、涼が探してきてくれたみたい。

「オオカミさん！！」

私はすぐに立ちあがり駆け寄るとオオカミに抱きついた。  
ふわふわの生地に体が埋もれる。  
良かつた。

「怪我とかしてない！？」

オオカミのキグルミを着た人は、私の問いにしゃべらずにただ首を

縦に動かす。

それを確認すると、私はほつと胸をなで下ろした。

「「めんなさい。私のせいです……」

面倒なことに巻きこんでしまった。

私があそこで掘まらなければ、オオカミさんにも迷惑かけずにはんだのだ。

謝ると、頭をふわふわの手で撫でられる。

気にするなって言つてくれるのかな？

オオカミさんは背の高い人らしく必然的に上田すかいになりオオカミさんを見つめると、なぜか頭を撫でる力が強くなつてしまつ。

あ、そうだ。お礼にこれを

私はオオカミさんから離れると、手に持つていた籠の中から透明な袋にゴーレドの針金で封をされたものを取りだす。

これはカボチャのスコーン。

今日のイベントの為に家で作つて來たのだ。

「助けてくれてありがとう。あのね、これお礼。手作りだからおいしいかわかんないけど、良かつたら食べてね」

オオカミさんは、つぶらな瞳でスコーンをしばらく見つめる。  
そしてゆっくりとそれに手を伸ばし両手で大事そうに受け取ると、  
首を縦に振つた。

「良かつたじやん、桜音見つかつて」

「うん」

「ねえ、このキグルミかなりふかふかしてそうじやん？演劇部の衣装にしては金かけてるわね」

「うん。ふかふかだよ。」つい、う毛布欲しいよね  
私はみくの言葉に、また顔をオオカミさんに埋めギュウッとしがみ付く。

するとオオカミさんはお菓子を器用に片手で持ち空いている方の手で私を強く抱きしめ返した。

……う、ちょっと苦しいかも。

「気持ちよせいじゃん。私にも変わってくれない？」

「うん」

オオカミさんは手を離すが、オオカミさんは私の拘束を解いてくれない。

「オオカミさん。みくも抱きつきたいって」

私がそう言つと、オオカミさんは激しく首を横に振つた。  
え？ダメなの？

「はあ！？なんで桜音が良くて私が駄目なのよ……皮剥ぐぞ……」  
みくの目はすわり、口元は引き攣つている。  
……け、喧嘩とかしないよね？

私がそんな事を考へていううちに、みくの手はオオカミさんの頭部へと向かっていた。

それをオオカミさんは阻止せんと、みくの攻撃を避けながら逃げる。

「逃げんな。顔見せる……」

逃げるオオカミさんをみくが追いかけて行き、二人はドアを開けて廊下へといつてしまつた。  
ど、どうしよう…？

「みくは魔女じゃなくて、獵師だな」

茫然としている私の横で、涼はかぼちゃプリンを食べながら一人が消えたドアを見ている。

「ねえ、あれ誰だったの？」

「赤ずきんちゃんにベタ惚れ中のオオカミ」

「も～、涼。ちゃんと答えてよーー！」

「獵師の天敵のオオカミ」

「言ひ気ないでしょ……」

その後何度も聞くが、結局涼ははぐらかして答えてくれなかつた。  
連れて来てくれたから、顔は知つてゐると思つんだけどな。

後で戻つて来たみくは、途中で見失つちゃつたらしい。  
結局あれは誰だつたんだろう？

答えは闇の中だ。

Happy Halloween

狼さんの正体は？

(後編) (後書き)

狼の正体はもちろん海です。

最後まで出てこなかつたけど^ ^ ;

## 第三十五話 彼の心 彼女の決意

シックな家具や調度品により、落ち着いた感じのするリビング。私の家とは違い、それには生活感があまり感じられない。

私はそんな室内の中央にあるソファに座っていた。

テーブルを挟んで反対側のソファに座っているその人は、私が今一番逢いたい人に似ている。

でも正確には逢いたい人がその人に似ているということ。

そこに座っているのは、啓吾さん。

彼は海のお父さんだから似ているのは当然と言えば当然の事だ。お互の視線が合い、こちらを見て微笑む啓吾さんと海を重ねてしまい、無性に泣きたくなってしまった。

海、逢いたいよ……

「桜音ちゃん、どうぞ」

「ありがとうございます」

みちるさんがテーブルの上にティーカップを置いてくれた。

私はそれを「いただきます」と言い、カップを取り、口をつけ傾げて口に流す。

……おいしい。

ミルクの甘さと紅茶の香りは、私の心を不思議と少し落ち着きを取り戻し始めてくれる。

「少し落ち着いたかい?」

「はい。」迷惑をおかけして申し訳ありません

啓吾さんとみちるさんに頭を下げる。「謝りないで」と啓吾さんとみちるさんに制止されてしまう。

私は啓吾さんに連れられ、海の実家　啓吾さんの家に来ていた。啓吾さんは、全ての事情を知った海に頼まれて私の様子を見にきてくれたそうだ。

海がなぜ知っているか言つと、どうやら田下部君がお僕の件でメールをしてくれたらしい。

それで心配した海は、私宛にメールや電話を何度もかけていた。でも私の携帯はお兄ちゃんに取られて連絡が取れず、海は義理姉さんに電話をして、私の様子を尋ねたそうだ。

そこで私が家に戻った事を知り、啓吾さんに様子を見て自分に連絡を入れてくれと頼んだくれたみたい。

「迷惑じゃないし、謝る事なんてないんだよ。この件は僕達にも関係している事なんだ。海が帰つて来たら、一度お兄さんも交えてみんなで話し合おう。状況が落ち着くまで桜音ちゃんは、ここに居て。自分の家だと思つてゆつくりくつろいでくれて構わないから。ね?」「ですが……」

「ちゃんとお兄さん達にも連絡済みだよ。お兄さんはしぶしぶだったが、納得してくれた。ねえ、桜音ちゃん。海のためにもここにいてくれないかな?あの子、また心配しちゃうから」「でもただでさえ、ご迷惑かけているのに……」

啓吾さんは私の顔を見て苦笑いを浮かべると、言葉を続けた。

「海はね、桜音ちゃんの事をずっと好きだったんだ。すごくわかりやすくて、最初は笑えたよ。知っていた?去年のクリスマス辺りからかな?僕が桜音ちゃんに渡していたプレゼントあるでしょ?クリスマスや誕生日、それにホワイトデーとかの。あれ、全部海からな

「んだよ」

「……え」

思わぬ話に俯いていた顔を上げ、啓吾さんを見た。

だって私、あの時まだ海の事知らないよ？

もちろん存在は知っていたけど、話した事とかもない思うし。

「海が自分が選んで買つて聞かなかつたんだ。自分で稼いだお金で払いたいってバイトまでしてさ。僕もプレゼントしたいのに。その上、僕が貰つた桜音ちゃんの手作りのお菓子とかバレンタインのチョコとか全部一人占めするし。そんなんだつたら、話しかければいいと思わない？僕と言つ接点があるんだから。それなのにヘタレだよね、あの子」

「えっ、本当ですか？」

「本当だよ。海は桜音ちゃんの事が好きで好きでしようがないんだ。だからごめんね、愛情表現がうつとおしくなるかもしない。あの子、付き合つてきた子達は居たけど、桜音ちゃんが初恋みたいなものだから」

海が初恋っ！？

だつていつも余裕あるし、慣れているみたいなのに。

「だからこれから先、迷惑をいっぱいかけると思う。いや、桜音ちゃんにはもうかけているかもしれないね。だから、お互い様なんだから迷惑かけてもいいんだよ。それに海は迷惑だなんて思つていないとおもう。迷惑だと思つてもそれすら、嬉しいと感じるかもしれないね。あの子。それから僕とみちるも迷惑だなんて思つてないよ。だって桜音ちゃんは娘のような子だから……」

「そうよ。だから気にしないで。それに海君と桜音ちゃんが結婚したら、本当の娘になるものね」

「えっ！？」

二人はクスクスと笑い始めた。

赤くなつた頬を抑え、私は決心する。

私はこの件では、お兄ちゃんから逃げてばかり。  
でも、逃げないでちゃんと話あつ。

だつて、こうして傍にいてくれる人達がいるんだから。  
それに、お兄ちゃんも話せばわかつてくれるはずだもん。

## 第三十六話 小悪魔の不意打ち攻撃

私は小さい時は、ずっとお兄ちゃん子だった。

両親は共働きで家に居ない時が多くたたし、お兄ちゃんも年が離れている私を可愛がってくれたから、かなり懐いていた。

だから今回の事もお兄ちゃんが煩く言つのも、私の事を心配してつていう事が良くわかつている。

でも私は海と一緒に居たい。

だから

「よし、頑張つてお兄ちゃんを説得するだつ……」

見つめている時計の針は間もなく8時を回りつとじてこる。

私はそれを見て、気合いを入れた。

もつすぐお兄ちゃんと香澄義理姉ちやんがうちで遊びに来るのだ。もちろん要件はただ遊びに来るのじゃなく、私と海の両親と交際につこう。

最初皆さとやお母さんも同席すると話があつたんだけど、今回は私と海でちゃんと話をつけるから任せて欲しいって一人に話をした。もし私と海だけでは力不足な時は、力を貸して欲しいともお願ひしている。

ちやんと話しあつて、うちと海の事をわかつて貰わなきや。

お兄ちやんが心配するような事はないよって。  
安心してもらわないとね。

「……でも、もしお兄ちゃんがわかつてくれなかつたら?」  
もしもの事が頭をよぎり、気合を入れたばかりなのに早くも心  
が弱くなってきた。

もしわかつてくれなかつたら？

私の話なんかに耳を傾けてくれなかつたら？

そんな思いが浮かんでしまい、私の心にはぐすんだ世界が広がつていぐ。

「桜音」

ぼうっと麻痺していた思考が、名前を呼ばれたため急速に戻つてくる。

私はなんとかマイナス思考から脱出しようと首を横に振ると顔を上げた。

「大丈夫か？」

海は眉を下げる心配そうに私を覗きこんでいる。

どうやら私は海が近くに来たのにも気がつかつたみたい。しつかりしろ、私っ！！

海に心配かけちゃ駄目。一人でちゃんとやらなきやーー！

「うん、平氣だよ」

私は海に向かつて笑みを作る。

だけど海はそれを見て、辛そうに顔を歪め私を抱き寄せた。

「……海？」

「桜音ごめん。俺が不甲斐ないばかりに桜音に不安な思いさせて。しかも肝心な時、俺居なくて役立たずだな」

「海は不甲斐なくないし、役立たずじやないよ。それにあの時、海部活だつたんだじやん。それに今回は私が巻き込んじやつたみたいなんだし……」

海はずつと私の傍に居れなかつた事を悔やんでいる。

私がお兄ちゃんといろいろ会つた時、海は合宿中だった。

だから仕方ないし気にしないでつて何度も言つているのに……

「いや、これは俺も関係している事だ。だから桜音が巻き込んだとかじゃない」

「でもっ！」

「でもじゃない。桜音。俺は桜音の何？」

「えっと……か、彼氏です」

「そう。だからこういう不安な事とか悩み事とかあつた時は、一人で背負つたりしないで欲しい。頼りにならないかもしないけど、俺にも分けてくれ。一緒に考えて一緒に対策練ろう？一人では出来ないかもしねえけど、一人なら出来る事もあるかもしねえから」海はそう言つと、私の頬に手を伸ばす。

「な？」

「うん」

優しく撫でてくれる暖かい大きい手。

それがいつもより大きく感じる気がする。

私はその手に自分の手を重ねた。

好き。大好き。

海に対する想いが溢れてしようがない。

言葉は大切だ。

けど抱き合つたり、触れあつたりするつて事も同じくらい大切。

恥ずかしいけどね……

私は海に抱きしめられるのも、触れられるのも好き。

鼓動が落ち着かないのに、どこか安心する。

それに、海が私の事を大事にしてくれているのも感じられるから。だからきっと海も同じだと思つ。

「さ、桜音っ！？」

突然抱きしめたせいか、海の声が裏返つていて。  
あ、驚かせちゃつたっぽい。

「ねえ、海は？」

顔を上げ、海を見つめた。

すると海は顔を真っ赤にさせ金魚のよう口をパクパクとさせていく。

あれ～？苦しそうにギュッて抱きしめてないんだな～？

いつも自分から抱きしめるのに海は抱きしめてくれる気配がない。

そつ言えば、前も不意打ちで私から抱きしめた時もこんな反応だけ。

たしか、あれは前に啓吾さんに水族館の招待を受けた時だ。  
嬉しそうに抱きつくと、海は顔を真っ赤にさせじしまく固まつていた。

なんだから？

「ギュッしてくれないの？」

そう言つたらいつもより強い力で抱きしめられた。

うつ、ちょつと苦しいかも。

「するに決まってるだろ！！なんでこんなに可愛いんだ！？もしかして桜音は小悪魔か？！？小悪魔なのか？」

「……え」

そんな事言われた事一回もない。

といふか、明らかに私とはかけ離れた言葉なんですけど。

「ちよつ、海ー！」

「可愛すぎる」

なぜキス魔スイッチが入ったの！？

テンションのすっかり上がり上がってしまった海によつて、頬や唇にキスの雨が降つてくれる。

「日本なのに…」

もひっ。

お兄けやん達もすぐ来るのに、そのまま顔真っ赤つて不審に思われちやうよ。

と、とにかく止めなきゃ…！

海をなんとか止めようとした瞬間、ペペペッと電子音が室内に鳴り響く。

その音に私と海も一瞬止まつた。

なぜならこの電子音はさつさつに供えられた警備システムが作動したためだから。

## 第三十七話 いきなりプロポーズっ！？

「とにかく、俺はお前と桜音の同居も交際も一切認めない」腕を組んであぐらをかいているお兄ちゃんは、テーブルに向ひついで座っている海を睨みながらそう言った。  
はつきり言つて今のお兄ちゃんに威厳は感じられない。  
私も香澄義理姉ちゃんもあきれ顔でそれを見つめていた。  
まじめに今回の事について話を聞いているのは、海だけ。  
だつて、お兄ちゃんつてばわつき

「警察と警備員にさつき怒られていたくせに、何恰好つけんのよ。まつたく。桜音ちゃん達を覗くために自分の家の堀をよじ登るなんてバカな事してくれたおかげで、桜音ちゃんと海君にまで迷惑かけちゃつたじゃないの。まず謝りなさいよ」

お兄ちゃんの隣りでは、香澄義理姉ちゃんが冷めた目でお兄ちゃんを突き刺している。

そうだよ～。香澄義理姉ちゃんの言つ通り。

さつきあのセキュリティの警報をならした犯人は泥棒なんかじやなくて、お兄ちゃん。

私達が一人つきりなので、如何わしい事してないかと思つたらしく、中の様子を伺うために堀をよじ登つてこつそり侵入を図つたんだつて。

「俺はただ桜音の事が心配だっただけだ！！大体なんでもうちがセキュリティに加入してんだよ！？俺は知らされてないぞ！？」  
お兄ちゃん、それやつ当たりじやんか。

はあ～、海の前なのに……

私はちらりと海を見た。

海、呆れてないかな？

「いろいろ」報告が遅れています。それはJJJに引っ越して来る時、俺が入れたんです。もちろん、前もっておじさんとおばさんの許可済みです」

「俺は聞いてないぞ」

「すみません。桜音の身に何かあると心配なので、対策はちゃんとして置きたくて入れさせて頂きました」

「……じゃあなんだ。セキュリティーに入したのは、桜音のためだと？」

「はい」

その海の言葉に、お兄ちゃんは口を噤んだ。  
あ、大人しくなった。

わざわざまで騒がしかつたのに。

「お兄さん」

「お前のお兄さんじゃない。俺は桜音のお兄さんだ」「  
海の問い合わせに、お兄ちゃんは良く使われてそうなそんな台詞を吐く。

お兄ちゃんは眉間に皺を寄せながらも何か考えてるみたい。

「では、那智さんと。桜音さんとの同居と交際を認めて下さるまませんか？ 桜音さんの事は必ず大事にします。

桜音さんは可愛らしくて俺には勿体ない子ですが、彼女に釣り合いつよいに俺努力しますから」

「海、違うよ。逆だよ、逆！…私が海に釣り合いつよいに努力しなきゃならないの。

だって海、カツコイイし優しいし、頭も良いし。私とは違つもん  
誰が見ても釣り合わないのは一目瞭然だ。

可愛いわけじゃない平凡な私と、王子様のよつた海。

そんなの比べるまでもない。

「お兄ちゃん。私ね、正直お付き合いつて事がまだ良くわからなくて、戸惑うし不安な事とかもいっぱいあるんだ。

でも海の傍にいると、幸せなの。海に名前を呼ばれたり何気ない事が嬉しいの」

私はお兄ちゃんに対し、微笑んだ。

きつとお兄ちゃんだつてそう。

香澄義理お姉ちゃんがいるんだもん、わかってくれる。

「だから、海との事認めて」

「……同居は絶対に認めない」

「お兄ちゃんっ！」

私は思わずテーブルに身を乗り出す。

「桜音、頭を冷やしなさい。もし、この件が学校側にバレたらどうするんだ？まだ他の家族が同居していれば理解できるが、一人っきりというのは問題じゃないか？」

今まで見つからなかつたかもしぬないが、今後はわからない。事情も知らないような奴らに、お前が誹謗中傷されるかもしれないんだぞ。

それに学校側がどう出るかもわからないんだ。お前は桜音が大事ならわかるよな？」

お兄ちゃんは海を射る様に見つめる。

その視線にぶつかつた海の瞳がゆらゆらと揺れ動く。

まさか海、お兄ちゃんの意見に賛成するわけじゃないよね？

「お前がセキュリティを入れて対策を打つたよつて、桜音のために対策は打たなきやならないんじゃないのか？傷つくなのは桜音だ」

「平気だもん」

「……桜音、『めん』」

海は私の方を見ると、眉を下げる辛そうに呟く。  
その声はか細く弱い。

「桜音さんとのお付き合いの方は認めて頂けるんですよね？」

「それは考えてやらないでもない」

「わかりました。俺が出て行きます」

「海つ！…なんで！？」

なんで勝手に決めるの？

「桜音。俺も桜音と一緒に暮らしたい。でも、那智さんの言つ通り  
だと思つたんだ。肯定的に受け止めるような奴だけじゃない。  
おもしろおかしく言つやつとも出て来るはずだ。そんな奴らに俺のせ  
いで桜音の事を傷つけられたくない」

「大丈夫だもん。バレないよに頑張るからー！」

私はすがるよつこ、海にしがみ付く。

「桜音。バレないよに頑張るつて、そんな気はつた生活毎日続け  
るのか？疲れるぞ」

「疲れても良いもん。私は、海と一緒に居たい。お兄ちゃん、変な  
事言わないで！！」

「じゃあ、そんな疲れる生活こつこつもわかるのか？」

「つ

お兄ちゃんは、視線を海に向ける。

そんな生活海にさせたくないよ。でも……

どうしていいかわかなくなつちゃつて、頭の中ぐちゃぐちゃにな  
つたせいか視界が潤んできた。  
泣いても解決なんてしないの。」

「桜音」

海はそう私に声をかけると、そつと膝の上に乗せていた私の手を握った。

「一緒に暮らせなくても、俺は彼氏として桜音の傍に居たい。もちろん桜音との生活に未練はあるよ。」

今は一緒に暮らせなくなつても、数年後にはずっと一緒に暮らせる時が来るからその時まで待つていて欲しい

「数年後……？」

私は首を傾げ海を見上げる。

周りを説得するのに、それぐらい時間がかかるつてわけじゃないよね？

「ああ。 桜音と俺が結婚したら、ずっと一緒に暮らせるだろ？」

「うん、 そうだね。たしかに結婚したら一緒に つて、 けつ、 結婚つ！？」

予想もしてなかつた単語の出現に、私の声がどもるのは仕方ない。結婚つてあの結婚だよね。

えつ、 ちよつと待つて。付き合つてばかりだし、 まだ高校生だし……

「お前、 高校生の分際でプロポーズだと！？早すぎることもほどがある！…それにうちの桜音はずつと嫁にはいかない！…」

「たしかに俺は高校生です。ですが、俺は桜音さんを愛しています。出来る事なら今すぐ結婚したいですが、俺はまだ親に養つてもらつている状態。

なので社会人になつて桜音さんを養えるようになつたら、その時は正式にプロポーズを申し込んで結婚と考えています」

お兄ちゃんの怒号にきつぱりとそう言つてのけた海を、みんな口をポカンと開けてみた。

それはもちろん、私もだ。



## 第三十七話 いきなりプロポーズっ！？（後書き）

次で合鍵は最終話（予定）です。

ここまで読んで下さった方、ありがとうございました。

良かったら、次回もお付き合いください（^\_\_^）

んー、そろそろだと思つただけなー。

私は白い皮のソファに座りながら、先に見てて良いよと海に言われたDVDを見ていた。

やけに大きいそのテレビは壁掛けになつてあり、広い室内をより広く見せてくれている。

部屋にはあまり物がないから、余計広く感じるのかも。

室内をぱっと見てわかるのはテーブルにソファ、それから窓辺の観葉植物と壁側にあるシルバーのラックに収納されたDVDやCDそれにコンポ。あとダークブラウンの扉のついたラックぐらいだ。全体的に生活感がない印象を受ける。

きつちり掃除だつてされてるし。

そういえば、一緒に住んでいた頃の海の部屋もそうだつたつけ。  
時々ふと了些細な事で思い出す。  
まだ海と一緒に住んでいた時のことを。  
あれから結構経つんだけどなあ……

ここは海の住んでるマンション。

私は海に合鍵を貰つてこつしてたまに夕食なんかを作つて来ている。

あの時のお兄ちゃん達がつひに引つ越してみると同時に、海はお兄ちゃん所有

のマンションへ。

その上「交際を考えてくれる」って言つて言つて言つていたお兄ちゃんが

まさかの反対声明を発表。

妨害工作なんかも始めちゃつたりして、私達は会える時間が減つてしまつている。

とりあえず妨害工作その一、門限をもつと遅くして欲しい。  
だって、門限7時つて早くない？

私、高校生なのに。せめて7時30分がいい。

「桜音」

あつ。帰つて来たつ！！

玄関から私の事を呼ぶ聞こえてきた声に、慌てて立ち上るとそのままの方へと向かい走つたけど、どうやらあつちの方が早かつたらしい。

扉を開け入室してきたこの部屋の主によつて、私は抱きしめられてしまつた。

そのため、「お帰りなさい」といつ言葉をのみ込んでしまつ。

「ただいま

「おかえりなさい」

私も海の背に手を回し、その体を抱きしめた。  
しばらくするとゆつくり拘束が解かれたので、私も回していくた手の力を緩める。

すると頬に海の手が添えられ、唇にキスを落とされた。  
うつ、この新婚さん的な感じはまだ慣れないよ～つー！

「久しぶりの桜音とのキスだな」

あれ？久しぶりって、昨日いつぱいしたような気がするんだけど…  
…？

私はその言葉に首を傾げる。

「昨日したよね？」

「ああ、でも今日はまだしてないだろ」

ほり、やっぱり昨日したじやん。

私は口ひり疑問に思つてゐる事を海に聞いてみた。

「もしかして、海つてキス魔？」

「どうだうな？でもそれは、桜音が可愛くてしおがないからだぞ」

「私の事可愛いって言うの、それ海だけだよ」

だって私、可愛くないもん。

そりよあ、好きな人に可愛いって言わると嬉しい。

でも、みくもそうだけど私より遙かに可愛い子がいっぱいし。

「……いや、少なくとも一人は知つてゐ。しかもあいつらあきらめてないし」

海はなぜか恥々しそうに顔を歪めた。

「えつ？誰？」

「教えない」

海はそう言つと、私を抱き上げソファへと座らせると自分もその隣に座つた。

誰だろう？私の事可愛いって言つてくれた人つて。

「ねえ、誰？」

「教えない。桜音は俺だから」

そう言つて私を抱き寄せる海に思わず笑つてしまつ。海つてば、またやきもち妬いてる。

そんな風にやきもち妬く必要なんてないのに。だって私は

「ねえ、海」

「ん？ なんだ？」

私は海においておいでと手まねきをする。

そして屈みこんだ海の耳元で「大好き」と囁いた。  
しばらく茫然としていた海だったけど、現状が把握出来たのか急速に顔が赤くなつていく。

わ〜、耳まで真っ赤だ。

たぶん、私も同じぐらい赤くなつてると思つけど。

「桜音、俺も大好きだ！！」

ガバッと海に抱きしめられ、私は海と一緒に過ぎしてきた日のこととを思い出していた。

最初にうちの玄関であつた時のことや告白された時のこととか。きっとあの時海と同居しなかつたら、こんな風な未来は描けなかつたと思つ。

シンデレラのガラスの靴じゃないけど、あの合鍵は私達にとってお互いを繋いでくれた大切なものだったのかもしない。

今はその合鍵は無くなつてしまつたけど、私達はもう大丈夫。きっとそれが無くても、一人ずつと一緒にいられるから

## HPLローグ（後書き）

\*あとがき\*

ここまで合鍵にお付き合いして下さった方々ありがとうございました  
たゞ（＼＼）＼

これにて本編は完結です。もちろん、番外編は書きますよ～。

感想を下さった方、お気に入りに入れて下さった方、読んで下さった方

本当にありがとうございました。

特に感想を下さった方一人一人の名前を出してお礼が言いたいんですけど、

差しさわりがあると悪いので控えます^\_^；

自分の書いているものに反応があるっていう事がこんなに嬉しいんだつていう事を知りました。

自分の文章があまりにも稚拙すぎでどうしても他の人と比べてしまい、  
何度も落ち込んで書くのをストップしようかなって思つた事もあつたけど、  
完結出来て良かつたです。

本当にありがとうございました。

2010・11・28  
歌月 碧威



ブログより転載です。

遮断された教室の外からセミの鳴き声が聞こえてくる。

それは窓を閉められて遮断されている室内のせいなのか、そもそもズキズキと痛む頭のせいなのか、耳に届くのが酷く鈍い。

どうしよう我慢できなくなつてきちゃつた……

黒板に書かれてある数式を写す手を止め、半袖から伸びている腕を摩る。

寒い。

周りを見回してみると、三、四人だけクーラーが直に当たる人達は防寒の為に長袖ジャージを着ている。

頭も痛いし、もしかして風邪ひいたかも。

私も長袖のジャージを羽織りたいけど、ロッカーに置いてないから羽織るものがない。

……うう。寒い。あと何分？

黒板の上にある時計を見ると、授業終了まであと残り大体15分ぐらいい。

あ～、時間微妙。

私は少し考えると授業を継続する事にし、シャープペンを握りなおして続きを書こうと黒板を見る。

このまま授業が終わってから保健室に行こうっと。すると、右側から「先生」と呼ぶ声が聞こえてきた。

教壇に立ち教科書を開いていた数学の西川先生は、その声に顔を上げ、

声の方向を見る。

その視線を追うように一斉にみんなの視線が向いているのは、私の三つ隣りにいる涼の席。

「どうした、水谷」

「保健室に行つてもいいですか？」

涼はそんな視線を気にもせず、口を開いた。

え、涼も具合わるいのかな？

「それはかまわんが、どうか具合でも悪いのか？」

「いえ、俺じゃなく」

涼の視線がゆっくりと私に向けられる。

ん？どうしたんだろ？

私は首を傾げた。

「桜音、具合悪い時は我慢するなって言つてるだろ？」

涼はそう言うとため息を吐いた。

だつて大丈夫だつて思つたんだもん……。

「なんだ逢月、お前具合悪いのか？」

「はい。頭痛が……」

先生の問いかけに返事をすると、周りから「水谷すげえ何でわかつたんだ！？」とか「さすが！？」なんて声が聞こえてきた。

周りの人気が具合悪そうに見えないって事は顔色とか普段と変わらないのかな？

しかしほんと涼つてすごいから不思議。

だつていつも私が具合悪いのとかわかつちゃうんだもん。

「なら、念のため保健室に行つて来い。テスト前で夏風邪なんてひいたら大変だ」

「はい」

教科書とノート、そしてペンケースを机の端に片付け、立ち上がりつた。

やばい。

足元がぐらつたり、ガタンという音と共に床の上に座り込んでしまつ。どうじよひ。足に力が入らないよ……

「桜音……」

「桜音さん……？」

みくと千里ちゃんの叫ぶような声がぼーっと聞こえる。

「大丈夫」

一応安心させるために言つてはみたけど、正直しんどい。自分で思つてはいるより、以外と重症みたい。

やつぱ熱あるのかも？

熱いように感じないんだけどな。

おでこに手を当てている私をよそに、教室内がざわわつき軽く騒動となりかけてしまつてはいる。

「だから無理するなつて言つてゐるの」

「わっ」

涼の声と一緒に急にひょいつと体が宙に浮き、床から離れてく。

「あ、お姫様だつこだ」つてわかつた瞬間、周りから「羨ましい……」

！」「私も！」「とかいろいろな女の子の声が聞こえてきた。

涼にお姫様だつこれで運ばれるのは、初めてじゃないけど、すつごく恥ずかしい。

「桜音さんなら、僕が運びます」

千里ちゃんが、手を伸ばし涼から私を受け取つとしたけど、涼は

「いいよ。俺が運ぶから」

と並んで十里ばかりの申し田を断ると、歩き田す。

「……」めんね、涼

「氣にするな」

温かい。人の体温ってこんなに温かいんだ。涼の体温で暖をとりながら、私は目を瞑つた。

外の暑さに比べれば、教室の中はクーラーがかかっていて快適だ。昼休みも終わり、腹も膨れたところで眠気もやつてくる。その上授業があいつの苦手な英語とくれば、「安眠できる要素はそろつていた。

寝るならそんな堂々と寝るなよ……

俺は若林が読み上げる英文を聞きながら、斜め右の方向を見ている。若林は俺らの英語の担任で、桜音のクラス担任だ。

髭を生やし、体系はかなりの大型。

桜音は「クマさんみたいで可愛い」って言っている。

何処をどう見たら、クマに見えるんだろうか。

ただ、ちょっと桜音に可愛いって言われる若林が羨ましい。

あいつは、もう少しバレない寝方は出来ないのか。

そいつは机にうつ伏せになり、読み上げられている英文を子守唄代わりにして寝ていた。

西野はもつとうまく寝ているぞ。

教室のドア側の一番前席の西野は、教科書を見ている振りして寝ている。

「ではこのページの訳を名取りつつあると思うので 在原 指されたのでノートを持つて立ちあがらなければ、先生によつて手で制されてしまう。」

「在原と思つたが、田下部。田下部香織  
やつばえづくよな。

呼ばれた上に皆の視線を集めているのと、田下部は一向に気づかない。

「おい、起きろよ……

隣りの奴が起こす前に、若林が教科書を丸めて頭をはたいてしまった。

「痛つてえ」

頭を摩りながらあいつはバツと起き上ると、現状を一瞬にして理解したようだった。

「どこつすか?」

「教科書、56ページの訳」

「はあ!? 訳つてこれ英語つすよ?んな、海じゃねえから急に訳せつて言われても、俺が訳せるわけねえしじょ」

「急じやない。この間の授業で課題として前もつて書つておいただろうが」

「えへ、俺居ましたつけ?」

「居ただろうが!! つたく、お前は少しそむかんと真面目に授業受けろ。あと、西野!! お前も起きる」  
やつぱばれてたのか。

西野は急に名前を呼ばれたため、飛び起きてしまった。

「お前ら、そんなに俺の授業は暇か?」

これから説教が始まるつて時に、ドアを叩く控え目な音が聞こえてきた。

た。

「若林先生」

ドアが開けられ、白衣の女性が入つて來た。  
あれは……保険医の高橋だ。

「今、少しよろしいですか?」

「あ、はい。どうなさつたんですか?」

若林はドアの方へと向かつ。

その後若林と高橋先生は何かを話しているらしく、俺の席までは

聞こえない。

「マジで！？ なんで逢月さん大丈夫なの！？」

は？ 桜音！？

俺には関係ないと思つていた会話が、どうやらそうでもなかつたようだ。

西野の声によつて、見ていた空からドアの方向に視線を移動させる。

「お前な……」

「聞き耳立てたとかじやなくて、たまたま聞こえたんですつて。それより、大丈夫なんですか？ 倒れたつて」

……倒れた！？

勢いよく立ちあがつたため、イスが倒れる音と共に教室中の視線が集まつたが、それどころじやない。

「どうした、在原……？」

皆怪訝そうに見ているが、唯一わかつてゐる田下部だけは違つた。

「具合悪いので保健室に行きます」

「ああ、行つて來い。大丈夫か？ お前顔色悪いぞ？」

「あの、でしたら私が保健室に……」

「あ、そうですね。丁度よかつたな、保険医の先生ここにいて。では、高橋先生、在原を保健室に……つて、在原！？」

先生が何か言つてゐるが、どうでもいい。

それより桜音だ。

俺は全速力で保健室へと向かう。

だが俺が行つた時には、桜音はすでに保健室には居なかつた。



一体、何処の病院に行つたんだ……？

階段に座りながら、いつ開くかわからない玄関の扉を見つめる。

俺が保健室に行くと、もう桜音の姿はなかつた。

戻つて来た保険医に話を聞いたところ、桜音の熱が高かつたため、すぐに付き添いの涼とタクシーで帰宅したそうだ。

どうやらその報告をしにきていたらしい。

それを聞き俺も急いで早退して帰宅したが、一人の姿はなかつた。おそらく病院に直で行つたのだろう。

肝心の病院を探そうにもかかりつけがわからないし、携帯も繋がらない。

そのため、現在自宅待機を余儀なくされている。

しかし、遅い。

腕時計を見ると、一時間はゆうに超えていた。

時計の針が進むごとに嫌な不安ばかりが募り、心配でたまらない。病院が混んでいるのか、それとも

……やつぱり探してみるか。

玄関の扉に手をかけよつと手を伸ばすと、玄関の鍵が勝手に開いた。もしかして……

たまらずあつちが扉を開ける前に扉を開けると、想像通り桜音と涼が立つていた。

桜音は涼に支えられるようにして立つていて、二人とも目を大きく見開きこっちを見ている。

まさか俺が居るとは思つてもいなかつたのだろう。無理もない。普通なら、今は授業中のはずだ。

「……い……？」

首を傾げる桜音は、いつもより顔が赤く汗ばんでいる。

熱があるからやつぱり寒いのか、長袖のバスケ部のジャージを着ていた。

ジャージは桜音には大きすぎるらしく、全体的にぶかぶかだ。

「大丈夫か？」

なんの事だかわからなかつたのか、桜音はきょとんとした顔をしている。

「具合はどうなんだ？」

「…………うん。お医者さんに見て貰つたし、お薬も飲んだから。ねえ、海どつしてここにこじるの？学校は？」

「詳しくは後だ。それより部屋に行こう。ここだと休めないだろしぐわしく聞きたい事とかあるが、ここで立ち話をしても桜音の体に悪い。

詳しい事は、後で涼にでも聞くか

俺は桜音を抱きかかると、桜音の部屋へと運んだ。

「だから俺がやるって言ったのに

「……。」

涼は絆創膏だらけの俺の指とまな板の上にある物体を見ながら、深いため息を吐きだした。

涼の視線の先にあるのは、酷い剥かれ方をした林檎の皮の残骸。その剥きから方だと、実はかなりやせ細つている事は簡単に想像ができる。

しううがないだろ、初めてだつたんだから……

「一応出来たんだからいいだろ」「

ガラスの器を涼に見せる。

そこには摩り下ろされている林檎が入っていた。  
あんな剥き方したから、量が少ないけど。

「まあ、確かに。でも、皮捨てるなよ。もつたいないから後で俺が食つかり」

「……わかった」

「じゃあそれに蜂蜜かけて上に持つて行つてくれ。俺は洗濯物干してくるから」

「ああ」

俺はキッチンから出て行く涼の背中を見送った。

涼は住んでもいないのに、この家の事をよく知っている。  
氷まくらの場所や、毛布のしまつてある場所とか。  
何処にしまつてあるかわからない俺の代わりに、涼はそれを準備してくれた。

それだけじゃない。涼は、桜音の事も良く知っていた。

具合悪くて食欲無い時には、林檎のすりおろした物に蜂蜜をかけたやつなら食べるとか、

おかゆ派じゃなくうどん派だとか……

「付き合い長いし、桜音風邪引いた時何度も看病してたからな」と涼は笑っていたが、こっちとしてはへこむ。

だってそうだろ？俺がやった事と言えば買い物と。この林檎の皮を剥きぐらいだ。

他の事は俺がやる前に涼がテキパキとやってしまってこる。その林檎の皮むきすら、まともに出来ていない。

なんて俺、使えないんだ……

ため息を吐きながら、俺は階段を昇り桜音の部屋へと向かった。

「どうだ？もう少し食べれそうか？」

「……うん。あと一口だけ」

俺はその返事を聞き、摩り下ろされた林檎をスプーンですくうと、それを口元まで持っていく。

すると桜音の小さい唇が開き、そのスプーンを口の中に招き入れた。

よかつた。少しだけど、食べられたみたいだな。

左手に持つているガラスの器には、摩り下ろされた林檎があと三分の一ほど残されている。

桜音はさきほどよりは、大分良さそうだ。  
わざわざしゃべるのもだらうだつたからな。

おそれく、薬のおかげで熱が下がつてきているからだう。  
今では、熱が37・5度まで下がっている。

涼の話では薬が切れるとまた熱が上がつてくるりくへ、一時的なものにしかすぎないそうだ。

「じゃあ、林檎も食べたしまた少し休もう。後で夕食持つてくるか

「うん」「うん」

桜音は俺の言つとおり、ベットへと横になつた。

寒くないのかな？毛布とか何か増やした方がいいか？

桜音が寒くないよう布団をなおしながら、もう一枚毛布か何か増やした方がいいか考えると、「海」と桜音に名前を呼ばれた。

「どうした？もしかして寒いのか？寒かったら毛布増やそつか？」

「ううん、違うの。あのね、指どうしたのかなって

桜音の視線は、俺の絆創膏だらけの指。

「これは

」

思わず言葉に詰まった。

林檎剥いて指切つたなんてカッコ悪すぎると。

きっと涼ならこんな傷だらけになつたりはしないだろう。

俺の頭の中には、また涼に対しての敗北感に占められ始めた。

「海」

俯く俺の顔に、温かいぬくもりが触れ、視界が桜音に切り替えられる。

頬に感じたのは、いつもと違ひ少し熱めの桜音の手。

「林檎の皮剥いてくれたの海なんでしょ？大丈夫？傷痛まない？ごめんね、私が風邪引いちやつたから海にいろいろ迷惑かけちゃって……」

「なんで桜音が謝るんだ？謝るのは俺の方だ、俺は桜音のために何かしたい。でも俺、桜音に何もしてやれてないんだ。誰かの看病するのも初めてだし、桜音の好みもわからなくて……涼と違つて足でまといにしかなつてないんだ」

桜音が心配で早退してきたのに、俺は何もしてない。

一緒に暮らしているのに毛布などの場所も分からず、ほとんど涼が全部やつてしまい、俺がやつたのは買い物と林檎の皮むきだけ。その皮むきすらまともに出来ていない。

使えない上に、その上怪我の心配までそれでしまつなんて申し訳なさすぎる。

「ううん、そんな事ない。海はちゃんとしてくれてるよ。だって怪我しながらも、一生懸命林檎だつて剥いてくれたでしょ？だから嬉しい。ありがとう」「ううん、そんな事ない。海はちゃんとしてくれてるよ。だって怪

ありがとう。

その言葉がなぜかとんと胸に降りて来る。

俺は桜音のありがとうを聞いて、さっきまでの沈んでた気分が嘘みたいに晴ってきた。

それは惚れた弱みのせいなのか、俺が単純だからなのか、それとも両方なのかはわからない。

ほんとすごい、桜音。

今まで当たり前のように使っていた「ただいま」も「おかえりなさい」なんかも、桜音が関わると色づく。

「なあ、桜音。早く元気になつて、イチャつこつな

「うんっ！……つて、えつ！？」

「うんつて言つたな。言つたからには、有言実行だぞ？ 桜音が元気になつてくれるよう、俺がちゃんと誠心誠意看病するからな」

早く元気な桜音になつて、一人で些細な事で笑いあいたい。  
だから、早く元気になつてくれ。桜音。

番外編 甘く 優しく 蕩けるよひ 1 sideみく(前書き)

これもブログからの転載。  
最終章の十五・十六話でみくが、ちらつと話してた内容です。  
みくが海の好きな人を知ったきっかけ。

暑い。暑すぎる。

日差しを手で遮りながら空を見上げると、雲一つない晴天だつた。さつき校舎を出たばかりなのに、もう制服のワイヤーシャツが肌に張り付き、気持ち悪い。

こんな暑い中、アタシが外に行く理由はただ一つ。

アイスだ。

アイスが無性に食いたくなつて、今から学校を抜けて買いに行つて来るのだ。

この中庭を抜けて、東棟に向かつ。

そこから一番奥の空き教室に向かい、裏門を出ればコンビニはすぐそこだ。

あ～、でも自販機のジュースで我慢しどきやよかつたかも。あまりの暑さに外に出た事を後悔した時、ふいに視界に人の姿をとらえ足を止める。

あれは

アタシの視線は中庭の中央にある大きな桜の木の下にいる人物に釘づけになる。

そこには女子生徒をお姫様抱っこしている男子生徒の姿があつた。

「あ。あれ、在原海じゃん」

そいつはうちの学校で千里に並ぶ人気を誇っている人物で、家は会社経営、容姿端麗、頭脳明晰　他人が欲しいものを全部持つてい

るようなやつ。

その為他の連中から王子だなんだって騒がれているけど、アタシにはどうでもいい。つうか、むしろ気に食わない。

なぜなら、新聞部主催の人気投票で一位を取っているから。大体、千里を差し置いてアイツが一位つてなんなのよ！－！

それに

時折妙な視線感じるんだよね。  
いつもじゃないんだけどさ……

どれどれ、相手の女の顔でも拝んで行くか。

新聞部に提供してスクープになれば、人気投票ランキング落ちるかもしれないし。

そんな軽い気持ちで相手の女を確認するために、相手の女に視線を移す。

え。

「……桜音」

呟くアタシの声が風にかき消されてしまう。  
たしかに中庭に行くつて言つてた。

けど、なんで？

この二人の関係つて一体なに？

わけがわからず茫然と立ち尽くしていると、「佐々木」と呼ばれ我に返つた。

呼ばれた方を見ると、在原海がこっちを見ていた。

「そこでぼーっと突っ立ってるのなら、悪いが飲み物買ってきてくれないか？できれば、スポーツドリンク

「はあ？」

ただでさえ理解出来ない状態なのに、なぜこいつにパシリにされなきやならないんだ！？

つうか、ぼーっと突っ立っているのならって何だよ。なんか、アタシが暇そうじやんか。

「俺のズボンのポケットから、財布取つてそれで買つてきて欲しい。佐々木の物も買つてきていいから」

「ふざけんな。なんで、アタシがあんたのパシリにされなきやなんないのよ？」

「俺の分じゃない。桜音の分だ」

「は？ 桜音？」

ますます理解不能。

「ああ。大分汗かいてるから、起きた時きつと喉乾いでいると思つから」

たしかに、桜音の額や鼻には大粒の汗を見る事が出来た。

「まさか桜音、この炎天下の中寝てたんじゃないでしょうね！？」

「……寝てた」

在原の返答に思わず頭を抱えた。  
きつと桜音の事だ。

日向ぼっこしてたら睡魔が襲つてきてそのまま寝ちゃつたんだろう。  
ほんとに桜音は一度寝ると起きないんだから。

あ～。外で寝るとか注意しておけばよかつたかも。

この暑さの中、外で寝てたら熱射病にでもなっちゃうじやんか。

「こ」の炎天下の中寝てて、熱中症にでもなつて脱水症状でも起きたら大変だ。だから、写真部の部室で寝かせる事にする。俺が運んでいる間、悪いが佐々木、飲み物を買ってきてくれないか？」

「……わかつた」

桜音の分じゃしょうがない。

アタシの分も買つていいって言ひし。

アタシは在原から財布を受け取ると、コンビニへと向かった。

## 甘く優しく蕩けるよ♪

マジかよ。

写真部のドアを開けて最初に視界に入ったのは、ソファで眠る桜音を床に座りながら愛しそうに見つめている在原海だつた。

時折桜音の頭や頬を撫でながら、甘ったるい空気を醸し出している。「あんた、桜音の事好きなの?」

思わず出た言葉に在原より先に答えたのは、イスに座っている金髪バカ猿だつた。

「は?お前、あれ見てわかんねえの?」

イスに座っている金髪バカ猿　日下部が携帯片手にこっちを見ながら言った。

やつの机の上には、昼御飯の途中だつたのだろうかパンや紙パックの飲み物が乗つている。

「……わかるわよ。ただの確認だつうの」

あんなの見てわかんない人間なんていない。

蕩けそうな表情で桜音を見つめているそいつは、人がいるにも構わず桜音の事を好きすぎてしようがないオーラを全開にしているから。普段無表情に近く、愛想の欠片すら持つてないような奴なのに。

「買つて来たんだけど?」

「ああ、ありがと」

名残惜しそうに桜音の頬から手を離すと、在原はこつちに来た。

そしてアタシから財布とコンビニの袋を預かる。

その表情はさつき桜音に向けていたものとは違い、すっかりいつも

のクールな王子様に戻っていた。

別にこいつの事はどうでもいい。

いや、むしろ気に食わない。

だが、こつも差をつけられるとムカつく。

「しかし、まさかあんたが片思い中だとはね~」

「……なんで片思いだって思うんだ。付き合ってるとか考えないのか?」

決め付けた言い方に少しムッときたのか、在原の声色がほんの少し変わった。

「思つわけ無いじゃん」

そりやあ、ここだけの話ちらつとは思ったわよ。

でもアタシは桜音にそんな事聞いてないもの。

まあ仮にここで在原が肯定してたら、今すぐ桜音叩き起<sup>ハ</sup>して問い合わせてやつてたけどね。

「ねえ、桜音は気付いてるの?」

「……。」

その反応だと気づかれてないな。

やっぱ、桜音じゃ無理か~。

そりやあ、そうだよね。桜音鈍いし、アタシも気づかないぐらいわからなかつたし。

「海。時間大丈夫なのか?」

日下部の視線が黒板の上に向かつ。

そこには壁に掛けられている時計があつた。

「もう少しなら平氣だ」

王子はそう言つと、ズボンのポケットから携帯を取り出した。

「佐々木、携帯出せ」

「は？なんですよ。桜音の番号なら教えないから」

「それは交換しているから知っている。とにかく出せ。これからバ

スケ部の集まりがあるから時間がないんだ」

「ちょっと！あんた達番号交換してんの！？」

「してる。いいから、け」

「良いわけ無いだろ？が！？」

「こいつらに一つの間に。

学校でそんな様子見た事ないつうの。

でも、あきらかに何かあるはず。

ちょっと桜音。アタシ何も聞いてないんだけど！――

未だにすやすや寝ている桜音が恨めしくなり、睨んだ。

すると桜音は「ひり」と寝がえりをひき、「ひらり」に背中を向けた。

「俺と桜音の事は、理由があつて言えない」

「何よ理由つて？」

「俺からは言えない」

「もつたいぶらないで言えよ」

「そつやすやすと言えない事なんだよ。だから桜音も佐々木に言え  
ないんだと思つ」

「……わかった」

今ここで無理やり聞きだしてもこいつは絶対に答えないと思つ。  
桜音なら問い合わせれば教えてくれるかもしれないけど、できれば自  
分から言つてほしい。

仕方ない。桜音が自分から言つてくれるのを待つか。

「それで、佐々木。悪いがほんとに時間がないんだ。赤外線使える  
よな？俺に送つてくれ。後でメールで俺のアドレスと携帯番号送る  
から」

「あなたの番号とか必要ないんだけど」

「万が一、桜音に何があった時のためだ。そうすれば、真っ先に俺に知らせられるだろ？一応防犯ブザー持たせているが何が起こるかわからないからな」

「……あれお前が持たせたのか」

桜音の通学カバンには、一見キー ホルダーにしか見えないキャラクター物の防犯ブザーがつけられている。

その他にも私服の時に持つカバンには、バックチャームと一緒にハート型の防犯ブザーをつけるなど桜音は防犯ブザーの使い分けをしていた。

なんでも、「危ないからって着けられたの。外すと怒られちゃうんだよね……」って言つてた。

あれ、この王子の事言つてたのか！！

## 甘く優しく蕩けるよつよ

あいつ何様のつもりだつうのーー

アイスを貪りながら、アタシはさつきあつた事に対してもカツいていた。

普通時間無いからって、無理やり人の携帯奪つて赤外線通信するか！？

こつちは交換したいなんて一言も言つてねえのに。

あの王子は無理やりの赤外線通信を終えると、足早にバスケのミーティングへと向かつて行つた。

時間がないくつて言つてたわりには、ちゃんと桜音の寝顔を見てから行く所がムカつく。

「そんなんに一気に食うと痛くなるんだ？」

「うるせー………… 痛っ」

頭を押されて、その痛みが遠のくのを待つた。

どれもこれも在原のせいだ。

「だから言つたじやねえか、あいつの事はしょうがねえと思つて諦めろつて。逢月が関わるとあんな感じになっちゃうんだ。なんせ、初恋真っ只中だから」

「は？」

皿下部の言葉に、スプーンが止まる。

「誰も思いもしねえよな。あの在原海が今まで恋した事なかつたなんてよ。この天然女の事好きになるまで、女きたことなかつたしあの王子の初恋が桜音……？」

たしかにカレカノつて言つてもお互い好き同士で付き合つてゐる奴

らばかりじゃない。

アタシも千里の事を忘れてたくて違う奴と付き合つた事あるし。

「まつたく海といい水谷と藤原といい、逢月の何処かいいんだか…」

「桜音可愛いじゃん。女の子らしくてふわふわした感じで。ピュアで、つっこちが守つてやりなくなるもん。だから、涼も千里も惹かれたんじゃない？」

桜音には悪いけど、羨ましいを通り越して妬ましく思つ時もあつた。アタシじゃ桜音みたいになれないから。もし、アタシがこんな風なら千里は好きになつてくれたかもしけなつて思つてしまつて。

「そつか？俺はお前みたいな女の方がいいけどな」「はあ！？」

やばい。一瞬ときめきかけた。

不覚だ。口下部なんかにときめくなんて…！

「何赤くなつてんだよ。あ、お前もしかして勘違いしてんのか？悪いけど、俺は部長命だから」

「黙れ、金髪猿」

こいつが同じ写真部の部長が好きな事ぐらい知つてる。

犬みたいにまとわりついて追い払われてるのは、もう日常の光景だ。

「逢月だつて、お前の方がいひつて言つた？」こいつは、お前に憧れてんだからな

「桜音が？嘘でしょ。アタシ言われた事ないもん」

「マジだつて。起きたら聞いてみろよ」

「んなこと聞けるか」

私がそつぱつと、田下部は「しょうがねえな」と呟いて口を開く。

「お前のせばせばした性格も出る」と出た体も、お前が嫌がつてゐるその身長だつて、逢月にとつてはモテルみたいで羨ましいんだと「これが……？」

私にとつては、身長はコンプレックスだ。

174?の私は、155?の桜音が羨ましいつてずつと呟いてきた。

「もし自分が男なら、絶対みぐの事彼女にするつて言ひべりいだぞ？」

「桜音が男ならね~」

桜音の男バージョンなんて全然想像出来ず、思わず笑つてしまつ。

「人つてそんなもんのかもしんねえな。自分の事はよく見えてなくて、他人の事はよく見える」

「たしかにそうかもね」

「まあ、でも良かつたな。お前、女で。海の嫉妬それぐらいで済むじゃねえか」

「は？ 嫉妬？」

「……もしかしてお前も鈍いのか？」

「鈍いなんて言葉、生まれてから一度も言われた事ないつうの」

そつぱうと、田下部はため息をはいた。

「いいか、逢月がそつぱつてるぐらいお前の事が好きなんだぞ？」

「あんた、アタシの性別わかつてんの？」

「あいつには、んな事関係ねえ。お前、突き刺さるような視線とか感じねえか？」

「あ~。そう言えば」

アタシには身に覚えがある。

時折感じる妙な視線。

その視線に気づき振り返ると、必ず在原海がいた。あいつ、人の事睨むようにしてこっち見てたつて。

……ん？

「ちょい待て！…まさかあれ嫉妬されてたからなの…？」アタシ女なんだけど…？」

そう言えれば妙な視線を感じる時、いつも桜音が傍にいた。「だから、男とか女とか関係ねえって言つてるだろ？」「まさかあいつそこまで器小さい男だなんて…」

桜音は大丈夫なの？あいつかなり嫉妬心強いじゃん。しかも器小さいし。

急に桜音の事が心配になり、自然と視線は桜音に向く。人の心配をよそに、起きる様子もなくまだやすやす眠つている。

「大丈夫だ。海は、逢月の傷つくような事はしない。飴玉に砂糖と蜂蜜つけたぐらいたまに溺愛してるからな」「何その胸やけしそうな例え…」

「それぐらい甘いって事だ。だが、それにも逢月はまったく気付かない。たまに海が可哀想に思えてくる」「桜音だからね」

そうやすやすと桜音のことを落として貰つては困る。

だって桜音が王子の事を好きになつたら両思いになつてしまつ。そんな事になつたら、アタシが桜音と遊べなくなるじゃん？あの独占欲の塊のことだ、絶対桜音の事を離さないはずだもん。

そんな風に思つていたアタシだったが、まさかこの時すでに桜音が王子の事を好きになつていたなんてしるわけもなかつた。私がその事を知るのは、そう遠くない夏休みの事になる。

404

番外編 無防備誘惑 side日下部（前書き）

ブログ転載。

しつかし、この炎天下の中良く走れんな。

外は相変わらず雨の気配すらなく、ひらすら太陽が照らし続けている。

俺はそんな外とは対照的にクーラーのきいた教室で、ソーダーアイスに繕つぎながら、グラウンドで走るサッカー部や陸上部を見ていた。

すると、後ろからため息を吐くのが聞こえてきた。

珍しいな。あいつがため息なんて。

振り返ると海の奴が机に頭を抱え、うな垂れているのが見えた。

「何で夏なんてあるんだよ」

そう吐き捨てるど、またため息を吐きだす。

珍しく愚痴っぽく吐き出したあいつのその言葉には、たしかに同調する。

俺は暑いのは嫌いだが、クーラーのような人工的な空気もあまり好きではない。

その為、一番過ごしやすい春や秋が一番好いている。

「んだよ、海。 夏バテか?」

「違う。 桜音が……」

「逢月?」

「ああ。 ここんところ暑かつただろ? 桜音が家でショートパンツとかキヤミソールとか履くんだよ……。 しかも風呂あがり。 桜音は俺が男だつて忘れてんのか?」

それか。

まあたしかに、生き地獄だよな。

自分の好きな女がそんな格好でウロウロしてて、手出せないなんてよ。

つたく、逢月ももうちょっと氣いつける。

どんだけ鈍いんだよ。

「こままでと、誘惑に負けそつだ」

「んなら、夏の間だけ実家帰れよ」

「そんな事したら、桜音の無防備な姿が見れないだろ！！無防備な桜音も可愛いんだよ。それに、一人暮らしなんて桜音には危険だ」たしかに危ないかもしけねえけど、一人暮らしをしている女なんていっぱいいるぞ。

それにこいつが逢月の家に引っ越した時、セキュリティ会社と契約して機械とか取り付けて貰つてるはずだ。

なんでも自分が留守中の、逢月が心配だからって。

「んじゃあよ、見慣れればいんじゃね？」

「は？見慣れる？」

「ああ。俺が今度逢月の水着姿写真撮つて来てやるから、もうちょっと待つてろつて」

キヤミソールやショートパンツより露出が多い水着姿を見慣れれば、そんな気にならなくなるんじゃねえ？

水着の方が露出が多いしな。

さすが、俺。良いアイディアだ。

「おい」

「は？」

ナイスなアイディアなのに、海の声は低く冷たかった。

「なんでお前が桜音の水着が撮れるんだ？」

「なんもん、夏休みと一緒に海に遊びに……」

あ

やべえ。逢月に口止めしてたくせに、自分からしゃべっちゃった……おれるおれる海を伺うと、案の定眉を上げ皿を吊り上げていた。

こいつは逢月の事に関すると、器が小さえ。

そのため、しばしば嫉妬している。

海に行くのは俺だけじゃねえのに……

藤原だつて水谷だつて佐々木だつているの。

それに俺は逢月に誘われた方なんだ。

「ちょっと、話しあおう。つうか、今回は見逃せ。代わりに、逢月から抱きつかれる方法教えてやるから……！」

「……桜音から抱きつかれる方法だと？」

海は怪訝そうな顔でこちらを見ている。

よし、話が逸れたぞ。

「定番かもしんねえけど。逢月よ、ホラーがダメなんだよ。そのくせ怖いもの見たさで、そういうテレビや映画を見ちまうんだと。ホラー映画でも借りて見てみれば、怖がつてくつこくへるとこうわけだ」

許せ、逢月。

元はといえば、お前が原因だ。

「桜音が、怖がってしがみ付いてくる……ありだな」

その後、海がレンタルショップに行つたのは言つまでもない。

番外編 きっかけは、雨（前書き）

ブログから転載。

## 番外編 きっかけは、雨

自分の靴音に交じつて遠雷の音が耳に届く。  
降つてこないと良いんだけどなあ。

窓に近づき、雲を眺める。

どんよりと曇つていて、今にも降り出しそうだ。  
せめて駅に着くまで降らないでくれると助かるんだが。  
そう思いながら、足早に昇降口へとむかつた。

降つてきたか……

俺が昇降口について見えた外の景色は、地面に叩きつけていくような雨だつた。

雲を見る限り、止むのを待つという選択が出来ない。  
弱くなつたら駅まで走るか。

そう思いしばらぐ雲行きを見守る事にした俺は、せつかく履き変えた外履きを内履きに履きかえるべく、また足を元来た道に戻しかける。

その時だつた。

「海」と声をかけられたのは。

その方向を見ると、左側の数メートル離れた所に涼がいた。

普通ならすぐにつつものように何か返事を返すはずだが、この時の俺は返事をする事が出来なかつた。

なぜなら、涼の隣りに桜音がいたからだ。

涼の体に隠れるようにしていた桜音は体を少し前方にずらし、こちらを見ている。

桜音っ！！

いつもは降りしている髪を今日はお団子にしている。

お団子姿も可愛い。

桜音の姿に、つい表情筋が緩んでしまうのを必死に抑えた。

「髪型いつもと違うな」とか声かけたら変か？

それとも、「親父がいつも世話になつて居る」とかか？

俺は桜音と話した事がない。

これまで何度も話しかけようとしたんだが、なかなか話をかける事が出来ないでいた。

ヘタレと言われてもしちゃうがないぐらい、桜音を前にすると黙りになってしまいます。

「海。もしかして傘ないのか？」

「あ、ああ……」

涼が近づいてくる中、乾いた返事が自分の口から洩れる。

俺の視界には相変わらず桜音しか入ってない。

一方の桜音はどうと、「うちらを気にすることなく雨の様子を伺っているようだった。

「傘貸すよ」

涼は傘を差し出してくれている。

涼の申し出はありがたい。

「でもお前はどうするんだ?」この雨だぞ

「ん? 桜音の傘に入れて貰うよ」

「いや、いい」

俺は、傘を涼につき返す。

そんなことしたら、涼が桜音とあいあい傘になるじゃないか…!

しかも桜音の傘は男物と違い、女物だ。

そのため作りが小さいからますます密接してしまつ。

「」の雨だと、やむの待つのキツイと黙つだ。またか、濡れて帰るのか？」「

「俺の事は気にしないでいい。待たせてるんだろ？行けよ

「……わかった」

涼は苦笑いを浮かべると、桜音の元へと向かつて行った。

「じゃあな、海。また明日」

涼がこっちを見ながら手を振ると、桜音が小さく会釈した。たつたそれだけなのに、俺にとつてはささやかな進歩だ。

どうするかな……

離れてはじめた桜音と涼の後ろ姿見つめながら、これからどうして帰るかを考えていると、急に桜音が振り返つて俺を見た。

「…………？」

なんだ？どうしたんだ？

心臓がいきなり早くなり始める。

涼に何か話しかけると、こっちに向かつてきた。

やばい。桜音が来る！！

いや、ただ忘れ物を取りに来ただけかもしない。だが、俺に用事があるって可能性もある。

どうする俺！？

「あ、あのっ！！」

カラフルなドットに傘を持った桜音が、俺の元へと近づいてくる。そんな桜音に俺は動揺を隠せないでいた。

「な、なに？」

「傘、お貸します。せっぽつ、この窓で濡れやがつと風邪ひいやうから」

「ありがと。でも、迎えの車呼んだから傘もついこいんだ」

呼んでなかつたが、そんな事をしたら桜音が涼の傘に入る事になつてしまつからといつて言つてしまつた。

「わうなんですか？だつたら良かつた……じゃあ、さよなら」「ひな」

桜音は俺に小さく手を振ると、少し離れた場所に立てる涼の元へと向かつて行つた。

桜音に話しかけられた！！

もう人目をばからず、嬉しそうに叫びたかった。

桜音にとつては、こんな事忘れてしまつような事かもしけない。でも、俺ことつては忘れられない出来ーとの一つにな。

番外編 練習しましょう（前書き）

久しぶりの合鍵です（^ー^）

## 番外編 練習しましょっ

「……え」

言葉を失つた私の目の前でにこにこと営業スマイルを浮かべているのは、赤い制服を着ている係のお姉さん。  
なぜ私が固まらなければならなくなつたのかは、それはお姉さんに  
よつてさつき耳に届いた言葉のせい。

彼女はこじ、臨海公園にある大観覧車の係員さん。

私と海は学校帰りのデートで、今日はこじに遊びに来ているのだ。

想像もしていなかつた言葉に、私は思考を一時中断させられいる中、  
お姉さんもお仕事だと割り切つているのか、同じ言葉をまた繰り返  
した。

「 本日はカツブルティーとなつております、カツブルの皆さま  
に對して割引が適用されます。もちろん、お子様連れなどの家族に  
も適用されていますよ。頬にキスをされると観覧車の50円の割  
引と実にお得なんです。いかがですか？」  
「いかがですかって……」

50円も割引してくれるのは正直嬉しい。

でもこんな公共の場で！？企画したの誰つ！？

戸惑う私の隣で海は「良いイベントだな」と呟く。

私はそんな海を睨むが、何が嬉しいのか海は私を見て顔を緩まると、  
私と手を繋いだままの状態で軽く屈んだ。

「えつ！？ちょっと、まさかするの！？」

「もちろん。ほら桜音早くキスして」

そう急かされても……

たしかにお姉さんもお仕事つて割り切つてると思つじ、する場所もほっぺだし。

それに海と付き合つたのは夏。

それから大分月日が経つてゐるから、私もそれなりに経験を積み類にキスぐらい出来る　はずがないっ！！

海と私のお付き合には海が私に合わせてくれてゐるため、かなりのスローテンポ。

そのため自分から海にキスしたのなんて、海がみくと日下部君に追試対策として勉強を教えたご褒美としてねだられてやつた2・3回ぐらいだもん。しかも頬だし。

「うう……どうしよう。いけるかな？」

羞恥心と闘つてゐると、「すみません。通常料金で高校生一人お願ひします」という海の声が隣から聞こえてきた。海はそう言つと、私の手を離すと財布から1000円を取り出し置く。

「……いいの？しなくて」

てつきりしなきやいけないと思つて身構えていた私は、どこか拍子抜けした。

「ん？ 桜音こいつの苦手だろ？ 無理強いはしないよ

「あつ、お金私が払うよ」

だつて海には毎回払つてもらつてゐるもん。

だから毎回奢つて貰つてばかりじや悪いから、飲み物代なんかは私が持つよつとさせて貰つてゐる。

「いいよ

「でもつ！－」

「あの。本当に宜しいんですか？」

私の声を遮るように耳に届いた係員のお姉さんの声に、私も海も視

線をそひりに移す。

「別に彼女さんからじゃなくともいいんですよ？彼氏さんからでもお、お姉さん……  
そうにしひり微笑まないで下さい。出来るならこのまま完結させたかったのに……」

だつてそんな事言つたら海は

「ああ。それなら」

海はそう言つと、私の頬にキスを落とした。

「う……恥ずかしいよ……」

「はい。では割引適用させて頂きますね  
早く観覧車の中に入りたい。

羞恥心から顔が火照つているのを隠すため、私は俯いた。  
これ、いつになつたら慣れるんだね。

\* \* \*

「可愛いな。まだ顔が真っ赤だぞ」

「だつて慣れないんだもん……」

熱くなつた頬を両手で押さえる私を海は顔を緩めて見つめている。  
そんな顔をされると、ますます赤くなっちゃつよ。

私は視線に耐えられなくなり、視線を観覧車の窓から見える景色へ  
と移す。

すると町並みが小さく見え、さっきまで私達が買い物をしていたあんなに大きいショッピングモールも小さく見えていた。

「 観覧車つて逃げ場ないよな

「え?」

何の脈絡もないその言葉に視線をまた躊躇に座る海に向けると、口角を上げた海と田があつ。

……あ。なんだろう。今ものすごく嫌な予感がする。  
なるべく距離を置こうと、空いている向かえの席に移動しようとしだけど、動きを読まれていたのか、すでに海の腕の中にいた。

「じゃあ、慣れる練習してみよつか

「えつ！？ちよつ！…ええつ！？」

「大丈夫。こんなに高いと外から見れないし、それにほら前後の『  
ンドラに乗っているカップルも自分達の世界にいるから問題ない。  
だからいっぱいキス出来るだ

「お、降ろして～っ！！」

そんな私のささいな叫びは届くはずもなく、結局私は練習をせざるを得なかつた。

## 番外編 もう一つの合鍵をキミに 1（前書き）

ちょっとトータルを書き換えて番外編です。

短期集中連載といつか、もう書きあげているので見直ししていくので、短期集中更新予定。

「自分で歩けるよっ！！」

廊下をすれ違う生徒達が、私ともう一人の生徒に視線を集中させている。

それも当然。

だつて私は田下部君によつて米俵のように担がれているんだから。

もへ、なんなんだろ？

せつかく涼から貰つたクッキー食べようと思つてたのに〜っ！！！私は諦めを含み、右手に握られているものに視線を向けた。それは水色と白のボーダーのリボンだ。

今日は私の誕生日。

そのため、友達から誕生日プレゼントを貰つた。

その中の一つに、涼から貰つたチョコチップクッキーがある。

この右手に握られているこれが、そのラッピングされていたリボン。

涼つてクッキー作るのが、すつゞく上手なの。

特にチョコチップクッキー！！

「プレゼント何が欲しい？」つて聞かれた時にすぐに「チョコチップクッキー！！」つて毎年リクエストするぐらい。だから食べるのすっごく楽しみにしていたの。

それなのに、せつとく食べようとしたラッピングを解いた瞬間に、突然現れた乱入者のせいで中途半端に中断させられ、肝心のクッキーは机の上に放置されたまま。

乱入者の田下部君は、私の意思など関係なく、私を教室から連れだしたのだ。

もうそつからはあつと直つ間。

私は抱がれて今に至る。

「ねえ、降ろしてってばー！」

「ひるせえな。耳元でガタガタ騒ぐんじやねえよーー。」

……え。なんで怒られなきやならないの？

なぜか私は怒鳴られてしまい、口を結んだ。

だつて田下部君見た田もそうだけど、声的に怒ると迫力あるんだもん。

\* \*

何、この空氣？

教室のドアから中を覗くと、みんなの様子が違っていた。

他の教室からは朝の登校時間ともあってか、賑やかな笑い声が聞こえてくる。

それなのに、この教室はしんと静まり返っている。

でもそんな様子の原因も、今ここにきたばかりだけど、すぐにわかつた。

それは窓側の一番後ろの席に座っている人。

頬づえをつき窓から校舎の方を見ているため顔は見えないけど、醸し出している雰囲気と周りの生徒の視線などから原因是明らかに海だという事がわかる。

「海、機嫌悪いの？」

「わかつてんんだつたら、とつとと行け」

「田下部君の方が海と付き合って長いんだから、海の機嫌なおるよう

な事知つていいと思つよ……？」

「だからこうしてお前呼んで機嫌とひきとじていいんだる。ほら、早く行け。あの王子の頭に花咲かせてこの教室を平穏にしろ」

「えつ！？急にそんな事言われて……って、ちょっと……」

とんと田下部君に背中を押され、私は教室内に足を踏み入れてしまふ。

いいのかなあ？他クラスに勝手に入つて。  
そう思いながらも、私の足は進んでいく。

「海」

海の傍に行きそう前方を呼ぶと、海はすぐにはじかれた様に私の方を見た。

最初大きく田を見開いてたんだけど、やがて少し田じりを下げ始めた。

あつ、少し戻つたかも。

海の表情がさつきより、緩んだよつこ感じたのでそう思つた。

海は私の名を呼ぶとトントンと自分の太ももを右手で軽く叩き、腕を広げて自分の所に誘う。  
えつ、もしかして座れつて事つ！？  
ここ教室なんですけど！？

ぶんぶんと横に首を振つてたんだけど、「逢月さん、座つてやってくれよ！！」と教室中から声が私に集中する。  
各自言い回しあは違つが、みんなクラスマッチの時並みに団結力を誇つていた。

それらの懇願は、私に拒否権を「えてぐれないぐらこのもの。  
何、このクラス……」

「し、失礼します」

完全に私に反する空気が流れている。

そんな中逆らえるはずがない私は、大人しく言われるがまま海の膝の上に横向きに座った。

すると落ちないように海の腕が私の体に絡まり引き寄せられ、お互いの体が密接してしまった。

ちょっと！－朝から！？しかも、ここ教室つ－！

「もういい！？もういい！？」

あまりの恥ずかしさに、今すぐ自分の教室へ帰りたい。

だってそうでしょう？クラス全員の視線が集中してるんだよ！？

だが、首を振り拘束を全然といてくれない海にそれが出来ない。周りも周りで「良かつたな、在原」って言つてるし。ちょっとおかしくない？この教室。

あ。でも機嫌は直ってるみたい。

海は私の首すじ辺りに顔をうずめ、ぎゅっと抱きしめている。わずかに見えるその様子から、その表情はいつも海みたいに思つ。

「逢月さん、ありがと。これで海の機嫌良くなるよ~」

「ほんと。助かったよ、逢月さん」

海のクラスメイトと思われる男の子達に声をかけられるけど、お礼を言われる理由が見つからない。つていうか、助かったって？

その疑問は、同じ部活のあんなちゃんの言葉が解決してくれた。

「元はと言えば、あんた達がクッキー食べたのが悪いんでしょ？せっかく在原くんが、桜音の誕生日に手作りクッキー作ったのに」

腰に手をあて、あんなちゃんはため息を吐きながら、せっかく私にお礼を言った男の子達を見ている。

「いや、だってさ、まさか海が作るなんて思うわけないじゃん!!」「そうそう。それに海の机の上に置いてあるものや、ゲタ箱に入っている手作り糸は食べていいって暗黙の了解があるしや」  
あ~。もしかしてあの話かも。

私には思い当たる事があった。

海が誰にも手作りは貰わないって話は有名。

付き合つ前から知つてたけど、その事かもしれない。

渡されたら断るし、勝手に机の上に置かれたり、ゲタ箱に入つてい るやつは自由に食べていいいんだって。

みんなそれをわかってるけど、もしかして食べてくれるかもっていう想いがあるので置いていく。  
その気持ちは私には痛いほどわかる。

気まぐれで食べててくれるかもそれないって思つんだよね。  
海に片思い中に机の上に置いて貰つたことがあるもん。

「でも逢円さん、食べなくて正解だつたつて。あれ、すっげえマズイから」

「マズイって何だ！…！」に決まつてるだろーー！」

今までずっと黙っていた海は、眉をあげながら口を開く。

「いや。お前あれ皿いつて感じるなんて、味覚やばいって……。なあ、田中

「ああ。ちよつとあれば酷い」

「それは、たまたまあ前らの味覚に合わないだけだろ。ちやんと皿いつて言つたぞ？」日下部は、「

みんなの視線は、ひそり逃げようとしている日下部君の背中に注がれる。

あ～。日下部君お菓子も作れるもんね。

見た目とは違つて料理もするし。

「お前つ……」

逃げる日下部君に対し、海の怒鳴り声が降り注ぐ。

日下部君はそれに、大きに背中をビクつかせたかと思つたら、ゆつくりとこひらを振り向いた。

「だつてしょうがないだろ、何回教えてもお前上達しなかったじゃんかよ。しかも、失敗したやつ俺に寄こすしー！大体どうじしたらあんなに不味く作れるのか、俺には理解出来ない

「そんなにマズイ物を、俺の桜音に食わせようとしたのがー？」

「食わせようとしたのは、お前だる。大体味見ぐらい自分でしらつての。それに、元々はお前が作った物だらうが！！」

とりあえず、海のクッキーがおいしくないって事はわかつた。  
一見完璧な海だけど、料理関係は全く駄目。  
海、お菓子作りも苦手だったんだ～。

「そもそも水谷に張り合つてクッキーなんて作るから悪いんじゃねえか！！」

「俺のせいいかー？」

「他に誰がいるんだつうの。無難にお前が三ヶ月かけて選んだプレゼントだけにしておけばいいんだよ！！それなのに、オプションでクッキーなんてつけるから駄目なんだろ！！お前自分でも料理も菓子作りも壊滅的に駄目な事知つてるくせに」

「……だつて桜音が、毎年チョコチップクッキーを美味しいって食べているから。だから俺もチョコチップクッキーを作つたんだ」たしかに私が涼に毎年プレゼントと一緒に貰つのは、チョコチップクッキー。

海、もしかして涼に聞いたのかな？なんてことを思つてると、「えつ」という声が耳に入つていた。

「あれチョコチップクッキーだったのかー？」

田中君達の重なつた叫びに対し、海は鋭い視線で突き刺す。すると彼らは震えあがり、日下部君の陰に隠れ「逢月さんつ～！」と私に助けを求めてきた。



海つてば、一体どんなクッキーを……？  
でも、どんなのも海が私の為に作ってくれたのなら嬉しいって思  
う。

それが苦手なお菓子作りならなおさらだ。

なんか悪戯苦闘する海を想像すると、可愛いかも。  
だって、絶対にボウルとかひっくり返してそうだもん。  
お料理手伝ってくれる時もそうだったんだよね。  
なんでも器用にこなすのに。

そう思つてたら、思わず笑っちゃつた。

「桜音？」

「いめん。なんか、海のそういうところも好きだなって」  
そう言つて胸にもたれかかり海を見上げると、ぽかんとしていた海  
の表情がみるみるうちに真っ赤に染め上げられていく。  
あれ？耳まで真っ赤だーと思つたら、なんか震え始めちゃつて  
いる。寒いのかな……？

海の不自然な様子に問いかける間もなく、私は強く抱きしめられた  
かと思うと体がきゅうに宙に浮くような感覚に包まれた。  
どうやら私は海に抱きかかえられてしまつたみたい。

私はそのまま海に教室の外へと連れて行かれそうになつてしまつた。

「おい、海。逢月は授業までは戻せよ~」

手を振り見送る田下部君がものすごく速く小さくなつっていく。

そんな光景を見ながら、私はまだ何処に行くんだろう？と他人事の  
ように思つていた。

\* \* \*

空は晴れ渡り、時折温かな春の風が吹き抜けている。屋上だから何の障害もないのに、その風をよりよく感じるのはかもしれない。

このまま眠ってしまいたくなるようなそんな日差しの中、私はただ、自分を抱きしめていた人に縋りついていた。

こういう事だったのか。そう気づいた時には遅い。私は学習能力がないのか、いつも後で気づく。

「が、学校ではキス禁止って言つたでしょ！…」

「ん？」

海は目を細めて笑いながら、私の頭を撫でる。うう。またそうやって弱点を……

「誕生日おめでとう。桜音」

そんな耳元での海のささやきに、体温が一気に上昇してしまった。駄目なのに…！…そう思つても勝手に体が反応してしまつ。だつて赤くなつたら、なかなか戻らないもん。

これから数分後に授業だから、顔赤いとみくに絶対に突っ込まれちやうじやんかつ…！

「あ、ありがとう」

「学校早く終わって欲しいな。そしたら、桜音とゆっくり出来るんだが……」

「まだ、1限すら始まつてないよ?」

「そうだったな」

「そうだよ」

二人して額をくつつけクスクス笑いあつた。

海と付き合つて、本当に些細な事にすら笑うようになつていつた気がする。

こうして海と一緒に時間を過ごせるのはどれくらいなんだろ?つて時々頭によきり、不安になつちやう。

海はお兄ちゃんに結婚とか言ってくれたけど、この先いつぱいいろんな人と出会う事になるはずだ。

綺麗な人だつているし、家柄だつてちゃんとした人もいるはず。

海がそつちの人を好きになることだつてあるから。

「……桜音。どうした？」

ほんの数秒間の出来」とだと思つていたら、以外に結構間があつたみたい。

海が不審に思つたのか、私の頬に海の手を添えられ顔を上向きにされていた。

あ……ちょっと考えすぎちゃつたかな。

「ううん。なんでもないよ。あのね、来年も一緒にお祝して欲しいなって思つてたの」

とつせに出たその言葉。

これは決して嘘なんかじゃない。

今はたしかな保障なんてないけど、ただその言葉だけが欲しい。

「当たり前だ。来年だけじゃない。この先もずっとずっと俺は桜音の誕生日をお祝いするわ。出来れば一番におめでとうを言いたいけどな」

「え？ 海、朝一番の電話で言つてくれたよ？」

私、朝方に生まれたから朝起きた時には、もう自分の誕生日が過ぎている。

だから、朝起きて一番に聞いたのが海だった。

モーニング「ホールつてわけじゃないけど、海からの電話で起きたから、一番は海だ。

「ちがうよ。いつもして顔見てちゃんと言いたいんだ。那智さんは泊まりすら許してくれないから、同棲なんてたぶんもつてのほかってタイプだろ？ やっぱり、顔見て言えるようになるのは結婚してからかもな。大学出て社会人として桜音を養えるようになつてからだか

ら、やっぱ長いな……

「結婚してから……？」

「ああ。那智さんだつて、結婚してから桜音と一緒に住むのに文句言えないさ。結婚自体は反対されるかもしれないが、そこはなんとか通いつめて理解して貰うよ。幸いな事に桜音の両親にはもう許可貰っているし」

「……は？」

「知らなかつたのか？大分前だぞ。桜音と付き合つた事を報告した時だから。もしかして、言つてなかつたか？」

その問いに首を左右に大きく振りまくつた。

聞いてないし！お父さん達も何も言つてきてないし！――言つてよつ――

お父さん達、どうとらえたのかな？もしかして本氣にしてないとか？それとも私と同じようにまだ高校生だからとか思つているのかな……どちらにせよ、聞こてないといつことには変わりない。

「それでな、桜音。本当は指輪にしようかと思つたんだが、やっぱり指輪は本番にして欲しい。だから、これを――」

海はズボンのポケットから何かを取りだすと、私の手を取りそれを私の手を包むように片手を添えながら、私の手の平へとのせた。冷たい鉄のような堅い感じがするその物体。

海の手が離れて見えてきたのは、アンティーク調の鍵だった。

「言つておくけど、これ誕生日プレゼントじゃないぞ。プレゼントは他にちゃんと用意しているから」

「え、うん。ありがとう」

「出来れば大切に持つていて欲しいんだ」

「うん、もちろんっ！！でも、この鍵何の鍵なの？」

「それはまだ秘密。俺が小さい時、母さんと約束したんだ」

「お母さんと？」

たしか、海のお母さんって海が小さい時に病気で亡くなられたんだよね。

いいのかな？私が貰つちゃつても……

「ねえ、本当に私が貰つてもいいの？」

「ああ。俺の大切な人は桜音だから」

「ええつ！？」

思わず大声が出てしまい、口を押さええる。うう……ここ学校だった。

幸いなことに、海と私しかいなければ。

「なんだよ、その『反応』」

海は眉を顰めながら私を見つめている。

「だつて、大切つて……私のこと……？」

「伝わつてないのか？だったら、時間かけて伝えるぞ？俺がどんなに桜音の事を思つているのか」

「いい！！いいから！！」

やけに接近してきた海に、ちよつとした恐怖というか、身に危険を覚えたので少し後ろに下がつて距離を取つた。

「これ、使えるの？」

「もちろん。メンテナンスして貰つていいからな

「メンテナンス……」

呴き鍵を見るけど、海が言つてゐる意味がわからない。

わけがわからずじつと見つてゐると、持つてゐるものと同じ形状の鍵が皿の前に差し出された。

「あ。同じ……？」

「ああ。合鍵だからな」

「合鍵……」

確認するように呟くと、海が頷く。

「桜音。それちゃんと大事に取つておいて欲しいんだ。ちやんと使う日が来るから」

「うん」

私は無くさないよう、ハンカチを取り出し包み込んだ。家に帰つたらチーンでもつけて、ネックレスにしよう。そつすればきっと無くさないだろう。

「ねえ。でも、この鍵そもそも何の鍵なの？」

「まだ内緒」

「う~。ケチ」

「そのうち もつ少し未来になつたら教えるよ。その時は、桜音が開けて?」

「だから、何を?」

「だから内緒」

急に意地悪になつたのか、海は教えてくれない。気になるじやんか。

結局その後も海は教えてくれなくて、私がその鍵の秘密を知るのは、海の言葉の通り未來になつてから。

それは私が在原桜音になり、二人で新居に引っ越しした時のことだ。

## #ひつ目の合鍵をキリリ 4（後書き）

また気まぐれに番外編を更新するかもなので、その時はまた遊びに来て下さい。

では、こりまでお読み下さりありがとうございました^\_^(ーー)

<

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4258d/>

---

合鍵

2011年7月1日22時00分発行